

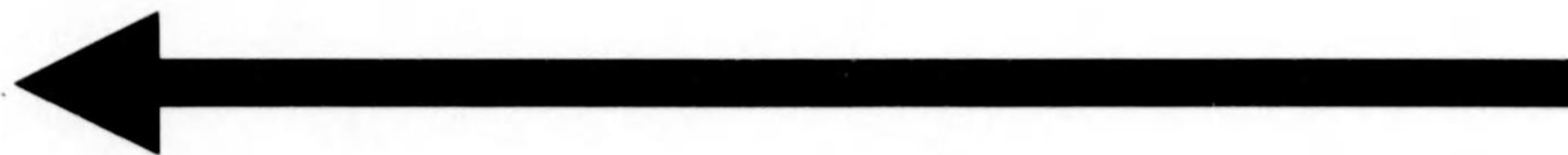
357-294

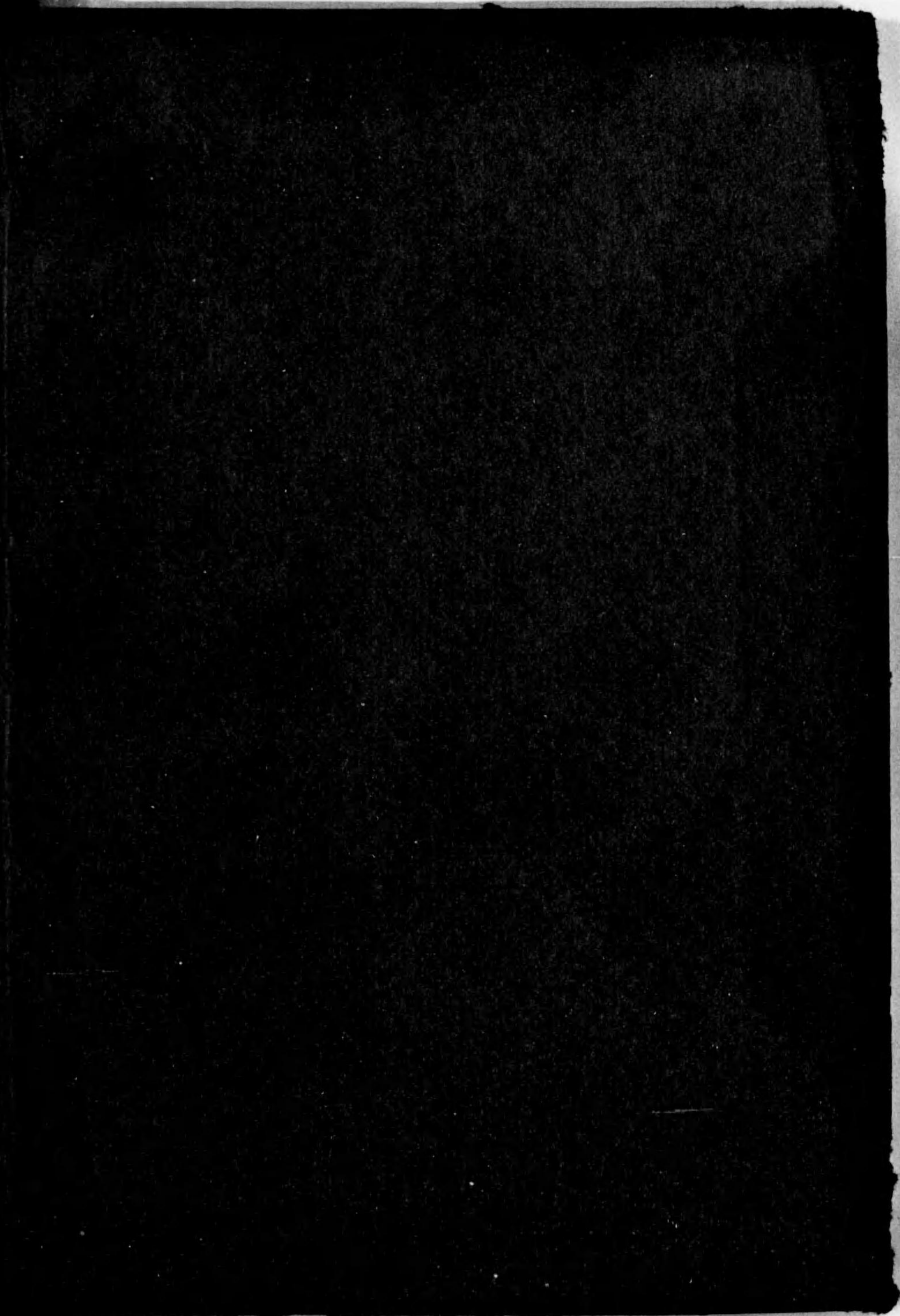
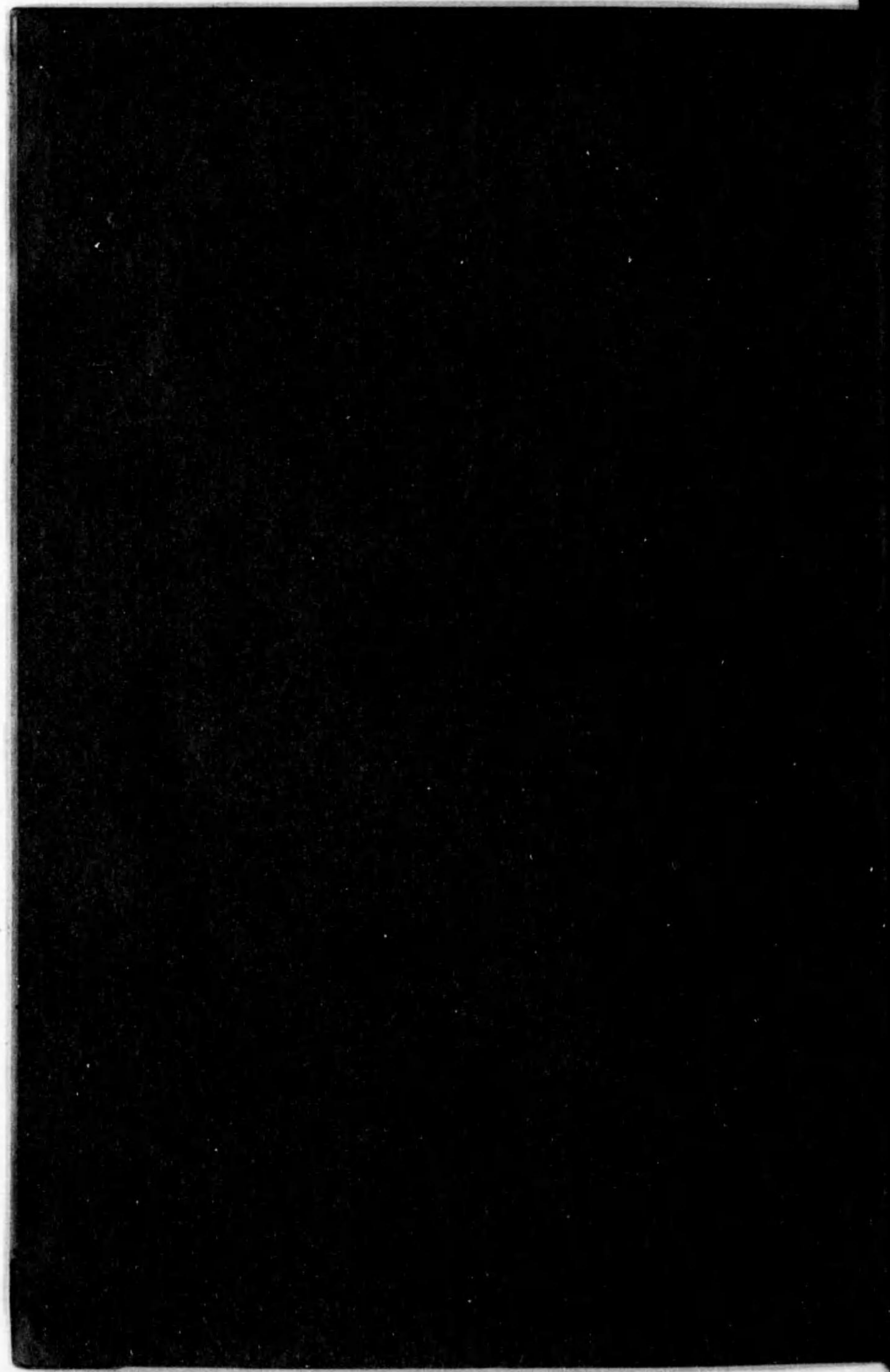


1200501411154



始





都會地因の

# 張月彭

著 郎俊木左佐



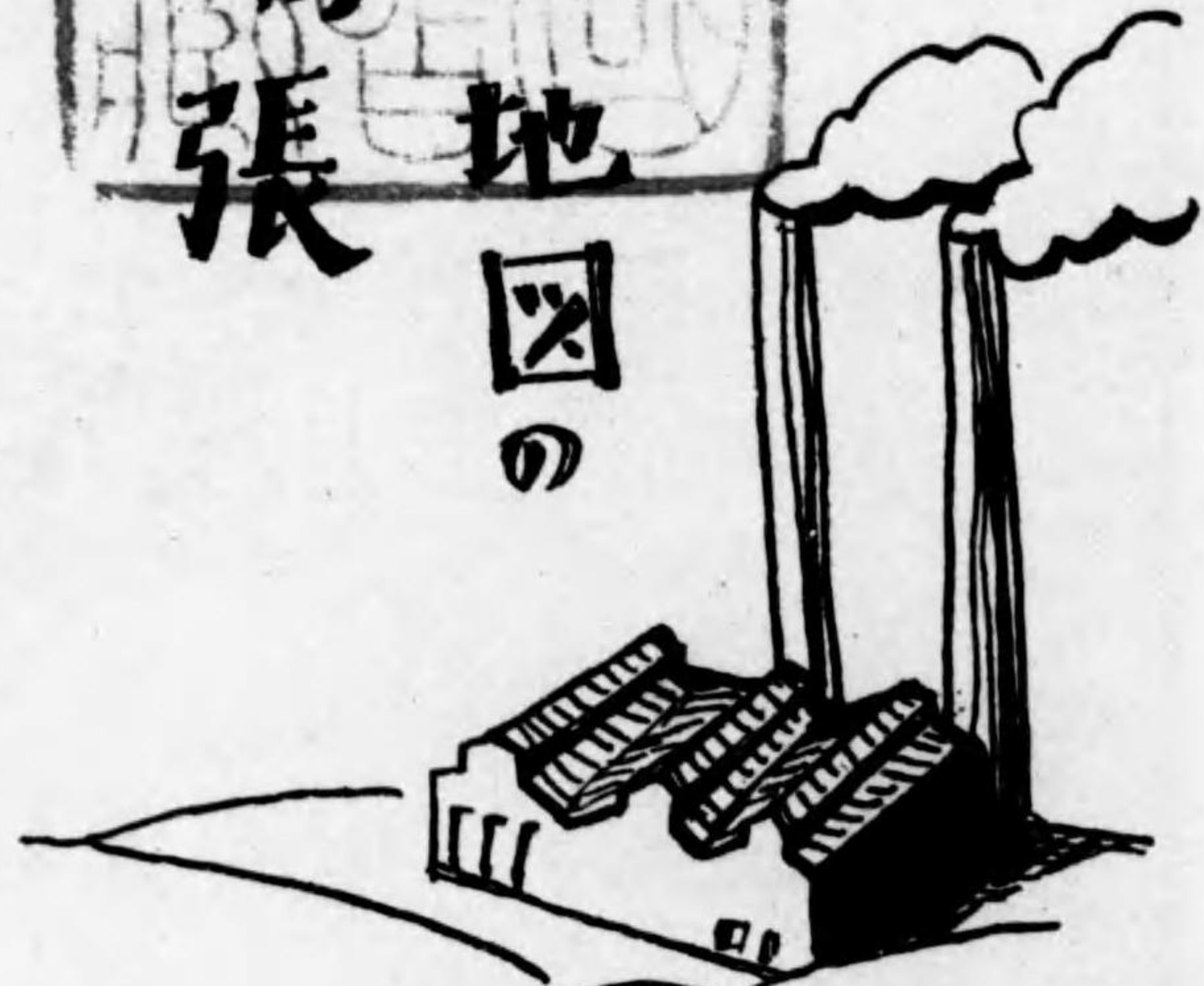
世界の動き社

3 281



都会地  
図の  
膨張

佐左木俊郎著



世界の  
動き社版

357-294

目次

都會地圖の膨脹	一
機關車	三
桐の花	七
山茶花	四
蟹氣樓	五
悪い仲間の話	六
裏面	八
流浪	九
駢落	一〇
桑を植ゑる繭商人	二三



短 篇 小 說 集

都會地圖の膨脹

暴風に別れる言葉	二二九
緑の芽	二一九
闇の音	二六九
不幸な母親の話	二八三
運命を手繰る者	二九七
馬と人間との間	二二三
線	三三二
芋	三三三
脚氣病患者	三三七
横顔	二五九
消息	二六九
蜜柑	二七七
鐵と土地と人間との話	二九三

東 端 小 益 磁

都會地圖の膨脹

—0801—

都會地圖の膨脹



序 景

窓は廣い麥晶の、濃緑の波に向けて開け放されてゐた。操るやうな五月の軟風が咽せかへるばかりの草いきれを孕んで来て、かるく、白木綿の窓帷を動かしてゐた。

南面の窓は並んで、鐵筋混凝土の上層建築が半分ほど出来あがつてゐた。その上に組まれた二本の大きな起重機は、電燈球のやうな薄曇りの空から、長い鐵骨の手を伸して、青い麥晶やそのまはりの小さな建物を掴みあげようとしてゐた。

北側の窓の真ん前には、建築混凝土用の捲揚機が組まれて、大規模の工場が建築されかけてゐた。その建築場と校庭との間には、焼跡のやうな住宅豫定地が擴つてゐた。塵埃や紙屑や、瀬戸物の破片、繩端、木片などが散らばり、埋め、短い青草の禿けてゐる空地。校庭から子供達がときどきそこへ轉り込んで行つた。

建築場の空では、カラカラカララララと、ひつきりなくクレインが鳴つてゐた。混凝土をあける



音は一日中、一定の時間を置いて、窓窓の硝子を震動させた。

尋常五年の教室では地理の時間が始つてゐた。黒板の片隅には、縮尺五千分の一の「本郡全圖」が掛けられてゐた。地圖に對する概念を固めるために、生徒の熟知してゐる土地の地圖に就いて、踏査的教授を與へてゐるのであつた。

「この地圖の上で、煉瓦色に塗られてある部分は、市街から續いて來てゐる郡部の町で、この緑色の部分は、田舎なのです。即ち私達の村がこの緑色の部分なのであります。ところが、これは三四年前に拵へた地圖で、毎年一度づつ訂正を加へてゐるのですが、現在では又この地圖とは大部違つて來てゐるのであります。」

そこで教師は、ぼんと、細い竹鞭で地圖の上を打つた。動きかけてゐた生徒の視線が又一齊にそこへ集つて行つた。

「何處がどんな風に變つたか？ 今日は一つ、皆さんにその變つたところを見つけて貰はうと思ふのだが、さあ誰かわかる人はありませんか？」

教師は又ぼんと地圖を打つた。

「地圖の中央を流れてゐる川の、水の色が變つたのであります。以前は綺麗な水が流れてゐたから水色になつてゐますが、川上に住宅地が出來てから、住宅の人達が、塵埃だの洗濯水だの、いろいろな

穢いものを川へ流すので、現在では、黒い水が流れてゐるのであります。」

「川の、水の色か？ うむ。」

教師は唸つた。そして言つた。

「併し、地圖の上で川を水色にしてゐるのは、第一の目的が（これは川だぞ）と云ふしるしなので、黒い水が流れてゐるからと云つて黒く描いたら、道路か何かと間違はれやしないかな？ 誰か他に……」

「學校の前から、住宅地の方へ行く、眞直ぐな四間道路が新しく出來たのであります。」

「學校の前から住宅地の方へ行く新道。よろしい！」

言ひながら教師は、赤い白墨で、地圖の上に一本の直線を引いた。

「この新道が、去年の今頃から今日までに出來たもの一つ。それから何處かに變つたところが無いかな？ さあ、誰か……」

教師は生徒等へ微笑みかけながら言つた。

「わからないかな？ よしつ！ ぢや一つ先生が見つけて見よう。いいか？ この煉瓦色の部分だ。これは前にも言つたやうに、人家の建混んでゐる都會の色、市街地の色なのであるから、この地圖の上で、當然この色が塗られてゐなければならぬ部分に塗り落されてゐるやうに思ふが…… 誰か、わかる人？……」

「市街地は學校の前まで膨らんで來てゐるのに、地圖の上では、用水堀のところまでが市街地のやうになつてゐるのであります。」

「よろしい！ さうだ。去年の今頃は、市街地はまだ用水堀のところまでしか膨らんで來てゐなかつた。そしてこの學校は、この地圖の上でもわかるやうに、青い麥島の真中まんなかにあつた。ところが市街地は僅か一年の間に、丁度、校長先生のお腹はらのやうに、斯う弓なりに學校の前まで膨らんで來た。そしてこの小學校は、田舎の小學校だか、都會の小學校だかわからなくなつて了つた。」

教師は言ひながら、煉瓦色の白墨で、地圖の上に一本の彎曲線を描いた。生徒等は忍び笑ひをして低聲に囁き合つた。

「騒いではいけない。さあ、此方を見て……」

彎曲線の内部は煉瓦色で塗り潰されてゐた。

「ところで、一體、どうして市街地は、斯うどんどん擴つて行くのだらうか？ まさか校長先生のやうに、御馳走をどつさり喰べたと云ふわけでもあるまい。」

「人口が殖えたからであります。」

「うむ。それもたしかに一つの原因だ。はいっ！」

「田舎の人が、百姓を廢めて、誰も彼も町へ行つて商人になるからであります。」

「それもあるだらう。他に……」

「工業が發達して來たからであります。」

ガザガザァン！

凄まじい音が建築場で撥ねた。混泥土播揚機の桶がはづれたのだ。空で鳴つてゐたクレインの音が止み、人夫等が唳鳴り合ひ騒ぎ合つた。

「おおっ！」

「どうしたんだらう？」

生徒達は總立ちになつて窓に眼をやつた。

「騒ぐんぢやない。騒ぐんぢやない。」

教師は鞭を撻めながら、教壇をおりて、ゆつくりと窓際へ歩み寄つて行つた。

1

部落の中央部に小高い臺地の部分があつた。

臺地の一帯は、南向きの斜平なだらかな斜面になつてゐた。そして、西から北にかけては、厚い雜木林がうねつてゐた。その青い雜木林のところどころから、黒い杉杜がぬいてゐて、例へば空から續く大きな

腕のやうに、臺地の斜面を抱き込んでゐた。

緒土の飛沫を運ぶ春先の暴風に、自然の屏風を備へたこの地帯は、部落中での優良な耕作地であつた。此處に三人の地主が巢を喰ひ、八九家族の小作百姓が生活の大半を托してゐた。

處が、耕作のために年十五圓で貸してゐたその土地を、坪當り月五錢で借り度いと云ふ借手が出て來た。住宅地にするのである。十五圓の貸地代は、一躍百八十圓にまで飛んだ。

貸地代によつて生活してゐる地主達にとつて、耕作價值など全然問題ではない。彼等の知つてゐるのは、所有價值だけである。その土地が、どんな目的に使はれようと、唯地代が多ければ地主達はそれでいいのだ。彼等は何んの躊躇もなしに、小作人達からその耕作地を取上げ、そして更に地代を上げて、借手の出るのを待つことにした。

「併し、われわれはどうすればいいんだ？ 手前等は、そんで地代が餘計這入つて來るやうになつたからよかんべが、一體、われわれは何處から食ふ物を掘出せばいいんだ？」

斯うその小作人達は叫んだ。

「けれども、私等にしたらところで、月十五圓で貸してくれと頼まれてゐる方を斷つて、年十五圓の方の口さ貸して置かぬばならんと云ふこともあるまいからな。せめて、あんたらが、その三分の二位の地代でも出してくれると云ふのなら格別として……」

群山は、他の二人の地主に代つて返事を與へた。

「馬鹿馬鹿しいつ！ 百圓からの地代拂つて、地代分だけでも儲けられしめえ！ 群山さん。そんな馬鹿なこと、あの禿頭にでも教へられたのかね？」

甚吉は太い腕を、胸の上に腕組みながら言つた。群山の話の口調が、彼の地所に家を建てた男にそっくりであつたから。

「併しね。此處へ、別に働かねえでも段當り百八十圓からの金が湧いて來るつてえのに、そこを畠にしてゐたんぢや、全く勿體ねえですからなあよ。」

「勿體ねえ？ ハハハ……」

重次郎が笑ひ出した。地主の野本は、笑ひ出した小作人の青年を、怪訝さうに視詰めた。

「勿體ねえつて云ふんなら、住宅にすんのこと勿體ねえ話だ。畠にして置けえあ、それこそいゝんな食ふ物が湧いて來るのにさ。住宅にしてつたら、せえぜえ、塵埃が關の山だべ。」

「併し、黙つて腕組みしてゐて、百八十圓づつの地代が這入つて來んのですかんな。」

野本は斯う反駁した。

「幾ら地代が這入つたつて、地代がその土地から湧くもんぢやあるめえがな。他所で働いて取つて來る金ぢやねえか？」

「何れにしろ、私等の懐中さ遣入る分にや同じことだから、地主としちや、やつぱり地代のいい方さ貸すことになるね。全く、借手の誰彼を問題にしちやゐねえんだ。問題は、唯、地代なんだから……」

群山はさう言つて頭から小作人達を抑へつけた。土地の使用目的から、地代で及ばない小作人達はそれ以上言葉ではもう何も出来なかつた。

「お氣の毒ですが、まあ、此處の地所はさう云ふわけですから、あんたがたも一つ、百姓なんかやめて了つて、商賣でも始めたらどんなものでせうね？」

河上が微笑みかけながら言つた。この穩かな地主の言葉に對しては、誰もさからはなかつた。

「それさね。」

「さう云ふことになれば、何んかで、出来るだけのことはいたしますから。店を開くと云ふやうな場合には……」

斯う河上は更に付け加へた。

「資本金でもあれば店も結構だが、われわれ、どうして商賣など始められんべ？ 工場さでも通ふより仕方がなかんべ。」

「そこですよ。私の言つてゐるのは…… 勿論、大したことは出来かねますがね。まあ、及ぶだけのことは……」

「併し、皆んな商賣をやり出したら、一體、誰が買ふんですかね？」

甚吉は煙草に火をつけながら、皮肉らしく言つた。

「ですから、それは、斯うしてこれから、住宅地を貸すことにして、どんどんと部落へ人を呼ぶんですよ。さうするてえと、部落はどんどん發展して来る。私達は地代がどつさり遣入るし、あんたがたは商賣が繁榮するつてことになるぢやありませんか？」

「それはさうですね。ぢや一つ、御援助を願つて、商人になりますかな。」

「俺の言つたのは、さう云ふ意味ぢやねんだ。今に言はなくなつて、わかるときが来るさ。一體全體百姓を廢めて、皆んな商人になれなんて、何處の世界にそんな馬鹿な話があるんだ。」

2

南向きの斜面は、雑木林の腕の中で、耕地から住宅地に整理された。

混濁土の泥溝をもつた道路が、青い雑草の中に砂利の直線で碁盤縞に膨れあがつた。碁盤目の中には、十字に樁の籬が組まれた。雑草は雨毎に蔓延つて行つた。荒地野菊が地肌を掩ひ、姫昔蓬が麻島のやうに暗い林になつて立つた。蓼は細いちよろちよろの路をあけて、砂利の上にもで繁つた。

「われわれから取上げやがつて、ああして荒して置けあどうだと云ふんだ。借手のつくまで、耕させ

て置けあ、幾らかかなりの收穫があんのに……」

その土地を取上げられた小作人達、甚吉等はそれを見て、吐き出すやうに罵つた。

併しこの場合は、地主達三人は、借手の要求のままに耕作中の畑の一隅を分割してゐたのでは、二重にも三重にも損なことを體驗してゐた。彼等は私かな戰術をもつて、一本の「住宅地分割貸地」の棒杭に合同したのだつた。

「ちよつと考へると、斯うして遊ばして置いちや損なやうだがね。なあに、町が直きそこまで擴つて來てんのですもの。三人が一緒になつて頑張つてれあ……」

「斯うして置けあ、なあに、一年も経たねえうちに、もう、皆んな住宅になつて了ひまさらあ。」

そこで地主達に残されてある一つのことは、その住宅地を市街地に繋ぐ道路の計畫であつた。

「どんなにしても、二間道路よりや狭く出來ますめえが、坪十圓で賣つて貰ふことにしても……」

「馬鹿馬鹿しい！ あんた！ 道路にする土地を買つてゐられますか？ 買手があつて、われわれの方から賣るんなら別問題ですがね。われわれは寄附して貰ふんですな。」

「寄附して貰へるもんなら、そりや、勿論、それに越したことはありませんがね。」

「そこですよ。あんた！ (土地の發展のため！)と云ふことで、店を出したがつてる奴等をあふるんですなあ。尤も、さうなれば、われわれの住宅地へだけ引張ると云ふわけには行きませえ。その邊

へ二三本、餘計な道路も引張らなくちやね。」

「それで寄附してくれませんか？ 一坪幾らつて、皆んな勘定してゐますからなあ。」

「なあに、皆んな寄附しますよ。百姓を廢めて、店を出したがつてゐる奴等ばかりですもの。店を出すにあ、どうしたつて、自分の地所續きに賑かな道路がほしいですからなあ。」

3

市街地は黒い雲のやうに、青い耕地の上へ、日に日に幅廣く這出した。

そしてこの動んだ膨らみの中で、嵐のやうな叫び聲がひつきりなく續き、市街地は耕地の眞中へと千切れて行つた。家…… 家…… 家…… 家…… 家…… 住宅が出來、商店が開かれ、工場が建つて、市街地の黒い雲は、青い耕地の中の破片に繋がり、續き、そこを直ぐ黒い市街地にしてさふのだ。すると、直ぐ又、その膨らみの尖端から黒い破片が千切れて飛び、黒い雲がその破片に向つて幅廣く這出して行く。同じことが繰返され、繰返され、萎縮を知らない膨脹が續いた。

道路は先づ市街地から住宅分割貸地へ、第一の幹線が通された。併し、地主達の豫定通り、それだけでは濟されなくなつて來た。そこへら一帶の自作百姓達は、誰も彼も、自分の地所の中に道路を通したい希望を持つてゐるからであつた。

「土地の發展のためだ。五十坪や百坪、道路にされたつて仕様ねえ。」

彼等は進んで道路のための土地を寄附した。その新道を前にして、新しくその附近へ移り住んで来る人達を相手の、新しい店を開かうと計畫してゐるからであつた。そして更に、新道を控えたその邊一帯の土地が耕作價值から所有價值へ、無限に騰貴して行くからであつた。

そのために、市街地から住宅分割貸地への四間道路を幹線にして、そこから直角に走る二間道路が幾本も幾本も開かれた。

「馬鹿馬鹿しい！ 土地を寄附してまで道路を開かせてさ。自分の耕す土地を無くなすなんて……」

斯う言つて小作人の甚吉は、白い眼でそれを見るやうにした。

「だつて、あの人達は、その方が得なんだべから……」

「得かも知んねえが、得だから得だからで、耕す土地を皆んな町場にしてつたら、人間は一體、何を食つてればいいんだよ？ 町場になつて、工場が出来たからつて工場からは食ふものが出来めえ？ さう云ふと俺ばかり馬鹿に食意地が張つてるやうだが……」

「工場から、食ふ物は出来ねえか知んねえが、俺、工場さでも行つて働くより仕様がねえ。耕す土地がねえのだから、どうも仕様がねえからな。」

耕作價值が急に所有價值に變り、所有價值が暴騰したために、却つて職を失つた耕地を持たない小

作百姓達は何れにしても土地の發展を欣んではゐなかつた。

「われわれ、百姓でありながら、始めつから土地を持つてねえのだから、どうも仕様がねえ。働く分には、島だらうが、工場だらうが、何處で働いたつて同じことだらうから。」

「それさ。われわれの暮しにだつて、工場で出来たものも必要なのだからな。」

「俺、工場さ行くだ。百姓が出来なくなつても、俺、工場でせえ使つて貰へば、それでいいだ。」

4

島の中に開かれた平坦な新道は、雨の降る毎にひどくぬかつた。わけでも、雨の降り続く季節には苗代のやうな泥濘になつた。

その新道端に店を開き、所有地を住宅のために貸してそれで生活をして行かうと云ふ人達は、新道へ砂利を敷くための寄附金を宛めに奔走した。

部落内の農家へは、自作百姓の豊作と榮三と金平とが雨の降る日毎に廻つた。

「どうもよく降りますね。新道は、まるで泥田のやうですよ。それで一つ。住宅の人達にも寄附して貰つて、砂利を敷き度いと思ふんですが、幾らでも、お思召しで結構ですから寄附して頂き度いと思ひましてね。」

豊作が先づ斯う、燥いだ口調で切り出したのであつた。

「砂利を敷くんですつて？ わたしやあ、砂利を敷いた道路を歩くのあ大嫌ひでさあ。わたしの歩くどこだけ、細くあけて置いて貰ひますべ。砂利を敷いたごろ路ばかりあ、わたしやあ、何んと思つても嫌ひでさあ。」

斯う言つて甚吉はその寄附を撥付けた。彼は、極端に土地の發展を嫌つてゐるのだ。彼は何處までもぢみに百姓を續けて行かうと思つてゐるからであつた。

「冗談は冗談として、住宅の人達にも氣の毒ですし、土地の發展のためですかんね。」

「商賣でもやらうて者にや發展かも知んねえが、われわれ小作百姓にや、その反對でさあ。これまで作つてゐた地所は、やれ工場の敷地に貸すの、やれ住宅に借すのと言つちや、片端から取上げられるし、砂利を敷いた道路の真中で百姓が出来るものでねえしさ、ね。」

「併し、いくら百姓だからつて、道路を歩かねえつてことはねえんですからね。」

「だから、わたしやあ、砂利の敷いてねえどころを歩きますあ。どうせ、道路いつばいには、敷くわけであんめえからね。何處の道路だつて、泥溝際のどころは少し残してあるもんだから。」

甚吉は煙草を燻してゐて、彼等の方には見向きもしなかつた。

「ぢや、甚さんは、自分の土地が、發展しようがしまいが、構はねえつてんだね？」

金平はたうとう角のある語調で言ひ出した。

「構はねえやうだねえ。」

「構はねんだね？ そりや、一體、甚さん、どう云ふわけかね？」

「何んのわけで、そんなことまで調べるんだね？ 一體その寄附つての、何處から出た話なんだね？ 手前達が、勝手にきめて来て、俺が寄附しねつて云ふの、手前達にせえわかつたら、そんでいいぢやねえか？」

「まあまあ、甚さん、さう腹を立てねえで……」

榮三が顔に微笑を刻みながら宥めた。

「面白くもねえ。人を調べるやうなことしやがつて……」

「では又、氣が向いたら寄附して貰ふとして……」

榮三は腰を上げながら言つた。

「向かねえようだね。わたしやあ、何時まで経つたつて……」

5

併し新道には間もなく砂利が敷込まれた。砂利を敷くための寄附金など、最早、彼等に取つては間

題でなかつたのだ。寄附ではなく、彼等に取つては、一種の投資であつた。店を開くための、土地の所有價值を暴騰させるための投資であつた。

部落の形態はそこで完全な分散作用を開始した。誰も彼も半自給自足の素材生産から足を洗つて、扮飾術師になり、消費者にならうとして。

先づ、新道端に店が並び、畠の中に住宅が出来、工場が建つて、耕地は急に市街地の形態を整へかけ、積極的な機構をもち出した。丁度これは、膨脹しつつある團雲に近付いて行く一片の雲に似てゐる。膨脹しつつある機構に合體するためには、矢張、膨脹しつつ近付いて行かねばならないのだ。

耕地はさうして市街地に變つて行つた。其處から自分の生活資料を掘出してゐた百姓達は、當然のこと、他の職業に轉するか、何處かの耕地へ移つて行かなければならないことになつて來た。

「いよいよ賑かになりましたな。斯うなると僮等の家も、どうもあのままぢや置けねえやうですよ。目障りて……」

河上は地主仲間と言つてゐた。

「一つ、お屋敷風に建てかへるとしますか？ この町中さ、茅葺は、どうもね。」

彼等は市街地から、自分達の不調和な茅葺屋根の家を撤消して、新たに瓦屋根の邸宅を構へた。それが現在の彼等の生活に、最もふさはしい居室であつた。土地の所有價值が暴騰して來たため、地

主の彼等は、何等職業らしい職業を必要としなくなつてゐたからである。

そして金平や榮三や豊作など、自作百姓だつた人達は大概、道路を控えてゐる自分の所有地の片隅へ店を開いた。資金の餘裕につれて貸家を建てて行つた。

「今度、店を開いたんですがね。なあに、百姓をしてゐたと思へば、さう儲けなくてもいいんですから……」

彼等はさう言つて、住宅から住宅へ、葉書ほどもある大きな名刺を配つて歩いた。

「若し、知つてる人で、土地を借り度いつて人がありましたら、他所より、地代をまけて置きますから。」

斯う、彼等は、屋敷續きの荒地のことも忘れてはゐなかつた。

全然自分の耕地を持たなかつた小作百姓の重次郎や長助ら七八人の者は、何處かへ移つて行かないかぎり、近くの工場へでも這入つて働くより途がなかつた。住宅や工場のために、自分達の耕してゐた土地が完全に取上げられて了つたからであつた。そして土地の所有者達は、その土地を荒して置きながらも、耕作のためには貸してくれなかつたからだ。

「なあに、工場さ通つて、飯せえ食ひれあ、われわれに取つちやあ、何方だつて同じぢつたから……」  
「わたしやあ、どんなことしたつて、そこへらの工場だけは行かねえ。面白くもねえ。一體、何んの



機械を持へんだか知んねえが、食ふ物の湧いて来る土地を潰してそんな工場なんか建てやがつてさ。最後に、その機械でも食つてるつもりか？ 俺は矢張、何處までも百姓を續けるだあ。」

甚吉は斯う言つて、隣り部落の方へ移つて行つた。そして又そこで、ささやかな小作百姓を續けてゐた。その甚吉の氣持が、工場へ行つた重次郎には判然と呑込めなかつた。

「甚吉さまに言はせると、食ふ物を作るのが一番いいことになるが、工場だつて同じぢつてねえか？ なあ、おうい！ 例へば、百姓仕事に使ふ機械だつたら、その機械を、他の土地で使つてさ、その土地からうんと收穫があるやうにしたら、そんでいいわけだからな。そのために少しばかりの耕地を潰したつて、百姓をやめて職工になるものがあつたつて……」

6

隣り部落へ移つて行つた小作百姓の甚吉に取つて、以前に自分の住んでゐた部落であつた現在の市街地は、まるで自分に關係のない場所となつて行つた。

殆んど自給自足に近い生活をしてゐる甚吉は、自分の收穫物を、市街地へ賣りに行くと云ふやうなこともなかつた。時折に、荷車を曳いて人糞をあげに行くだけが、以前に自分の住んでゐた部落との纏かな繋がりであつた。

併し又それが、以前の小作人間と自分との氣持を、纏かながらに繋ぐ機縁となつてゐた。甚吉は人糞をあげに行つて、どうかすると、工場通ひをしてゐる人達に行き會ふことがあつた。そして、昔のことや現在のことや未來のことに就いて立話をした。けれども、重次郎に行き會つて立話をするのは、それ以來今度が始めてであつた。

「おめえの方はどうだえ？ 甚さん、その後の具合は……」

重次郎は機嫌よく微笑んでゐたが、その顔には、何處となく憔悴した影が流れてゐた。

「うむ。俺の方はまあ、どうにかやつてるが、なあに、相變らず追はれ通しだ。おめえの方はどうだ？ 少しは景氣がいいのか？」

「景氣がいいどこぢやねえ。悪くて仕様がねえよ。日給一圓八十錢で、家族七人と來ちや、景氣のいい筈がねえぢやねえか？ そんで、近近のうちに何んかおつ始まりさうなんだよ。」

「やつぱりな。やつぱり、ちや、工場だなんて大きな顔してゐても、景氣はよくねえんだな？」

「工場は景氣がいいんだ。工場の方ぢや、どんどん儲かつて、又、分工場を建てるつて話だからな。われわれ、そんで黙つちやゐられなくなつて來たわけさ。幾ら工場の方が大きくなつたつて、われわれの賃銀は一向あがらねえんだからひでえや。」

「大きくなるもの、大きくなる一方だ。われわれは又われわれで……」

「今度の分工場つてのは、とても大きいらしいんだ。そら、甚さんの耕つてゐる畠のところ、川に沿うて桑畠があるな。なんでもあそこらしいつて話だぞ。」

「俺の畠のそこへ建てるつて？ 一體、工場の野郎共はなんと云ふ野郎共だべ！ この俺を、一體、何處まで追拂ふつもりだんべ？ あそこへ工場が出来れば、俺の耕つてゐる畠なんか、住宅に貸すからつて、直ぐ又取上げられて了ふのだから……」

甚吉は眼を睨りながら、急に、狂人のやうに叫び出した。

「だからよ。甚さん！ 工場はさうして大きくなつて行くのに、われわれは一向に……」

「一體、何處まで手を擴げて行くつもりなんだ？ あんなどこへまで工場を建てるなんて。糞面白もねえ。」

「われわれ、われわれの言ひ分を通さねえうちは、どんなことがあつたつて建てさせるものか。俺、何時か、甚さんに言つたことがあつたけがよ。耕地を潰して工場を建てたつて百姓をやめて職工になるものがあつたつて、金目にしてその工場から、耕地から收穫してゐた以上の收穫があればそんない筈だつて。——ところが、いくら收穫があつたつて、われわれ、同じことなんだ。耕地を潰しちや奴等だけ膨らんで、われわれは一向に同じことなんだ。」

重次郎も、眼を睨りながら、叫ぶやうにして云ふのだつた。

「あそこへ工場を持つて来るなんて、百姓するものは、一體、何處へ行つて百姓をすれあいなんだ？」

「工場の方ちや、われわれの耕地を潰して置きやがつて、幾ら儲かつたつて、われわれには全然同じことなんだから、そんで、われわれも、黙つちやゐられなくなつて来たんだ。馬鹿馬鹿しいにも程がある。」

7

部落の中央部にあつた臺地の上は、人家に埋め盡されて、完全に住宅街になつてゐた。

空から續く腕のやうに、南向きの斜面を抱込んでゐた雑木林は、何時の間にか伐拂はれて、赤黒青三色の瓦に埋め盡されてゐた。そしてラヂオのアンテナの竿がその屋根屋根から林立してゐた。

瓦の海の沖の方では、空高く組まれた捲揚機が、カラカラカラララと、ひつきりなく鳴り、黒煙に濁つた空から、鐵骨の長い手を差伸してゐた。大きな煙突がそのところどころから、幾本も幾本も黒い煙を吐いてゐた。そして瓦の海は、隣り部落を乗越え、何處までも何處までも擴つて、青菜の中に消えてゐた。

——一九三〇年四月二十五日——

## 機 關 車

1

その線は、山脈に突當つて、そこで終つてゐた。そしてそのまま山脈の貫通を急がなかつた。山脈の裾には温泉宿の小さい町が白い煙を籠めてゐた。停車場は町端れの野原にあつた。機關庫はそこから幾らか山裾の方へ寄つてゐた。温泉の町に始發驛を置き、終點驛にすることは、鐵道の營業上から、最もいい政策であつたから。

終列車を牽いて來た機關車はそこで泊つた。そして翌朝の最初の列車を牽いて歸つて行つた。終列車の機關車には、大抵、若い機關手が乗つて來た。そして同じ顔が、五日目毎位の割に振當てられてゐた。それは若い獨身の機關手達の希望からであつた。その出張費が、丁度、温泉の町での、一晚の簡単な遊興を支へることが出來たから。

2

吉田は終列車組の若い機關手であつた。

併し吉田は、温泉の町の遊廓へ、出張費を持つて行くことが殆ど無かつた。彼は出張費の大半で新しい本を買ふことにしてゐるのであつた。

「吉田！ てめえ、いい歳をして、よく我慢してゐられるなあ？ ビストン・ロットに故障でもあんのかい？」

仲間の機関手達はそんな風にいふことがあつた。

「馬鹿いふな！ 故障なんかあるもんか。僕は、てめえ等のやうに、やたらと蒸氣を入れねえだけのことさ。」

吉田は口尻を歪めるやうにして、軽く微笑みながら、そんな風にいつた。

「だからさ。たまには無駄な蒸氣も入れて、ビストン・ロットぐらゐは運轉させなくちや、人間として、機関車の甲斐がねえぢやないか？」

「僕は、第一、機関車だけで運轉するつていふやうなことが嫌なんだ。まして、ビストン・ロットを動かしたいだけのこと、わざわざあんなところまで行くのは嫌なんだ。」

要するに吉田は、女性を、單なる快樂の對照として取扱ふのが嫌な氣がするのであつた。何かしらそこに相互的な關係を考へずにはゐられなかつた。

機關庫裏には、瀧の湯の方への、割合に平坦な路が一本うねつてゐた。吉田は機關庫の宿直室からぬけて、よくそこへ散歩に出て行つた。

若々しい青葉の晩春で、搾りたての牛乳を流したやうな露が草いきれを含んで一面に漂つてゐた。

吉田は口笛を鳴らしながら、水色の作業服のズボンに兩手を突込んで、靜かに歩いた。遠くから、湯の川の音が睡むさうにとぎれて來た。野犬が底の底から吠えたててゐた。

「機関手さん！ 御散歩？」

霧の中から病氣な織い女の聲がした。

吉田は口笛を止めて振返つた。鼠色の女の姿が、吉田の胸の近くまで、跳ねるやうにして寄つて來た。

「機関手さん！ 濟みませんが、私を送つて行つて下さらない？」

顔を伏せるやうにして、女は、袂の端を噛みながら低聲にいつた。白粉の匂ひと温泉の匂ひとが、靜かに女の肌から發散した。

「ね！ いけませんこと？」

「……………」

吉田は、ひどく當惑した。彼は黙つて、唯、女の白い顔を視詰めてゐた。

「いけませんこと？ ね、機關手さん。」

斯う彼女は繰返した。

「送つて下さいよ。ね、いいでせう？」

「あなたの家は、一體、何處なんです？」

吉田は、彼女の肌からの體温を身近かに感じながら、始めて口を開いた。

「直ぐですわ。直ぐそこなの。」

「ぢや……………」

吉田は首を垂れるやうにしながら歩き出した。彼女は彼の身體へ寄添ふやうにしてついて行つた。

4

彼女は町端れに、六疊と三疊との二間の貸家を借りて、そこでささやかながら生存を續けてゐた。

土地の誰かが、鐵道の開通した當座に、長い逗留の客を當込んで建てた家であつた。簡易な別荘風の安普請であつた。併し、誰も借手が無く、長い間あいてゐたもので、彼女は僅かの家賃で借りること

が出来た。

彼女の家の中には、殆ど家具といふやうなものが無かつた。簡単な炊事の器具のほかに、何ものも必要とはしないからであつた。幾度も幾度も湯につかり、晝の間は眠つて、夜が來ると眼をさますのが、彼女の二十四時間であつたから。

彼女は逗留客としての一面を生活し、同時に、出稼人としての滞在をしてゐるのであつた。彼女の温泉場への第一の目的は、都會の場末で蹂躪された肉體の、修整であり保養であつた。そして彼女は健康な肉體にかへり次第、これまでの生活から足を洗つて了ひ度いと考へてゐた。しかし彼女の持つて來た資力は、そんなに長い逗留を支へてはくれなかつた。彼女は、目的のところまで行届かぬうちに、その温泉宿から立去らなければいけなくなつたのであつた。

彼女はしかし、その温泉場に未練を持つた。この機會に、どうしても以前の肉體に復りたいと考へたからである。そこで彼女は、再び以前の職業に戻つて、生活費を稼ぐ傍らに、肉體の恢復に努めようと計畫したのであつた。

しかし、彼女は再びその生活から脱けることが出来なくなつた。彼女の肉體は容易に恢復してはくれないからであつた。それは例へば、葉を整へたと思へば蹂躪され、再び葉を整へかけると、再び蹂躪される路傍の雜草のやうな存在であつたから。

吉田機関手は、終列車を牽いて来ることに、彼女の家を訪ねて行つた。それが殆ど決定的に五日目であつた。彼女もその日には、他の客を避けるやうにして彼の来るのを待つた。菓子などを整へて置いたりした。

「この温泉、私のやうな病氣のものにはほんとによく利きますのね。」

彼女はそんなことをいつたりした。

「で、病氣の方、もういいのかね？」

「そりや、とても、もういいつてほどにはならないけど、なんだか、だんだんよくなるやうな気がするわ。でも、駄目ね。よくなる片端から打毀してゐるんですもの。だから、わたし、自分をよく金魚のやうだと思ふことがあるわ。そら、瀧の湯の横に、岩に掘つた小さな池があつて、家鴨を飼つてゐる家があるでせう。あの池の中に、澤山金魚がゐるのよ。ところが、その金魚つたら、どの金魚も、あのひらひらと長い尾が皆んな無いの。家鴨に食べられるんですつて。そしてまたその尾がひらひらと伸びて来ると、直ぐまた食べられるんですつて。だから金魚つたら、尾の伸びる間が無いんだつていつてゐたわ。まるで私のやうぢやなくつて？ 仕様の無い家鴨ね。」

彼女はさう話して、ひどく淋しさうに微笑んだ。

「家鴨が悪いんぢやないでせう。一緒に飼つて置く方が悪いんだ。池の中の社會組織が悪いんだ。さう思ふな。」

吉田はさういつてから溜息をついた。

「でも、金魚なら、他の池へ移してやるつてことも出来るけど、わたしなんかの場合は、さうはいかないんですものね？」

「一體、あなたは、どの位あれば、なんにもしないで食つて行かれるんです？」

「あら、わたし、そんなつもりでいつたんぢやないのよ。わたし、近ごろ、あなたから頂くお金だけで、どうにかやつてゐるんですもの。ほんとに、わたし、近ごろあなたより他に誰にも来て貰はないやうにしてゐるんですもの。だからこそだんだんよくなつて来るのよ。」

「ぢや、一人位だつたら、身體と痛めるやうなことが無いわけなんだね？」

「そりや、さうよ。」

「僕は、組合の仕事があつたりして、今直ぐは結婚が出来ないんでね。」

吉田はさういつてまた溜息をついた。

夏になると、彼女は、彼のために浴衣を拵へて置いたりした。

「こんなんですけど、寛げるかと思つて、自分で縫つて見たの。それに、他所へこんなのを頼むと、るさいから。」

「おお、これはいい。」

吉田は、これまでに経験したことのない情緒的な雰圍氣を感じながら、それを着て疊の上へ横になつた。

「ぐつすりお休みになるといいわ。屹度わたし、時間に間に合ふやうにして上げるから。」

「第一、具合はどうなんです？」

「いいのよ。とてもいいの。皆んな、あなたのおかげだわ。いふまでも無いけど……」

彼女はさういつて顔を伏せるやうにした。眼が熱くなつて来たからであつた。

「それはいいね。僕の方の、機關庫の中の組合も、うまく纏りさうなんです。裏切者が出ずに、これがうまく纏ると、素晴らしいんだ。あなた等なんかの場合の解放運動は、直ぐ代りの人間が出来るので、なかなか難かしいさうだが、僕等の組合は、出来て了へば、そりや強いよ。僕等は、長年の経験

で初めて仕事の出来る技術工だから。實際、僕等の場合は、代りの人間が直ぐ間に合はないんだから、そりや強いよ。」

吉田は機嫌よくそんなことを話して聞かせたりした。

「ほんとに、さうなるといいわね。」

「なるよ。あなたも、少しの間だから我慢してるんだね。僕が、もつと給料が上れば、もつとどうかするから。併し、僕は他の人が来るのを焼いていふんぢやないですよ。」

「わかつてるわ。折角よくなつて来てゐるのに、いくら困つたつて、そんな馬鹿なことはしないわ。」

彼女は寂しい微笑みをしながら言つた。そして彼女は眼を潤ませてゐた。

吉田機關手は、脊廣を着て彼女を訪ねて来た。終列車が着いてから間もなく、何時ものやうに作業服の姿で来る彼を待つてゐた彼女には、それが何かしら嫌な豫感を投げつけた。

「あら、今夜は、どうなさいましたの？ 脊廣なんか召して。」

彼女は眼を睜りながら訊いた。

「矢張ナツパ服を着て運轉して来るには来たんだがね。ちよつと着換へて来たんだよ。あなたとも、

今夜かぎりでお別れしなければいけないんでね。それにナツバ服ぢやあと思つて……」

「……………」

彼女は黙つて彼の顔を視直した。彼女は、全ての男との関係がさうであつたやうに、来るべきところまで来て了つたのだと思つた。

「僕、急に結婚をすることになつてね。考へて見ると、矢張何時までも獨身で斯うしちやゐられないから。それで、結婚をしようと、機關庫の事務所の方ぢや、變に氣をきかして、泊りの列車には容易に乗務させてくれないんですよ。そればかりでなく、結婚した當座は、夜行列車にも乗務させないし、もう此處へ来る機會が無くなるもんだからね。來ても、直ぐ引返す列車にばかり乗務させられるやうになるだらうと思つて……」

「それは、わざわざ済みませんでしたわ。」

彼女は軽く頭をさげるやうにしながら、寂しい低聲で言つた。彼女には始めての經驗であつた。誰も斯うしてわざわざ別れを告げに來た男は、これまでに一人だつて無かつたのだ。

「僕、今夜は、ゆつくり話して、お互に、心残りの無いやうに別れて行き度いんだが……」

「え、ゆつくり話させよう。」

「これはね、お別れのしるしだ。黴いけれど、僕だつて貧乏人なのだから、これで勘辨してくれ。ほ

んのしるしだけだ。」

吉田はさういつて、そこへ幾枚かの拾圓札を掴み出した。彼女は驚きの眼を睜つて、彼の顔を視詰めた。

「僕の氣持だから、取つて置いてくれ。丁度十枚あるはずだが、ほんとうは、あなたの病氣がしつかりよくなるまで暮しが出来るぐらゐの金をあげたかつたんだが、併し、なるべくその金の無くなるまで、ちやんと直つてくれるといいね。」

「わたし！」

彼女はさう叫ぶやうにいひながら、吉田の顔を視詰めてゐた眼を急に伏せて、紙幣の上に兩手をかけて泣き出した。

8

彼女は先に床を出た。そして、茶を沸かしてから彼を起した。五日目ごとに繰返されて來た今までの生活と、少しも變りが無かつた。

吉田は茶を飲んで、何時もと同じやうにして出て行つた。

「ぢや、さようなら、身體を大切にしてくれ。」



唯、脊廣の姿が何時もと變つてゐるだけだつた。

吉田を送り出して部屋の中へ戻ると、彼女は急に、限り無い寂しさの中へ突落された。彼女は自分を、再び、家鴨のゐる池の中へ移される金魚のやうに思った。例へ短い期間ではあつたにしても、一人の男に仕へて暮して來たといふことは、彼女に取つて、家鴨のゐる池の中の生活であつた。それが再び泥濘の中に踏込んで行かなければならないのだと思ふと、彼女は急に悲しくなつた。

同時に、吉田機關手がこれまでの自分にしてくれた全てのことが、洪水のやうに彼女の胸を目蒐けて押寄せて來た。殊にも昨夜のことであつた。そのまゝ黙つて別れて了つたにしても、それまでのことなのだ。それをわざわざ訪ねて來て、身體を大切にするやうにといつて金まで置いて行つてくれたのだ。そして何時ものやうに泊つて行つたのだ。

彼女は泣けて仕方がなくなつて來た。

彼女は、一番の列車を牽いて歸つて行く、吉田の、後姿だけでも見送り度いと思つた。彼女はふらふらと線路の方へ出て行つた。

9

機關車が非常汽笛を鳴らして霧の中に停車した。

「霧で、ちつとも見えやしねえんだもの。」

機關手が咳きながら降りて行つた。助手の火夫が続いて飛降りた。

「轢いたんぢやないか？」

車掌が駈けつけて來た。

「女だな。手に何か持つてゐるぢやないか？」

腰から切斷された胴體の手が、何か手紙のやうなものを握つてゐた。それには「吉田機關手様」と書かれてゐた。

「吉田機關手つて、滅首になつた吉田のことかな？」

「だつて、他にゐないですね。」

其處へ四五人の乗客が客車から出て來た。四五人きり乗つてゐなかつたのだ。その中に脊廣を著た吉田が混つてゐた。

「青木！ 轢いたな。」

吉田は歩み寄りながらいつた。

「おう！ 吉田君。君これに乗つてゐたんだね？ これ、君に宛てたのらしいんだが……」

青木機關手はさういつて、女の手に握られてあつた手紙を吉田に渡した。手紙といつても、何も書

いてあるわけでは無かつた。十圓札が十枚封じられてあつただけだ。しかし吉田は其處から読みきれないほど澤山のことを讀むことが出来た。

「吉田君！ 君の知つてゐる人なのかね？」

「青木つ！ てめえの裏切りが、僕等四人を誡首にただけぢやねえつてことを、よく見て置け。ここにかうして死んでゐる女は、僕が首切賃をわけてやつた女だ。それから、僕のほかの三人は、獨身ぢやねえんだぞ。女房もあり子供もある人間だ。てめえの裏切りが、何人の人間を干乾にするか、よく考へて見ろ！」

吉田は、手紙を握つた手をズボンのポケットに突込みながら客車の方へ戻つて行つた。彼の眼は、潤んで、ちかちかと光つてゐた。

機關車は、線路工夫を呼ぶために夜明けの霧の中に非常汽笛を鳴らし始めた。

——一九三〇年五月五日——

## 桐の花

澄める六月の蒼空に、薄紫の花を咲かせる桐の花は、懐かしい過去の思ひ出だ。靜かに銀の雨の降る日の桐の花は、私には猶一入なつかしい。

一昨年の初夏、私が、愛人の美枝子と、ささやかな世帯を張つた高井戸の、古い農家の座敷の前に、二本の桐の木があつて、やはらかな天鵞絨のやうな葉かげから、龍の霧のいつばいに生ひかぶさつた泉水の上に、靜かな雨の日にも、微かな風の日にも、薄紫のふつくらとふくらんだ花を、ほとりほとりと落して居た。

其頃の私達は、妻も私も或る一つの夢を見て居た。どんな事をして生活だけはして行けるもの、食つてだけに行けるものだと云ふ考へが、意識の一部に潜んで居たらしかつた。だが、私の小説が生活費の一部にはならないやうに、妻の詩も小遣錢の一部とはなつてくれなかつた。それでも、金がほしくつてむづむづしながらも、「賣るための藝術では無いんだから……」と云ふやうな事を言つては、互が互に、生活から来る苦しみなどは平氣だ！ と云ふやうな表情を装うてゐた。明日のお米が無いことに、頭と心とを縛られながらも……。

然し、私も妻も、私達の新しいおもちゃのやうなホームに一つの憧れを抱き、未來に明るい幸福を描いて居た。

私は學生時代に穿いた白い夏ズボンにゲートルを捲いて、古足袋を穿き、霜降りの夏服を来て、雀が自分の巢に餌を運んで来るやうに、私は私達の米代を稼ぎに出かけた。

霜降りの夏服のポケットには、妻は、毎朝、センチメンタルな色彩のバットの箱と、マツチを押し込んで、上から軽く敲いてくれ、アルミニウム製の辨當を抱いて、毛唐の住んでゐるL邸角まで送つて来てくれた。

石垣の上に立廻した黒板扉のL邸角には、黒板扉の上から二三本の桐の木が枝を伸して居て、やはりかく温い牛乳のやうな空氣の中に、美味さうな高貴な薄紫の香りが、其處へら一面に、ふんばりと漂うてゐる。懐しい幼年時代の匂ひである。妻は毎朝、私について此處まで、此のかをりを浴びに来るのだ。

濕つばい、やはらかな黒土の上には、一つ二つ三つ四つ……無數の桐の花が散つて居た。妻は私に辨當の包みを渡して、一番新しさうな、生々とした薄紫色の寶石のバイブに駆け寄る。そして妻の手は、薄紫の寶石に埋められる。

「はい。薄紫色の寶石のバイブを上げますわ。」と、妻は私のポケットに、其半分を入れてくれる。

口にも啣えさせてくれる。

斯うして私達は、朝の燦爛とした陽光の中に漂ふ薄紫の香りの中で別れ、宵になつて、星の光りの玲瓏たる中に流れる桐の花の香りの中で會ふのであつた。

雨の降る日の桐の花が、猶一入なつかしいと云ふのは、雨が降れば、二人は一日中顔を見せ合ひ、見合つてゐることが出来るので、二人は金に困りながらも、雨の降るのを、天の恵みかなぞのやうに思つて居た。

夫れに妻の美枝子は朝寝が好きで、朝になると不思議に、すやすやと、生理的に睡くなるかのやうに、何時までも眠つて居る。薄桃色の蕾が落ちて居るやうに、淡い紅らみを含んだ頬が、眞黒な生物の感じのする髪の上に、ぼつとりと、紅い唇を上に向けて、夜著の陰に夢を見てゐる彼女を、私はどうしても起す氣にはなれなかつたのだ。

私は自分だけが、そつと寢床の中から脱け出して、廊下に置いてあるしちりに火を熾すのであつた。ばたばたと團扇の音をたてると、障子の破れ目から流れ込む暈かな陽光に揺り起されて、薄桃色の蕾は、何時のまにか桐の花のやうな、淡い淡い薄紫の花となつて、睡眼をこすりながら廊下へ出て来る。桐の花の匂ひは、前の桐の木からでは無く、彼女の身體から發散して居るではないか？ それ晴れ渡つた朝々の、若い夫婦の心に繰返される、小さな一つのトラジデーである。

雨の降る日には、裏のトタンの扉を叩く雨音を聞きながら、二人は何時までも何時までも朝寝をしてゐる。

そして、お腹が空いてたまらなくなると、私はガタガタの小さな食卓に寄掛つて、本を読みながら煙草を燻かす。彼女は廊下に出て、まるめた新聞紙に火をつける。煙は雨の中に溶けて、泉水のあたりの、南天や桐や椿や藤の植込みの間に流れ込む。すると桐の花の強い香りが、室の中一杯に流れ込んで来ては、煤けた古風な天井や、ぶかぶかに朽ちかけた畳の中にまで沁込む。

妻は明るい銀の雨にうたれながら、柄杓で、泉水に浮んだ桐の花を、幾つも幾つも、洗面器の中に掬み取る。

「どうするの？ そんなにどつさり。髪が濡れるぢや無いか。」

「御馳走よ。目の御馳走なの…… 薄紫色の…… あなたの好きな…… 古寶玉の……」

妻は幾つも掬み取る。

私達の貧しい朝の食卓には、黄色な澤庵や青いおひたしの中に、純白な西洋の小皿に載せられて、水にひたした淡い薄紫の桐の花が出される。——その純白な西洋の小皿も、花の好きな私達に取つては唯一の、愛好して居る陶器であつた。薄紫色の古寶玉を乗せるには、最もふさはしい小皿である。それは彼女が、幼い頃から、それを載せる珈琲茶碗とともに、自分の魂のやうに愛して居たもので、

私の處へ来る時、新聞紙に包んで行李の底へ潜めて来たので、トランプのクインは三つに毀れて、小皿のみが、薄紫の古寶玉を載せるべく残つたのであつた。

「この珈琲茶碗を、フランスから買つて来た叔父さんは、この珈琲茶碗に桐の花を浮べて、ちつと眺めながら、よくお酒を呑んだことよ。そして、桐の花の咲く頃に死んだわ。」

私は、夢のやうな話を聞き、そして幼年時代の、なつかしい幻を描く。静かに紙巻煙草を燻らしながら。

「僕はね。小さい時、酒の香りを好きだつたさうだよ。酒の匂ひを嗅いで、獨りで欣んで、にこにこしてゐたさうだよ。——今、桐の花の香りを欣ぶやうに……」

「それでよく、酒をあがらないのね。本當に、香りが好きだつたのね。屹度、水のやうで、高い香りがするから……」

「僕の家には、酒を呑む人は居なかつた。お爺さんは庄助と言つて、相撲の強い人だつたけれども、酒は呑まなかつた。父も、庄三と云ふ請負人だつたが、やはり酒はさう呑まなかつた。」

「お婆さんは、お呑みになつたさうぢやないの？」

「お婆さんは、少し呑んだ。僕は小さい時お婆さんのために、自分の小遣錢で酒を買ひに行つた事を覚えてゐる。丁度桐の花の咲く頃だつた。酒を買つてのかへりに、桐の花を拾つて居て、酒を皆んな

こぼしてね。——僕の好みは、酒の香りを離れて、桐の花の香りになつた頃だと思ふ。」  
「私は、桐の花の香りも好きだけれど、あの柔らかな、天鵝絨のやうな嫩葉の手觸りも好きだわ。桐の嫩葉に桐の花を載せて眺めて居ると、本當に、天鵝絨の小箱に秘めた古寶玉と云ふやうな感じがするわ。」

「明るい銀の雨が、雑木林の縁にけぶる。桐の花は、雨の眞晝の静けさを破つて、ぼとりぼとりと、泉水の中に落ちてゐる。」

——一九二五年四月十一日——

山茶花

平三爺は、疝氣で腰が痛むと言つて、顔を顰めたり、自分で調合した藥を嚙んだりしてゐたのであつたが、それでも、山の畠に、陸稻（かきいね）の落穂を拾ひに行くのだと言つて、嫁のおもんが制めたにもかかはらず、土間の片隅からふごを取つて、曲がりかけた腰をたたいたりしながら、戸外へ出て行つた。「落穂なんか、孩子（こども）共に拾はせたつていいのだから、無理しねえで、休んでればいいんですのに、爺つあんは……」とおもんは繰返した。

「ほんでもな、ああして置くとみんな雀に喰つて了ふ。一かたまりの雀おりつと、一つべんにはあ、一度團子して食ふ分位、わけなく喰れで了ふがらな。——まあ、なんぼでも拾つて來んべで。孩子共だの何んのか言つてつと、まだはあ、長びく原因（げんいん）で、去年なのやうに、拾はねえうぢに、みんな雀に喰つて了ふがら……」

然し平三爺は、其まま直ぐに出掛けて行くのでは無かつた。——祖先から承繼いだ財産を、自分の代に、殆んど無くして了つたので、爺は、伴への憂慮から、働き続けよう働き続けようとなつて努力してゐるのではあるが、しかし、身體の方も大分まゐつてゐるのだし、氣持の上では、より以上に休息を需

めてゐるのであつた。

殊に今は、疝氣を起してゐるのだから、爺は、仕事への倦怠と、倅への憂慮との、この二つの間にもだもだしてゐるのである。それで爺は先づ、大きなごつごつの手を両方とも、曲りかけた腰の上に置いて、浅い霜が溶けてびしやびしやと濕つてゐる庭を、眞直ぐに山茶花の木の下へやつて行つた。

「おもん。一枝、婆あの位碑さあけて呉ろ。」

爺は、そんなことを言ひながら、暫く山茶花の木の下で、うろろしてゐた。

倅の長作は、その時、納屋で稻を扱いてゐたのであつたが、父親が、おもんが制めるのを肯かすに出で行つたらしい氣配なので、世間體などを考へ、どうしても引止めなければならぬと思つて庭へ出て來た。

「爺つあん。そんな無理なごとしねえで、少し休んだらよがあめんがな？」と長作は、やや語調を強めて言つた。

「無理つてほどもねえげつと……拾はねえうちに、皆、雀に喰つて了ふべと思つてや。折角とつたの……」

「落穂ぐれえ喰つたつて。——そんより、醫者さでも掛るやうになつたら、なんぼ損だかわかんねえべちや、爺つあんはあ！」

「うむ。それもさうだな、ほんぢや、おら、今日は、休ませて貰ふべかな。」

爺は、眼のあたりを少し赤くするやうにして、息苦しい呼吸の間から、申わけでもするやうに、吐切れときれに言つた。そして、また腰をたいたいたり、何か言ひ残したことがあると云ふやうに、口をもぐもぐさせながら、とつおいつ山茶花を眺めてゐて、容易に家の中に這入らうとはしないのであつた。

「なあ長作。この山茶花は、ふんとにいい花、咲くちやなあ！」

「……………」

長作は、爺の方を、白眼で、ちらと見たきり、何んとも答へずに、腰から煙草入を抜き取つて、煙草に火をつけた。

爺は、ひどく間の悪さを感じた。そこで、足元へ唾をして、それから山茶花のまはりを一巡した。

「なんて言つたつて、こんだけの山茶花、この界限にや無えがら……」

「山茶花など、どうだつて……それより、早く寝で休んだらいかんべな、爺つあんは。」

長作は、煙草の煙を吐きながら、また、爺の方へ横目を遣つた。そして、其處には重重的い雰圍氣が醸し出された。

爺は、倅の氣持を繕ふやうなことを、何か言ひ出さうとして、口を二三度動かしたが、唯、口を動

かし得たに過ぎなかつた。更に爺は、この山茶花を賣つて、いくらでも生計のたしにしたら……斯う言はうと思つたが、それも思つただけで、口に出す前に、倅が、どう云ふ返事をするかが氣になつた。

「この忙しい收穫期、休んだりして……」爺は申わけのやうに呟きながら家の中へ這入つて行つた。「稼いだつて、それ以上に損するやうなごつちや、なんにもなんねえがら……まあ、ゆつくり休ませえ。」

長作は、爺の後に跟いて家の中へ這入りながら、こんなことを言つた。この言ひ草は、既に、爺は幾度も幾度も繰返して聞かされた。それで爺は、今では、若い時分、自分が屈指の稼人だつた自慢はもう決してしなくなつたのである。

平三爺は、事實、村でも屈指の稼人であつた。また、非常なお人よしでもあつた。そして爺は、よく他人から騙された。取引をすると、屹度、損をした。他人の借金の保証人になつては、借主の代りに拂はされたことも度度あつた。そんなわけで、爺は、他人よりも餘計働いたにもかかはらず、親から承繼いた財産まで、すつかり無くして了つた。

其ことを氣にしてゐるために、爺は、折折、倅までが自分から離れて行つたやうに思つて、非常に

寂しい氣持になることがあつた。その思ひは、年を重ねるに随つて、だんだん強くなつて行つた。倅夫婦は、何かにつけて優しくしてくれるのだが、それをさへ、爺は、その底の方に、何かしら意地の悪いものがあるやうに感ずることがあつた。倅に戸主を譲つて、一時、ほつとした氣持になつた爺はまた根をつめて働き出した。倅は、財産の勘いのを、自分が無くしたのを、面白くなく思つてゐるのに相違ねえ。いくらでも、この穴を埋めてやらねばならないと思つたからであつた。

然し倅の長作は、決して親の意をないがしろにするやうなことはなかつた。世間への體裁からばかりでなく、實際に、六十の坂を越してから、尙働き続けねばならない自分の親を、彼は心の底から氣の毒に思つて、出来るだけの慰撫を心掛けてゐるのであつたが、なぜか長作は、それを露骨に現すとは出来なかつたし、さう云ふ言葉を口にするには、尙更出来ない性分だつた。ばかりでなく、爺があまり馬鹿馬鹿しい苦勞などをする時には、むしろ、罵りに近い言葉で制めることがあつた。

平三爺は、他所の年寄達などに比べると、自分が、非常にいたはられてゐると云ふことを知つてゐながら、倅の心の底に、意地の悪いものがあるやうに感じた時や、罵りに近い言葉を受けた時には、やはり、非常に寂しい氣持になつた。爺が、山茶花を大切にし、それに自分の慰めを繋ぐやうになつたのは、それからのことであつた。その山茶花は、まだ相當にやつてゐた頃に、婆さんの植ゑたものであつたが、平三爺の、長い勞苦の生涯に、慰めのものとして残つたのは、纔かに、この一本の山茶

花に過ぎなかつた。この一本の山茶花のほかの何ものをも残し得なかつた生涯、六十何年間の、血の  
にじむやうな、勞苦に満ちた人生だつたとも言へるのである。

重苦しい雰圍氣の中で、三人は黙り續けてゐたが、長作は煙草入を腰にさして爐傍を立つた。  
「爺つあん、藥さ混ぜる砂糖、萬の野郎が、皆んな舐め了つて無くなつたげつとも……」と、お  
もんは、相談するやうに言つた。

「砂糖なんかいらねえぜ。おら。藥だもの、嚙み辛いのか、仕方がねえ。」

「卵が、なんぼか溜つてる筈だべちや。そいつでも賣らせてや。うむ、萬の野郎に賣らせて。」  
長作は斯う言ひ残してまた納屋の方へ出て行つた。

平三爺は、重い溜息を一つ吐いて、幾日も敷き續けられてある萬年床へと立つて行つた。おもんも  
跟いて行つて、破れて綿のはみ出てる蒲團を捲掛けてやるのであつた。そして尙、上から押付けた  
り、其邊に脱ぎ捨てられてゐる衣類を、なんでも、手當り次第に捲掛けてやるのであつた。

「もう澤山だ。おもん、こんで澤山だ。」

「ほんちや、ゆつくり休ませえ。藥も拵へて置きしから。」

おもんは斯う、水漬をすすりながら言つて、臺所へ戻つた。これから、彼女も稻を扱かなければな

らなかつたのだ。

平三爺が、床にもぐり込んでから間もなく、町の操三郎と云ふ男がやつて來た。以前、鉈や鎌など  
を賣りに、この村へ出入してゐたが、それから三四年姿を見せずにして、最近また、稻扱機械を賣り  
に歩き廻つてゐた。操三郎は、永いあひだ目をつけてゐた長作の家の山茶花を、この前に來た時は、  
賣れと言つて居たが、今日は、稻扱機械と取換へてくれるやうにと言つて、執拗に頼むのであつた。  
「駄目だ！ 機械は、ほしいにあ、ほしいが、この木は、爺つあまの……」と長作は、同じことを繰  
返した。

「ほだから、先づ、爺つあまに訊いてみせえ。」

「駄目だつたら、爺つあまが、今、病氣だし、この木は、大切にしてんのだから。」

「ほんちや、爺つあまに、おれ、直接に、訊いで見んべかなあ？」

操三郎は、山茶花の樹の下から、平三爺の寢てゐる部屋の前の方へ歩いて行つた。長作は、手をか  
けてまで引止めるわけに行かないので、ただ、その男の後に跟いて行つた。長作にしては、その一本  
の山茶花よりも、稻扱機械の方を欲しいのは勿論だつた。しかし長作は、父親の氣持をないがしろに  
してまで望み得なかつた。

「此方の家の爺つあま。病氣はどうですか？」



平三爺は、なんとなく、聞き覚えのある聲のやうに思つて、寢床の上に腹這になつた。

「ね、此方の家の爺つあま。——」と操三郎は、縁側へ長くなり、顔を障子の側まで持つて行つた。その二度目の聲で、平三爺は、稻扱機械を賣つて歩く、町の操三郎だと云ふことがわかつた。

「爺つあん！」と長作が其處の障子を開けた。

「ね、此方の家の爺つあま。」操三郎は縁側へ腹這ひになつて、平三爺に話かけた。「機械一臺ど、どうでえす？ あの山茶花の樹ど、取換へまえんか？」

「それさな？……」

平三爺は、口をもぐもぐと動かしながら、げつそりと肉の落ちた面を伏せて考へ込むやうにした。

そして、やがてまたその寢れ果てた血の氣のない顔を上げ、悴の長作の顔に見入りながら云ふのであつた。

「俺はどうでもいいげつとも、長作あ？……」

「長作氏は、ほしがつて、ほしがつて。——一臺の機械で、五人分も仕事が出来んのだから、うんとほしがつて居んのだけつとも、矢張、爺つあまさの遠慮で……」と操三郎は、横から、少し澁味のあつた聲で饒舌りたてた。

長作等には、實際、稻扱機械は強い誘惑を持たずには居なかつた。一臺の機械に、二人の人間がつ

いてゐれば、五人分の仕事は樂に出来る。誰にだつて使へる機械だし、それに、米も別段いたまなし減りもしない。その上、仕事のあがりが大變に綺麗に行く。——斯う云ふ條件を聞いては、長作等はたまらなかつた。稼手が尠なくて、仕事に追立てられてゐる長作である。口から手が出るやうな思ひがするもの、決して無理からぬことであつた。

「ほんぢや、長作せえいごつたら、取換でくんつえ。」と言つて、平三爺は、瘦せこけた顔を枕に押當てた。

「なあ、長作氏。ほんでは、俺んどこにあるうちの、一番にいい機械寄越しから……」

「ほんでも爺つあん。爺つあんが、何よりの樂しみにしてゐた山茶花。——俺、なあに、手で扱いだつて扱げんのだから。——折角、爺つあんが樂しみにしてゐた山茶花……」と長作は、吐切れとぎれに言つた。

「いいがら、いいがら、俺が斯うして病氣して、仕事にも追はれでんだし、取換へで貰へ。——俺、山茶花などどうでもいいがら。」

それを聞くと長作は寂しかつた。父親の氣持を掬むと、彼はむしろ、胸を嚙まれる思ひがした。

「爺つあんが大切に育てた山茶花だもの。今まで、何處から賣れつて言はれでも、賣んねえでだ山茶花だもの……」

「いいがら長作取換へで貰へ。俺は、本當になんにもいらねえ。こんなに大切にされて、俺、なんにもいらねえ。俺、金でも溜めでゐて、その機械買ってやれんのだらえいげつとも……山茶花など！それより、汝等、なんでも樂出來れば。——俺、こんなに大切にされて……」

涙もろくなつた平三爺の眼からは、また涙が流れた。長作は、もう何も言はなかつた。が、眼頭が熱く潤んで來るのを覺えた。

彼等は、平三爺にしろ長作にしろ、勿論この山茶花を手放し度くは無かつた。然し、だからと言ってこれを拒絶して、手扱を使ひ續ける氣にもなれなかつた。

「おれは、もう、これきりの人間だ。山茶花など！それより、汝等せえ幸福で……」

平三爺は、もう一度斯う言つて、涙に濡れた顔を、とくと枕に押當てた。

——一九二七年五月二十五日——

## 蜃氣樓

### 1

彼と年若い彼女とは汚い六疊の間から動けなかつた。

焦茶色の疊は雨さへ降ると彼女の素足を吸付けようとした。天井裏の鼠は彼等の甘い眠りをさまたげた。そして蒼白い月の破片は、彼と彼女の身體の上にこぼれかかつた。

彼女はしきりに青い疊と硝子窓の部屋を憧れた。彼も、冷めたい風が破れた茶褐色の障子の上に奏でる魔物の呻くやうな音楽はきき飽きてゐた。

郷里の者が訪ねて來はしまいかと、虚榮のために生れた彼女は、絶えず脅かされてゐた。

「誰か知つて居る人でも來たら、本當にお父さんやお母さんの顔に泥をぬつて了ふわ。」

「だから、おまへ女給にでも行けよ。」

「まさか！」

彼女はいつも相手にしない。

二人は仲よく折々新築の貸家を見に出掛けた。どれも氣持の好い家ばかりだつた。曇は青々と彈力に漲り、礎具は落着いてゐて滑りよく、模様のない壁は却つて美的な感情をそそりたてた。そして窓の硝子は赤い夕陽を碎いてゐる。家賃も人ききがいい。蜘蛛の巢までが白く光つてゐる。

「いいわね、こんな家に這入れたら。」

「一べんには偉くなれないよ。」

「何時になつたら、私達はこんな家に住めるのかしら？」

青い座敷は、敷金と高い家賃とで彼等の前に牆を結んだ。

「何度來て見ても同じことだわ。」

「僕等だつて、今に這入れるよ。」

「原稿が賣れるかしら？」

「こんなにどんだん貸家が出来たつて、誰も這入り手が無いぢやないか。今に、むかうから、這入つて下さいつて頼みに來るよ。」

若い夫婦は蝙蝠のやうに、あなぐらのやうな暗い巢の中へ歸つて行つた。

樺の並木や畑の作物は、青々と雨の中に溶け込んだ。林の間から流れる露は、人間の頭まで量かさうとする。

「本當に氣持が悪いね。べたべたひつついて。」

彼女は窓際へ歩み寄つた。

「足袋を穿けばいいぢやねえか。」

「田舎の人つて、割合平氣なもんね。」

「ああ、厭な雨だな！」

彼は彼女が、神戸の話を持出すのをおそれた。

雑木林にけぶる絹糸の雨は、魔術師のやうに彼女をホーム・シツクにかからせた。そして彼をメランコリイにした。二人の戀がお互に欺きあつてゐることは、魔術師によつてわけもなく發かれた。(しかし彼等はお互に、魔術師が去ると直ぐまた熱愛してゐるやうに接吻に妥協を囁いた。)

牛蒡の葉つばで雨蛙がケロケロ鳴いた。彼女は雨蛙に見入り、雨の風景に見入り…… 彼は彼女がどんなことを思ひ込んで居るかほぼ解つた。眼と顔が語つてゐる。

雨蛙はもう一度雨を懐かしみ鳴いた。彼女は暫く陶器の置物のやうな緑色の小さい蛙に視入つた。彼女は蛙の鳴聲を、親を慕うて鳴く聲だと錯覺する女詩人だつた。或る時は、親蛙が私のやうな娘

を探しまはつてゐるのだと主張した。

彼は、鳥や獣物なら人間的な愛情を持つてゐるが、蛙は相手を求めるだけだと繰返した。憎らしい偶然が柿の木の鳥を鳴かせた。彼女の神経は針のやうに鋭かつた。聴覚は鳥の情緒を聞きわけようとした。彼の胸はハタハタと發動機のやうに轟いた。

「鳥でさへ、子供のことを心配してゐるんですものね。」

「僕は昔の小學校の修身書で、親鳥が三羽の子鳥から、餌を運んで貰つてゐる繪を見たことがある。親鳥は口を開いて居た。子鳥に催促をして、鳴いてゐたのに相違ない。」

「あなたの親みたいだわ。」

彼女は不思議に微笑もしなかつた。

「親はどうして憎めないもんかな。他人のやうに憎めると氣持がいいんだがな。」

「苦しめられても、やつぱり……あなたでも……まして私なんか……」

彼女は窓の闕に顔を伏せた。背中は毛虫の進行のやうに波打つた。

「馬鹿だなー何ぞ泣くんだ。」

「……」

「俺のために親を捨てて来て置きながら……」

「……」

「俺の傍に居て泣くなんて……」

「あたし、あなたが、やさしくしてくれるのを、知らせたいのだけわ。」

彼女は言葉を吐切らした。

自由を壓へつけた親ではない。反抗した親ではない。子供の身の上を案じてくれる親ばかりが彼女の心の中にあつた。

黒い空は低く垂れさがつて來た。赤ちやけた電燈の下には彼女の軀だけが、魂の脱殻のやうに靜止の狀態を繰返してゐた。

彼女の思索は、軀だけを六疊の裡に残して四方に飛散つた。小さな食卓の上に蒼白い生物のやうな腕を這はせながら、彼女は食卓ももつと上等なのを買はなければならぬことに氣がついた。――鏡臺、長火鉢、鐵瓶、飯櫃、(出來るなら茶箆筒や桐の箆筒をも)こんなものを並べ立て、汚い空虛を掩隠さなければ、自分達の世帯はあまりに身窄らしいことを思つた。

新しい器物の羅列によつて、如何に豊かな生活が開かれてゐるかを、如何に平和と圓滿とが支配し

てゐる家庭であるかを説明するのを彼女は客観したかつた。

「みんな、武藤先生のおかげだわ！」

彼女は自分の希望にむかつて囁いた。

彼女は彼が今日武藤先生から貰つて来る金を、どんな風に碎いたら最も賢妻であるかを考へた。

幸福は多くのものを要求した。貯金もしたかつた。長火鉢や鏡臺もほしかつた。更に生活の安定を保つて行くことが必要であつた。

「一體あの人は、どうしたのかしら？」

年の暮れまでには、神戸の両親を呼んで、自分達の生活状態を見せようと、彼女は彼に相談しようと思つた。

\*

纏つた金をふところにして電車通りの方へ歩いてゐる彼は、自分ながら幸福過ぎた。幸福を分ちたい人々は、あまりにも多く瀧壺の泡のやうに湧いては消えた。

本屋には多くの金文字が彼の智識慾を誘惑して居た。

呉服屋の軒では薄紫の半襟が、妻に對する彼の愛情を試さうとした。

街を往き來する人々の服装は、彼の身窄らしい服装を笑つた。

ふと彼は、田舎に居る両親が、如何に疲れ切つた不幸な生活の中に居るかを考へた。

田舎から來た身窄らしい姿が、白髪の禿げあがつた額に汗を溜めて寝れきつた身體を坂の上に曳すつた。心配さうな皺の多い顔だ。苦學に來てゐる息子が急病なのに相違ない。

彼は電車に乗る前に、坂の下の郵便局で拾圓の小爲替を組んだ。（——少しですがお小遣にして下さい。來月から毎月送ります。どうぞお身體にお氣をつけ下さい。）

\*

彼は蓋口を食卓の上に投げ出した。

彼女の微笑には幸福が絡らんだ。

「あら、今朝言つたよりも拾圓足りないぢやないの？」

「……………」

「ね、拾圓足りないわ。」

「田舎へ送つてやつた。」

彼女は希望を裏切られた不満を表情で説明した。そして彼の顔を偷見した。彼は外面だけが不機嫌だつた。

「僕はおまへのやうに親孝行ぢやないんだが、遠くはなれてゐると、親孝行もしたくなるし、弟妹達

にもやさしくしてやりたくなる。」  
「まるで反対ね。私は段々に親や兄弟から妻や子供に移つて行かなければ、妻や子供が可哀想だと思ふわ。私は自分の親や姉弟のために、夫を苦しめようとは思はれないわ。」

4

外から歸つて来ると、彼女は彼の前に立塞がった。

「まあ大變よ。こら！ 見て頂戴。」

「……………」

「困つたわね。直ぐ歸らなければいけないでせう？」

「おまへ、あんな無理解な親のところへなど、一生行かないつて言つたぢやないか？」

彼は微笑んで彼女の腫を見た。

「だつて！」

彼女は甘えた。

「何もかも、私達を心配してのことよ。」

「金を送れつて電報を打てよ。旅費を。」

「それこそ、あなたの顔に泥をぬることだわ。」

彼女の上手な口のききかたは自然な沈黙をつくつた。

「電報を打つ位だから、餘程悪いんだわ。」

「然し困つたな。」

「あの金を貯金して置けばね。——それでも、貯金する位なら、親が苦んで居るのを見捨てて置かないからね。」

「旅費位、どうにかなるさ。」

彼女の彼の親に對する心の理解は彼を説服した。彼は三四人の友人に手紙を書いた。金を持つてゐる友人が親しく感じられる晩であつた。

「こんな時はやつぱり、郊外は不便ね。」

「電報爲替で送つて貰ふやうに書いたよ。」

「いざと云ふ時には、子供が一番力なのね。」

「それでもおまへ、私の親なんか、いくら困つても、子供を頼らうなどしないつて言つたぢやないか。やつぱり同じことなんだよ。おまへの親だつて俺のうち位に困つて見ろ！ 俺の親だつて、金のある時は、俺のことばかり心配してゐるんだぜ。」

「皆さうね、親つてものは……」  
彼女は彼が何を言つても否定しない。すべてを肯定しようとした。どうして女が従順なのか彼は領けた。

5

三日目になつて電報爲替は誰からも來なかつた。

彼女は鍋の中の鱈のやうに煩悶した。彼は自分の無力を發かれるのがたまらなかつた。

「困つたわね。あなたの顔に泥をぬりたくないし……」

彼はふと、金まはりのいい友人が近くに居るのに氣がついた。彼は膝を敲いた。

「あるかしら？」

「あれから何んとも言つて來ないんだから、お母さんはよくなつたのかも知れないな。」

「でも、行かなければ、どんなに困つてゐるのかと思はれるわ。」

彼女は自分のためと自分の親のために苦んだ。彼は自分自身のために金を借りに出掛けて行つた。

自然は、自然の美をさまたげるものを夕靄でぬりつぶしてゐた。汚い農家の軒には、蒼白い目隠しを拵へた。

雑木林の靄の間から、赤い自転車ころがり出て來た。電報配達は、ジジューと自転車をふみとめた。家が解らなくつて困つて居るのだ。

「あ、それは僕の家だ。」

「あなたは本人ですか。」

「本人ではないが、僕の家内だ。」

彼の心臓は飛び出しかけた。若しや？ が掠め去つたのだ。

「ぢや、お願い出來ますかしら？」

「貰つて行かう。」

彼は雑木林のかけの餘光にひろげて讀んだ。頭がぐらぐらつとした。深い溜息が繰返された。

「この電報を彼女に見せてはいけなす。」

彼は小聲に呟いて、ふところの中に押込んだ。

彼は人生の果敢なさを感じた。自分の老いた兩親のことがぎりぎりつと頭の中に泌み込んだ。

6

「どう？ 都合してくれて？」

彼女は訝かる表情を微笑みで誤魔化した。

「困つたわね。もう三日にもなるのに。」

「おまへね、もしおまへが行かないうちにお母さんが死んで居たとしたら、おまへはどうする。」

彼はふところの電報をおそれた。汗とともに握りつぶした。

「私、お母さんの墓に、泣いてあやまつて来るわ。」

「今死んだと云ふ電報が来たらどうする。」

「やつぱり、お墓へ行つてあやまる外ないわ。」

「死んだところ行つても仕様がないうやないか。それでも行くかえ。」

「世間に對して悪いわ。母が死んでも来れないのかつて言はれるわ。どんなに困つてゐるかと思はれるわ。」

彼女の眼はうるんだ。頬は紅らんだ。涙が汚い鼻の上にこぼれた。彼は自分を攻めたてた。

「俺はこれから東京へ行つて来る。」

「どうせ遅いんだから明日にしたら？」

「いくらでも早い方がいい。おまへはどうしたつて、明日は出發しなければいけない。」

「本當に濟まないわね。一日位おくれでもいいことよ。」

「そんな呑氣なこと言つてられるか。」

「郊外はこんな時には不便ね。」

併し弾力に漲る蒼い部屋も新しい巢も當分望めなかつた。彼は今の境遇を呑氣で深刻だと思つた。

彼は無理に自分の家を出て行つた。戸外は暗黒に包まれて、玉蜀黍の葉が哀しく囁いた。どうして

彼が、今夜に限つて彼女のためにひどく氣をもんでゐるかが彼女には解らなかつた。

——一九二五年九月二十四日——



## 悪い仲間の話

「嘘吐きの萬平は、二十年振りで、自分の郷里に歸つて來た。最早、五十幾つで、頭には白髪が混つてゐた。」

「萬平の嘘吐き野郎め、うんと金を溜めて來たつて話ぢやねえか？」

誰が云ふとなく、そんな噂が立つた。

「嘘だべど。あの野郎の云ふことで、何一つ本當だつたことつて無かつたんだから。俺、あの野郎が歸つて來たつてことも、嘘だと思つてたんだ。」

「歸つて來たのだけは本當だ。俺、三四日前に、町さ行くとき會つたもの。唯、あの女房つてのが大した女だつけど。俺、大した綺麗な女のやうに聞いてゐだつて、俺、會つて見て驚いたなあ。六十位の皺苦茶婆あでねえか。ありや、萬平より、五つも六つも歳上に違えねえな。」

「そりや見ろ！ あの野郎の云ふことで、嘘でねえ話つてねえんだから。彼方さ行つて、間も無く、

女房の寫眞だつて送つて來たのを見せられだつて、それは又とても綺麗な女だつたな。俺、そんで（藝者かなんかの寫眞でも送つて來たんでねえか？）つて言つたことがあつたつて。あの嘘吐き野郎、それに違えねえんだ。金なんか、何が溜めて來るもんか。そんなこと言つて信用させて置いて、借金する算段でも考へてゐんだべど。あの嘘吐き野郎のこどだもの……」

「併し、娘つて云ふの、あんな綺麗な娘は、又、この界限にゐねえな。萬平とあの皺苦茶婆あの間さ出來た娘だつて言はれつと、何んだか嘘なやうな氣がしんな」

「嘘だども。あの嘘吐き野郎に、なんでそんな綺麗な娘が出来るわけあんべ。屹度、はあ、何處か他所の娘を借りて來たに違えねえんだ。自分の女房の寫眞せえ、さうして他所の女を送つて寄越すやうな野郎だもの」

「俺、ほんでも、あの綺麗な娘を見て、この娘を産んだのなら。この皺苦茶婆あも、若けえ時には本當に、萬平の手紙に書いてあつたやうな、綺麗な女だつたかも知れねえと思はせられだね」

「うむ！ 俺、それで讀めた。萬平の野郎め、彼方さ行つたばかりのとき、あんな自慢らしい手紙を書いたり、あんな綺麗な女の寫眞を送つて來たりしたもんだから、その手めえ、あの娘を産んだのなら、なるほど若え時は綺麗な女に違え無かつたべと思はせんべと思つて、何處からか、そんな綺麗な娘を借りて來たのに相違ねえんだ」

部落では誰も、萬平が金を溜めて來たと云ふことを信するものが無かつた。二十年前の彼の嘘に對して、皆んな、前もつて、用意周到な警戒の網を張るのであつた。

併し、部落の人達が、萬平の歸京から第一に感じたものは、不愉快な氣持では無かつた。矢張、明るい朗かなものであつた。當然のこと身窄らしい恰好で歸つて來るに相違ないと思つてゐた彼が、妙からぬ資財を身につけて歸つて來たと云ふことへの反感はあつたにしても、待ち侘びてゐたものが戻つて來てくれたと云ふ氣がするのだつた。萬平の嘘が、利害の上から他人を傷付けたことが無かつたからだ。のみならず、彼は嘘のために、何時も利害を無視してゐた。金錢で出來る場合なら、買つても嘘を吐き度いのが彼の性情であつた。さう云ふ性情の人間なのだから、金を溜めて歸る筈はないと云ふのが、部落の人達の結論であつた。

2

萬平爺が歸つて來てから一ヶ月ほどして、部落の東北部に起伏してゐる丘の中腹へ、お寺と並んで小じんまりとした建築が始つた。そして間もなく、赤牛が起きあがつたやうに、その新築の家は、青葉の間から部落中を視おろした。それが、嘘吐き萬平の家なのである。部落の人達は、今度こそは徹底的に敲きのめされた。

「あの、お寺の東さ建つたの、萬平の家だつて話だが、一體、本當なんだべかね？」  
斯んな風に言つて、敲きのめされながらも、容易にそれを信じない人達が幾人もゐた。併し、最早、信じられないのではなかつた。信じまいとしてゐるのだ。

「あの野郎のやることだから、日が経つて見ねえとわかんねえが、どうも、今度こそは本當らしいな」  
「本當だとすつと、あの野郎の嘘も、たうとう吹きつけたわけだな」

嘘を嘘としてあばくのが時間であつたやうに、萬平が金を溜めて來たと云ふ事實も、だんだん事實として受取られて來た。

「人間なんて、全くわかんねえものだなあ。萬平の嘘吐き野郎が金を溜めて來たなんて……」  
「全く。さう云ふど、あの野郎、ひどく變つたな。近頃は、嘘もさう吐かなくなつたやうだと。改心したのかな？」

「近頃は、萬平の野郎も、旦那様ながら、さうさう嘘ばかり吐いてゐるわけに行かなくなつたのだべで。人間なんて、貧乏してゐつと、吐きたくねえと思つても嘘も吐かねえでゐられねえ時があつし、旦那になつと、吐きたくも吐けなくなるもんさ」

「若けえ時の萬平の野郎は、嘘なら、生命と取換へても吐きてえやうな野郎だつたが、旦那になつと矢張、なあ……」

萬平は、それから、新築の小じんまりとした家の中で、生活に追立てられずに靜かに暮してゐた。そして、嘘を吐くことを楽しむ代りに、毎日、講談本を讀んでゐた。話相手が寄つて來てくれないからであつた。以前とは、生活が全然違つて來たからである。殆んど百姓ばかりの部落では、話相手がほしいのなら、矢張、百姓の働いてゐるところまで出掛けて行かなければならないのだ。

併し萬平は、爐端に坐つて、自分の傍から茶道具を離さなかつた。今に誰か來るだらう？ 今にやつて來るだらう？ そんな風に思ひ續けながら、講談本を讀み、茶を呑んで暮してゐた。萬平は、讀物本の中から拾つた新しい話題が、次から次へと、頬を破つて飛出して行きさうな氣さへしてゐた。寂しさと、退屈と、萬平は自分の現在の生活を、そんなに幸福に思つてはゐなかつた。却つてどうかすると、以前の、自由に嘘の吐ける相手の豊富だつた時代を懐かしむことさへあつた。

郷里に歸つて來てから、約一年ほどして、萬平は漸く話相手を得た。

隣りの寺の次男が、中學を卒業して歸つて來たのであつた。お寺の次男の秀明は、丁度、萬平爺と同じやうに、小學校時代の友達が皆んな百姓をしてゐるので、話相手は殆んど無かつたのだ。それで秀明は毎日、萬平爺のところへ話込みに來た。

併し、大抵は、萬平爺が語手で、秀明の方は聞手であつた。正確に言へば、秀明は、萬平爺の娘の千世代と話の出来る機會がほしいのであつた。

「俺、學問がなくてわかんねえが、あの邊は、ダイヤモンドの出来る土地ですか？」

「さあ？ 併し、そんな大きなダイヤモンドなら、世界中に、さう澤山はないでせうね」

「これ位はありましたね」

萬平爺は、この話を持出すとき、屹度、親指の頭を示すのが癖だつた。

「兎に角、わたしあ、一目で、これは唯の石ぢやねえと、一目で感付きましたからね。ぴかあり、

ぴかありと光るので……」

「それで、幾らに賣つたんですか？」

秀明はわざとそんな風に訊いた。北海道で、そんなダイヤモンドを拾つたなどと云ふ話を、勿論のこと信じてはゐなかつた。

「寶石屋にばかり儲けられて了つてね。此方がまだ素人なもんだから。さうでねえと、もつと部落の奴等びつくりさせんによかつたつけが……」

「アフリカあたりでだと、勿論そんな大きいんぢや無いでせうが、砂漠の中でよく拾ふことがあるさうですがね」

秀明は、自分の私かな目的から、突込んで訊くやうな、そんな馬鹿なことはしなかつた。

「俺、ほんぢや、北海道でせえ、あんな大きなのを拾つたんだから、そのアフリカさなど行つたら、背負ひきれねえくらゐ拾つて来たかも知んねえな」

「幾ら落ちてたつて、直感力が鋭くねえと……」

「俺、直感力が他人よりうんと鋭かつたんだね。何百人と云ふ人間が働いてる中で、俺、拾つたんだから…… 彼方さ行くと直ぐ拾ふと、部落の奴等、もつとびつくりさせられたつけが……」

斯んなとりとめの無い話が毎日のやうに繰返された。萬平爺が、誇張に満ちた自慢話をして、秀明がそれに相槌をうつてゐるに過ぎないのだつた。

4

或る日、萬平は、斯う云ふ話にしてはだしぬけに、嚴肅な表情で秀明へ語りかけた。

「なあ、秀明さん。ものは相談だが、おめえ、俺家の養子になつてくれる氣はねえか？ 俺、おめえの氣心をよく知つてるが、直接談判で行くが……」

秀明は、あまりにだしぬけだつたので、何かしら突然に胸倉を掴まれたやうな氣がした。同時に、祕密を見破られたものの恐怖と焦燥とに襲れた。丁度、自分が千世代と結婚をしたいと云ふ意志を、

自分で直接にか、他人を介してか、兎に角その意志を萬平爺にまで傳へる約束が、千世代との間に出  
来たばかりの時であつたから。——秀明はどきまぎしながら根くなつた。直ぐには言葉さへ出なかつ  
た。彼は強張る頬の筋肉を、無理に、微笑に歪めながら眼をおとした。

「何もかも、さつくばらん」に話をするが、俺、實を云ふと、縁談のために歸つて来たので……斯う  
なれや、何もかも打明けて了ふが、俺、彼方でダイヤモンドを拾つたのなんか、空嘘だ。金せえ溜め  
て郷里さ歸れば、どんな暮しても出来ると思つたもんだが、いろいろと悪いことをして金を溜めた  
わけさ。——併し、よく考へで見つと、郷里さ歸つたつて、矢張、昔さんさん嘘を吐いた罰で、誰も  
相手にしめえと思つて、一度は、歸るめえかとも思つたんだが、矢張、彼方でも具合が悪くて、まあ  
斯うして歸つて来たわけなんだ。——糞度响で、金の世の中だ！金せえ持つてゐればどうにでもな  
る！さう思つてな……」

秀明は萬平爺の打明話に曳摺込まれて眼を睜つた。

「併し、よく考へで見つと、斯んなことは、長い間には自然に知れることだから、下手に縁組が出来  
ねえのだ。俺、今になつて、後悔してゐるが……これだけは、誰にも言はねえでくれ。——俺、彼  
方で、何人となく人を打殺して金を取つて来たのだから……」  
「それ、本當の話なんですか？」

「絶対に、誰にも言はねえでくれよ。俺、おめえに、千世代の掣になつて貰はうと思ふから、斯うし  
て何もかも打明けて……」

「勿論、言ひはしませんが、それ、本當のことなんですか？」

「何が面白くて、本當でねえなら斯んなこと云ふ奴があるもんかや。今までは誰にも言つたことがね  
えんだが、娘のためだから、仕方なく打明けてるのだ。なあ、頼むから、おめえ、千世代と一緒にな  
つてくれねえか？」

「僕は、別に……唯、親父が……」

「親父が？親父は、おめえせえ承知なら、屹度この縁組に賛成だ。親父だつて、さんさん人を殺し  
て小金を溜めただのだから……」

「僕んどの親父がですか？」

「まあ、言つて見れば、おめえんどの親父と俺とは、悪いもの同志なんだから、こんないい縁組は  
ねえと思ふんだがな。悪い仲間で縁組をすると、どんなことでも、お互ひに何處までも秘密にして置  
けるんだがら……」

「一體、僕んどの親父が、誰を殺したんです？」

「誰つて、一人や二人ぢやねえんだもの——そして、葬式の勘ねえ時には、部落中さ毒を撒いて歩い

たり、随分と悪いごとをしてゐるわけさ。——知つてるのは、悪いもの同志で、俺だけかも知れねえが……」

「僕んどの親父がですか？」

秀明は、眞青になつて、眼を睨りながら幾度も訊き返した。

5

「驚いたなあ！ お母さん。隣りの萬平さんは、嘘を吐くばかりぢやねえんだな。人殺しまでしてゐるんださうだで」

「萬平さんがか？ あ、さうかも知れねえな。でもねえと、ただ働いてちや、そんなに金が残るわけねえんだから」

「萬平さんだけならいいが、俺家のお父さんも、矢張、同じごとやつてゐるつて、お母さん、一體、本當なのか？」

「何を馬鹿なごと云ふんだ！ おめえは！」

「だつて、萬平さんは、何もかも知つてゐるらしいよ。お父さんが悪いごとしてんの……」

「お父さんは僧職だよ。萬平さんと同じやうなこと、何を、お父さんが、何を悪いごとしたつてぬか

すんだえ？」

「人殺しをしたり、部落中さ毒を撒いたり……」

「馬鹿馬鹿しいつ！ 萬平さんがそんなごと云ふのか？ よしつ！ 萬平さんが云ふのだな？」

「併し、お父さんさ云ふの、待てよ、お母さん！ お互に祕密にしようとは言つてゐるんだから……」

6

「萬平さん！ あんたは、改心さつしやつて、嘘も吐かなくなり、金も残して、立派な御仁になつて歸られたと思つたら、あんたは、まだ嘘を吐くんだね。えつ？ 萬平さん！ 斯う見えても、私は、僧職ですど」

「和尚さん！ 何もそんなに腹を立てなくたつて……」

「併し、嘘を云ふにも程がある。なあ！ 僧職にあるものが、蟲蟻<sup>むしご</sup>を殺すことさへ禁じられてる者が、金がほしいばかりに人を殺したとか、部落中に毒を撒いて歩いたとか……」

「まあ、和尚さん！ 俺の云ふの……」

「それや、私だつて、僧職にあるとは言ひ、人間だから慾はあるさ。慾に引かれて、本堂を修理したいからと言つちや、困つてゐる人達からまで寄附を貰つたり、庫裡の屋根が雨漏りがするからと言つ

ちや無理な寄附を貰つて、それを蓄めただけで……」  
「それだよ、和尚さん！ 俺の言つたの、その話だよ。何も和尚さんが、刃物で人を殺したのどうと云ふぢやねえど」

「知らねえものは本當にするで。いいかげんな嘘を吐かれちや、迷惑千萬だ。僧職にある者が、人殺しをして金を取つたの、葬式をほしいからつて部落中さ毒を撒いて歩いたのつて、嘘を吐くにもほどがある。あんたなら、それや、人も殺しかねえど……」

「俺だつて、刃物で人を殺しはしねえんだ。和尚さん！」

「何によらずだ。人を殺すなどと、容易に口にされべことぢやねえんだ。私だつて、人間であつて見れば慾があるから、慾のために僧職として恥ぢべきこと、悪いこと、いろいろさう云ふことはしてゐるかも知れねえが、併し……」

「和尚さん！ 俺の云ふのはそこだよ。俺は彼方で、監獄部屋の土方の棒頭などまでして、人を殺すようなことをして金を溜めて来たが、和尚さんも、お佛様を暈に著て、部落の困つてゐる者からまで寄附を搔めて小金を溜め蒐るなんて、つまり、人を殺したつて云ふの、俺、そのこと言つたんだ。俺だつて、刃物で人を殺したことはねえが、俺だつて和尚さんだつて、人を殺すやうなごとしたから、幾らかの小金が出来たので、さうでもねえと、金なんて溜るもんでねえつて言つたんだ。俺、それだ

けのごとだよ」

「ふん！ 他人を馬鹿にするにもほどがある。僧職にある者を掴まへて、人を殺したの、毒を撒いて歩いたの…… 全く、嘘を云ふにもほどがある。ふん！」

和尚はひどく憤慨して出て行つた。

——一九三〇年四月五日——

## 裏面

### 一

満三箇年の年期を契約して行つた龜代が、二年足らずで突然に機械場から歸つて來た。部落でも初めの方に指を折られてゐた器量好の彼女は、顔一面、乾疥の跡のやうに皮膚が剝けかかり、ひどく頬がこけ眼がくぼみ、のみならず髪の毛まで薄くなつて、見遠へるほど衰れてゐた。蛇の皮のやうな瓦斯八端の袷に、深緑の地に赤の花模様を散らしたナフトルの帯を締め、まがひもの大島の羽織を引掛けてゐたが、何れもみすほらしくよれよれになつて、その下に角張つてゐる骨が透けて見えるやうであつた。そして彼女は、力の無い咳をし、呼吸をはずませながら折崩れるやうにして上框に腰をおろした。

「ああ、龜代！ 汝あ……」

盆過ぎから、畸形性關節炎で、腰抜け同様になつて爐端に寝てゐた母親は、その襦袢の中からぼそぼそと身體を擡げて言つた。睡呆けたやうな低い聲で、聲と云ふよりもむしろ吐息の連続であつた。



「汝あ歸つて来たのか？ 龜代、汝あ……」

母親はもう一度斯う言つて、その自由にならない身體を幾度も押揉むやうにした。最初、母親は、龜代の歸つて来たことが、今まで、假睡の中に見てゐた夢の續きのやうに思はれたのであつたが、それが果して現實であることが判ると、嬉しいやら、やるせないやらで、もう、兩の眼にいつばい涙を溜めてゐた。

「お父う！ お父う！ 龜代が歸つて来たあ。お父う！」

袖口で眼を押へながら、母親は、裏の畑で里芋掘つてゐる父親を呼んだ。

「お母さん！ お母さんも身體の具合が悪いの？」

龜代は、小さな包みと著てゐた羽織を板の隅に片寄せて、母親の傍へ寄つて行つた。母親は、蝗のやうに痩せて蒼白い顔をしてゐた。頬肉がげつそりと落ちて、額には深い横皺が數をましてゐた。

「俺はなあ、まるで動けなくなつては…… 俺、生きてゐるうちに、汝には、もう會はれめえと思つてたのに……」

涙もろくなつた母親は、おろおろ聲で言つて、幾度も袖口を眼に押當てた。

「ああ、龜代！」

父親は泥まみれの手で這入つて来て、寝れた娘の姿に、ちつと見入つた。そして、土間の片隅から

杉の葉を掻き蒐めて、娘の荷物の無いのを、目擦ぐるやうにしながら爐端へ寄つて来た。

「歸りきりに歸つて来たのぢやあんめえ？ 三年と云ふ契約だつたから。」

「もう行かぬえやうに歸つて来たのですが。」

斯う言つて、龜代はちつと父親の顔をみつめた。この二年の間を、どんなに苦勞を仕續けたのだらう？ 額はひどく禿げあがり、兩頬の、奥齒のところがべこりと陥窪んで不精髯には目立つて白いものが殖えてゐた。

「ほんぢや、あとの残りは、金で返すことにでもなんのか？」

父親は、何か恐ろしいことにでも觸れるやうにして訊くのであつた。

「行く時に借りた分だけは、全部返したのですが。年期あいだ歸る時には、なんぼか持つて歸り度いと思つて、他人より餘計稼いだり、小遣なども使はねえやうにして溜めて置いたのだつたけれど、その金を出したり、兎に角、借りた分だけは、返して来たのですが。——其代り、俺、著物も此通りだし、汽車賃だけで歸つて来たのでも……」

「ほんでは、汝あ、著て行つた著物も無くして来たのかあ？」

母親は、力の無い聲で訊いた。

「著て行つたのは持つて来たした。行李さ入れたまま、此處の停車場さ頼んで来たのなもの。」

「まあ、金なんか持つて歸らなくなつて、身體せえ歸つて来てくれりあ、ほんでいい。母親は此通りだし、俺も、ねつから稼げなくなつて。——友代が日傭を取つて、今日も行つたが、さうでもしねえと、俺家は暮せなくなつたのだからな。——まあ、借りた分だけ返して、身體が歸つて来てくれりや何よりだ。手が無くて困つてたのだから。」

父親は、心からの、安堵の溜息をして、ぼんぼんと煙管を爐縁に打つつけた。

「お父う！ おら……」

龜代は、ちつと父親の顔を凝視してゐたが、ぐつと咽せて、其處に突伏して了つた。そして、肩を押揉み、背中に波をうたせて歎りあげた。

\* \* \*

暫く咽び泣いてから、龜代は、ないじやくりの中から呟くのであつた。

「おら、お父うや、お母さんどこ、養はねえげなんねえのに、却つて、養つて貰ふやうな身體になつて了つて……」

「なあに、心配することねえ。肺だつて、初めのうらなら金貨を煎じて呑むと癒るさうだから。煎じて呑む分にあ、本家の祖父だつて、厭だとな云ふめえから。」

父親は、斯うは言つたが、それは娘を慰めると同時に、自分自身への、一時の氣休めの言葉でしか

なかつた。

## 二

本家の祖父は、白羽二重の布片に包んで、何十年となく藏つて置いた一枚の金貨を、快く貸してくれた。然しそれは、金錢を草木のやうに惜氣もなく使ひ得て、濫い海岸へ行つて住んだり、滋養物を攝つたりして、好き氣儘な生活をすればと云ふことで、金貨そのものを矢籠の中に投込んで、それを煎じて呑んだところで別段に効能のある筈はなかつた。

何んの養生も出来ないところへ持つて来て、今までの地獄なやうな生活から解放され、一時に氣が緩んだりしたので、龜代の病状は段段いけなくなつて行くばかりであつた。それに彼女は、ひどく遠慮をして、一方からは、見るに見かねて、臺所のことをしたり、襤褸を繕つたり、出来るだけのことをして妹の仕事を助なくしてやらうと、何か夜業をも仕ようとするのであつた。

「姉！ 姉がそんなことしなくたつていいから、姉は雑誌でも読んで、自分の氣の向くやうにして暮らせ、胸の病ひは、藥よりも、氣持なさうだから。」

妹の友代は斯う言つて、日傭から歸つて來ると、毎晩夜業をするのであつた。

「うむ。ほんでも、この病氣ばり、瀬戸物の罅のやうに、一生癒らねえのだつて云ふから……」

「そんな話は、昔の話で、今ぢや、瀬戸物の罅だつて、なんとか云ふ薬で接ぎ合せる位だもの、金せえあれば……」

友代は姉の言葉を打消すやうにして云ふのであつたが、金せえあれば、金せえあれば——この此言葉は皆の心を寂しくした。その金さへあれば何も心配は無いのだが、その金が一體何處にあるだらう？ 皆んな口を噤んで了つて、火が消えて行くやうに、家の中には淋しい空氣が醸されるのであつた。

「その、金せえあれば、こんな病氣になんかなるのぢやなかつただけだ。」

重く沈んで来る雰圍氣の壓迫に堪へられなくなつて、龜代は、こんな風に言ひながら、無理に笑つて見せるのであつた。

「金？ 金のことなんか心配するなつてば、頭が禿けつから。俺、繩を縛つて賣つて。——今に、錢の無え國さ行き度えつて言はねえようにしろ。」

斯う言ひながら、友代は土間へおりて行つた。そして、どこかかと空元氣を出して薬を打つた。さうして夜業にかかる妹を見てゐると、龜代は何時も、こんな風にして生きてゐるよりも、あの時、一思ひに死んで了へばよかつたのだと、製糸場に居た當時のことを、次から次へと思ひ返した。

「金なんかと云ふものは、今時の木の葉のやうに、溜つてるところにはどつさり溜つてゐる。風に吹拂はれだどこにはさつぱり無ねえものなのさ。」

父親は、ぶかりぶかりと煙草を燻しながら言つた。

「今度、生れかへつて来る時には、皆んな風に吹拂はれねえどこさ生れで來んだなあ。」

「俺、先に行つて、窪地の、いんどこさ場所を取つて置ぐがら。」

母親は、ももぞと身體を押揉むやうにしながら、黄色に汚れた齒並を見せて云ふのであつた。

友代は爐端で、ぞりぞりと繩を縛ひ初めた。がさがさに荒れた手の甲の皺からは、薬を打つたのでぶつぶつと血がふき出てゐた。

「どれ、俺さも少し薬を寄越せ。」

父親は、煙管を置いて、手に唾をつけながら胡座を組んだ。龜代は、一層のこと自分も、母親のやうに、足腰の立たないのであつたらなどと思つたりした。

「もう、五六百ばかり溜つたがら、明日の朝は早々町さ行つて賣つて來んだけけれど、姉は何を土産に買つて來べつかない？ お母さんは何がいい？」

縛ひながら、友代はこんなことを言つてゐたが、晝の仕事の過勞のために、何時かこくりこくりと居睡を初めるのであつた。

そんな風にして過ぎる月日の間に、龜代の肺臟は、ぐしやぐしやに腐り崩れて行つた。その、彼女が家の中の小仕事に費した勞力は、再び取戻すことの出來ない血液であつた。彼女はますます瘦せる

ばかりで、顔立が眼に見えて凄くなつてくるのであつた。

## 三

龜代が歸つて來たら、稼入も多くなるのだし、そのうち聲でも貰へば、俺も、そろそろ樂隠居が出来る。——さう思つて、父親の龜太郎爺は、そればかりを待ち樂しむやうにしてゐたのであつたのに期待は全く裏切られた。娘が歸つて來たことは、何よりも嬉しいには相違なかつたが、それが一つの荷厄介になつたこともまた事實であつた。今までは、友代が日傭に出て行き、父親が屋敷まはりの畑を弄つてゐれば、それで一家は、細細ながら兎にも角にも生きて行けたのだつた。

然し龜代が、崩れかけた肺臓を曳づり込んで來て五十日とは経たないうちに、小作田から残つた米も食ひつめ、友代が日傭に行つて持ち歸つて來るものだけでは、どうにも斯うにもやりきれなくなつた。のみならず、龜代の身體は、何時までも醫者に見せずには置けないやうな状態に陥つて行つた。父親も、そこで、生活費や、龜代の醫藥代を稼ぐ爲に、何か別の仕事を見つけなければならぬのであつた。

父親の龜太郎爺は、一週間ほど前から、輕微な疝氣を患つて、腰が疼き下痢を催してゐたのであつたが、古い首巻を腰に捲いたり、襦袢を重ねたりして、朝早く唐鍬を擔いで家を出た。

空は冴え澄んで、太陽の光線は霧立つた野中を横に射てゐたが、冷めたい空氣は鼻を刺して涙を掻出した。霜は路に簇立して硝子の破片のやうに白く光つてゐた。それが少し腰を曲げかげんにして途を急ぐ父親の爪先、足袋の破れてゐるところから、全身の神経を麻痺させるほど沁みるのであつた。けれども彼は、垂れさがつて來る水漬を吸りあげたり、手拭をかんだりしながら、澤山の人夫を使つてゐると云ふ荒雄川の河岸修理工事の工事場へ、時間に遅れぬやうにと急がねばならなかつた。

工事場には、澤山の百姓人夫が焚火を取巻いてゐた。彼の部落の若い人達もその中には五六人混つてゐた。勝手がわからないで、うろろしてゐる彼に、やはり部落内の清七と云ふ中年の男が聲をかけてくれた。

「おう！ 龜太郎爺様。おめえも稼ぎに來たのが？ さあさあ、此方さ來て、あたらせえ。」

「うむ。おらもなあ。少しなあ。その、少しなあ……」

龜太郎爺は、聲をかけられたのをきつかけに、曖昧な返事をしながら焚火の傍へ寄つて行つた。爺には、斯うして働きに來ることが、ひどく恥しいことに思はれた。第一皆んな若い者ばかりで、自分のやうな年寄は一人も居ないことに氣が引けた。が彼は、此處で度胸を据えなければならぬと云ふやうな氣持を意識した。「この歳になつて、いらい苦勞をするわい」とも思つた。龜太郎爺は、少しばかり顔を火照らせて、煙草に火をつけた。

「爺様は、娘が金を持って歸つて來たので、急に慾が出たんだな。土方に來るなんて。斯う一人の若い男は、焚火の向ふから言つて、足で木尻を押しやつた。」

「金？ なんの金だ？ 借金か？」

「爺様は、春を擔ぎさ來て、自分が擔がれて歸るんぢやあんめえなあ？」

他所者らしい本職風の土工は、鼻で笑ふやうにしながら斯う言つて、くろりと背を向けてお尻をあぶつた。

「さうだと、願つたり叶つたりだが……」

然し龜太郎爺の顔は氣色ばんでゐた。

始業の鐘が、悠長に、輪を轉がすやうな音を立てて消えた空氣の中を鳴り渡つた。彼方の砂利山の横や、此方の窪地に一固りづつになつて焚火をしてゐた人夫達は、蟻の子を散らしたやうに、前後左右思ひ思ひにざわめき出した。

「龜太郎爺様？ おめえ唐鍬を持つて來たなあ？ 俺と組んで、張方に立つべ。」

爺は言はるるままに清七について土取場へ行つた。若い人達が堤防の上へ擔ぎあげる土を、春の中に入れてやるのであつた。

「さあ爺様。俺達が擔ぎ上げられねえ位づつ打込め！」

血氣な人達は、こんなことを言つて爺をからかつた。然し、次の人が來るまでには、なかなか一杯に掻込むことは困難だつた。(もう二十若かつたら、せめて十若かつたら。)汗を流して土を掻込みながら、爺はそんなことを思つたりした。

「こんなに、糞汗かいて稼いで行つて、皆んな醫者さ貢がねえなんねえだから……」

爺は喘ぎながら、呟くやうな調子で、清七に言つたのだつた。

「俺家なんかぢや、俺が斯うして、鍋さ入れるもの持つて歸るの、待つてるやうな按配だが……考へて見つと、馬鹿馬鹿しい話しさな。田を作つてながら、斯うしねえば、鍋さ入れるものもねえなんて……」

「それさ、田を作れば田で損するし、養蠶すれば、桑金にばり取られて了ふし、ふんとに馬鹿馬鹿しくて……」

「この分ぢや、今に、百姓なんかしてゐる者は、無くなつて了ふべ。」

清七も龜太郎爺も、こんな風に言ひながら、しかし一生懸命に土を掻き入れるのだつた。

「爺様達。少し休みやればいいぢやねが。まるで泥水の中の鮎のやうに、さうあぶあぶしねたつて。」汗を流して、喘ぎながら土を入れてゐるのを見て渡り者の土工は、いまましさうに、また嘲笑ふ様にして言つた。

「明日もお天道様は出んのだ。年寄は、先ばり急いで、どうも。」他の一人が言った。  
「いくら稼いだつて、賃銀は一人分だがらな。——明日の分も取りたけりや、今日は今日で、疲れねえだけ稼いで置くんのだな。」

「それさ！ ふんどだ！」

清七は斯う言つて腰を伸した。それにつれて、十時の小休みまでにはまだ間があつたが、皆んな其處に突立つて煙草に火をつけた。

「俺家の娘なざあ、三年の年期で行つて、一生涯分も稼いで来て了つて。——あんな風に、後の役が立たねえやうに追使んぢや、年期もへつたくれもあつたもんぢやねえ。」

龜太郎爺は、微笑みながら、斯う語りかけたのであつたが、語尾のところへ来るにつれ、急に、興奮したやうな獨言めく語調になり、口を尖げて呟くのであつた。

其處へ、人員點檢の若い現場監督が廻つて來た。皆は、秋の田から空へ群り立つ雀の子のやうに自分自分の仕事へと散つて行つた。

## 四

龜代が血を吐いたのは、母親と枕を並べるやうにして床に就いてから三十日ばかりの後、父親が土

工人夫に出初めてから間もなくのことであつた。

「おらよりも不幸な人だつてあるのだから…… おら、自分の家さ歸つて來て死ぬるだけでも、幸福だと思はねばならんねえは。」

血を吐いた翌翌日、龜代は瀬戸物のやうな顔をして言つた。

「何も汝あ、血を吐いたからつて、死ぬと定つたもんぢやねえんだぞ。おらなぞ、斯うしてこれ、さつぱり動けなくても生きてんのだから……」

「おら、生恥をさらすより、却つて死んで了つた方がいいもの。」

娘の氣持の沈んで行くのを感じると、母親は、自分の身體の自由にならないのが遺溺なかつた。僅かに動かし得る兩手で、布團の中にまるまりこんだ襦袢を直したり、首動かしてみたりしながら、自分等の犠牲になつた娘を、幾分でも慰めようとした。

「何も恥なことなざあねえ。女は、誰だつて子供を産すんだもの、何も恥なことなざあねえぞ汝あ。」

「ほんでも…… おら、あんどき、あのまま死んだ方がよかつた。」

龜代は獨言のやうに呟いた。

「死んでいいことつてあるもんぢやねえ。生きてゐてえからこそ難儀してんの。」

「おんでも、お父やお母さんに、何んぼでも樂させてえと思つて行つたのに、こんな身體になつて

歸つて来て、却つて難儀かけたり心配させたりして、それも、おれ一人ならだが、若し俺、孩子を産してからでも死んだら、この上、お父うと友代に、何んぼ難儀かけたか？」

言ひながら龜代は、兩の目の中に、いつばい涙を湧かせた。ひどく目立つやうになつた頬骨のあたりが、この病ひの患者の興奮した時の特徴で、薄紅を刷いたやうにあかるんで来た。

「汝が、ああして行つてくれたので、家では、なんぼ助かつたか知んねえぞ。——其代り、汝が居なくなつたので、それに友代はまだろくろく稼げなかつたし、俺も随分難儀して、お醫者様は、俺が斯う云ふ病氣になつたのも、そのためだつて云ふけれど。」

「おら、どうせこんなことになんのなら、もつと長い年期で、もつとどつさり金借りで行つて、あつちで死んで了へばよかつたのだけ。——藪袋さ入れて吊された時には、餘程殺されても我を通しべと思つただけれど、やつぱりお父うやお母さんのこと想つたりして……」

龜代は、たうとう枕に顔をあてて歎り出した。瘦せた肩のあたりが、革張りの鞆のやうに動いた。

「龜代、身體に障るぞ。汝あ！」

母の眼にも涙が浮んで来た。

咽び泣いて居た龜代が、急に咳入つて来た。五六度、力の無い咳を繰込したと思ふと、肺臓の嚢片が崩れてきて咽喉にかかつた。彼女は呼吸が詰つた。

「龜代！ 龜代！」

母親は寄つて行つて、背中をさすらうとしたが、自由にならないので、ただもぞもぞと身體を布団の中に押揉んだ。龜代は自分の力で、枕元の新聞紙へ、眞赤な襪襦綿のやうなものを吐き出した。

家の中には、この二人の病人より他に、誰も居なかつたのだ。友代は、稻扱の日傭を取りに出てゐた。父親は、今日も、唐鍬を擔いで河岸工事の人夫に出て行つたのだつた。

## 五

三日目、四日目位の血を吐いてゐたのが漸く遠のいて行つたのは二月過ぎの事だつた。雑木林が燦紫色に靄立つて南を向いた窪地には、蓬の芽や、落の藁が萌えかけて、春めく陽炎が、うらうらと立つかと思ふと、一夜のうちに大雪が来た。また冬の眞中のやうに、風が二日も三日も雪を捲いて吹き荒れるやうな頃であつた。喀血の止んだ彼女は、この頃から陣痛に襲はれるやうになつてゐた。そして龜代は、四月の初め、季節おくれのこの村に、そろそろ梅の花が咲き出した頃、男の子を生んだ。火箸に皮を著せた様に痩せ、妙に頤の突出た猿のやうな子供であつた。

「死んで生れるかと思つたのに、どうして斯う崇んだべ？」

龜代が、眉を寄せるやうにして、併し奥深いほほ笑みを、母性特有のほほ笑みで微かながら唇邊を

震はせて、斯う嘆くやうな調子で言つたのは七日目頃であつた。

その嬰兒の顔は、龜太郎爺にも母親にも、また友代にも、龜代と似てゐるところを何處に持つてゐるかを探ぐらせる前に、いろいろな男を想像させた。同時に、自分等の知らない何かしら怖ろしいやうな世界をも。

乳は無論、一滴も出来なかつた。友代が背中に入れて近所の子持女を毎日貰ひ乳をして廻つた。

「本當にこの孩子は、他人も困らせ、自分も困るのに、何故こんな貧乏家さなど生れて來たんだべ？ 金持の家さ生れて來たらよがつたべが……」

龜代は自分に代つてその嬰兒を育てる爲にまるで仕事の出来ない友代を見ると、申譯けをする様に云ふのだつた。

「そんなことを言つたつて、汝あ。」

母親は傍から友代が襦袢などを更へてやつてゐるのを愛撫の眼で見やり乍ら、よく斯う言つては龜代をたしなめた。

「あれは、汝あ、旦那つて言はれるやうな人の子かい？ それとも……」

母親はまたこんな風に、龜代と二人だけになると自分の想像を裏付けやうとしては訊くのだつた。

龜代はちつとただ母親の顔をみつめた。その眼は直ぐ涙で潤み光るのだつた。彼女は、地獄繪巻の中

の女の手のやうに瘦細つた手を出して、布團を頭から引被つた。

そのうち、龜代の衰弱は加速度をもつて進んだ。段段口もきけなくなつた。ただ、奥深く窪んだ大きな眼で天井を睨み人人を視つめた。そして、嬰兒の手を握つたまま、何か言ひたげに、あぐりあぐりと口を三四度開けたてして息を引き取つた。五月雨近く、陰陽寒暖の定まらない六月初めのことであつた。先づ、龜太郎爺も友代も、長い泥濘の路をぬけきつた様にほつとした。可哀想な生涯だつたとは思つても、涙は出なかつた。後日になつて、思ひ出して初めて泣ける種類の、餘りに生々しい悲しみだつたから。

「友代。さあ、汝あは、姉に代つて、この孩子を育てろよ。」

溜息を一つして、そして龜太郎爺は言つた。

「俺、この孩子抱いて寝でつと、時時、おつかねえ夢見るときあるど、おら。」

然し友代は、その嬰兒を育てることに、母のやうに忠實だつた。金を出したミルクヤラクトーゲンは買へなかつたので、近頃は重湯に砂糖を入れて吸はせてゐるのであつたが、友代は夜中にも、その重湯を拵へるために、毎晩二度づつ起きた。嬰兒は、どうかすると、一晩中、火がついたやうに泣き續けて友代を眠らさなかつた。それが二晩も三晩も續くことがあつた。斯う云ふ母乳を持たない子供特有の夜泣きが、そろそろ始つてゐたのである。



「ああ、この鬼の子！ 悪魔の子め、母親の生命を奪つて、置きあがつて、その上、俺まで殺すつもりか！ この鬼の子め！」

斯う言つて、友代は、もう睡むくて堪らなくなると、戸障子をがたびしやと撥返るほど強く閉めたり、器物を投げつけるやうな音を立てて片付けたりした。

「何んだや友代？ 何も孩子に罪があるわけであるめえし、そんなに云ふなよ。親も何もねえ……」

「俺等まで殺されて了ふ。毎晩毎晩、他人の苦勞も知らねえで、この悪魔の子め！」

友代は母親の言葉を打消す様に叫んで、嬰兒を布団の中へまるで投げ込むやうにして寝せるのであつた。嬰兒の泣聲は消え入る様にしやがれて来る。友代の眼には、涙が湧いて来る。と、あの、姉の臨終の顔が臉の裏に残つてゐるのだ。

「ああ、汝と俺は、敵同志の生れかほりかも知んねえ。」

斯うは言つても、友代は嬰兒が可哀想になつて来て、傍へ母親のやうに添寝をするのだつた。——すると、想像で描いた嬰兒の父親の顔が、何かの見本のやうに、次から次へと浮んで来る。姉が工場から寄越した手紙が思ひ出される。——臨終の顔……工場から送つてくれた寫眞……二人で小學校へ通つてゐた頃。——友代は何時の間にか、嬰兒の泣聲の中に眠つて了ふのであつた。

——一九二八年一月七日——

## 流 浪

昏睡の状態から覺めた時には、彼は私立某病院の雪白の敷布に掩ひ包まれた寢臺の上に横たはつてゐた。枕頭には印半纏を引掛けた二人の石工が、太い無骨な指に煙の立つ巻煙草を挟んで、銀造の顔を視守つてゐた。

「氣がついたかい？ 銀さん。」

然し銀造は、再び眼を閉ぢた。口のまはりの、腐れほたれたタワシのやうな不精髭だけが微かに動いた。顔の髯に埋め残された部分は、生氣の下つた鱗のやうに蒼白かつた。

彼は右肩の腕の附根が、づきづきと疼くのを感じた。頭の中には悪い酒を呑み過ぎた後のやうに、濁りを帯びたやうな微かな痛みが動き廻つてゐた。そして、耳の底からは、何かしら様様な雑音が湧き亂れて行つた。遠くの方から、石を刻む鑿の音が微かに響いて来るやうにも思はれた。——右腕の附根が、又づきづきと疼き痛んで來た。「一體、何處をやられたのかな？」銀造は左手を胸越しに伸

した。右肩に觸つて見た。疼いてゐるところは幾重もの繻帯が占め、火がついたほど痛むところに觸れたと思ふ瞬間、左手はその先の空間を探り纏んでゐた。おやつ！と思つて、彼は試みに、脇腹に添うて長くなつてゐる右腕を靜かに布團の中で動かして見た。が勿論、無いものの動作をする筈はない。——銀造は驚き、彈かれたやうに眼を睜いてあたりを視探つた。

「俺の……俺の……おい！右の腕だつたのかい？」

「銀さん、氣がついたかい？」

二人はまた、椅子から腰を半浮かしにして、銀造の顔を覗き込んだ。

「おい！どうして、俺の……おい！右の腕だつたのかい？ どうしても、どうしても切落さなければならなかつたのかな？ どうしても？」

「えええ。それは……」

看護婦は窓際を離れ、銀造の胸に片手を置き、いたはるやうにして云ふのであつた。

「さうで御座いませんと、どうにも、手のつけようが無かつたんです。第一、出血がひどいんで……」

「銀さん、おめえ、まあ生命拾ひをしたやうなもんだぜ。あのう、おめえ、どんなのが落ちて來たか知んめえ？」

頭が禿けかかり、銀造よりも四つ五つ歳上の、午夢のやうに瘦せ筋張つた男は、たにまめきする 匏豆煙管を嘔み鳴

らしながら言つた。

「落ちて來るのだけは、なんだか見たやうな氣もする。」

銀造は、やや落着を見せて、斯う呟いた。

落ちて來たのは、七十貫からの楕圓形の飾石だつた。丁度その時、銀造は堰底の敷石工事をやつてゐた。上から呼び叫ぶ人人の聲で眼を振上げると、楕圓の花崗石は、五十尺あまりの堰腹の斜面を、彼の背を指し、奔馳した白牛のやうに、風を切つて一直線に轉落しつゝあつた。銀造が若し、堰壁と堰底との鈍角の中に身を潜めたのであつたならば、勿論その石は、彼の身體を傷つけはしなかつたが、彼は飛立つやうにして前方へ駈け出した。二跳ね三跳ねの後、石屑に足を捉られて大の字形に腹匍ひ倒れた瞬間、巨石は彼の右腕の上へ落ちたのだつた。——銀造はそれつきり、人事不省に陥つて了つた。瀕死の幾時間を過し、昏睡の状態に彷徨うて來たのであつた。

「あの時は、俺、てつきり死んだ、と思つた。」

若い男は腕組みをしなが言つた。

「誰だつて、さう思つたさ。上から見てゐた者は。——まあ、なんて言つたつて、生命拾ひさ。なあ銀さん！腕一本で濟めば、まあ、不幸中の幸ひと言はねえなんねえんだぞ。」

「腕一本で濟めば？ チェッ！一層のこと、一思ひに死んだ方がよかつた。」

銀造は斯う言つて眼を瞑つた。その閉ぢた眼に、粒粒の露が睫毛を傳つて這ひ上つて來た。

「死んだ方がよかつた？ 何云ふだ？ 銀さんは……」

「腕一本で暮してゐる我我、腕をもがれて了つて、俺一人は兎に角として、女房や子供、どうして食はして行けあいなんだ？ 生きてゐて其の浮目を見るより、一思ひに死んで了つた方、なんぼよかつたか知んねえ。」

彼の睫毛に噴きにじんだ涙滴が、里芋の葉に溜つた朝露のやうに、一つの丸になつて頬の上に滑り出した。

## 2

銀造は矢張、病院を出てから後の生活を考へないわけには行かなかつた。

「雇主が仕事は見つけると云ふんだから、心配するにはあたらないさ。」

斯う、雇主に代つて銀造等の仕事を監督してゐた親方が來て、憂鬱に沈んで行く彼を宥めいたはるやうに言つたのは、銀造が腰にそろそろ床摺の痛みを覺え出した頃であつた。

「その中、役所の方からも涙金が下りる筈だし、これだつて、おめえ、役所の仕事でもねえど……それから、仲間達からの見舞金が、彼是六十圓ばかりあつたから、おめえが出張したと云ふことにして、

おかみさんのところまで届けて置いたから。」

「出張？ ふふむ。今に出張してゐる親父が、片手んぼになつて歸つて行つたら、驚きやがんべ。そして一家五人が、乾上らなければなんねえと知つたら、驚きやがんべ。ふふむ。」

銀造は鼻で、自分自身を罵り笑つた。

「だからさ。その暮しのことは、心配するなつて云ふのに。——おめえ、あれだけの人間を使つてくれあ、一人頭から、五錢づつ刎ねたつて、おめえの家位、どうにでもなるぢやねえか？ あ銀さん、心配するな。」

「おい、親方！ 氣休めも、いいかげんにしろや。」

憤然と言つて、銀造は、もうそんな話は聞かないと云ふやうに、眼を閉ぢて了つた。

「氣休めであるか！ おやぢもさう言つてるのだし、おめえ程の腕があれば、若い衆の仕事を見てやつたつて、一人前の仕事にあ、充分なんのなもの。——監督ぐれえ、片腕なくたつて出來らあな。」

「監督か？ ふふむ……」

銀造は眼を閉ぢたま言つた。

「笑ふ奴があるか。本當のこと言つてゐるのだ。——まあ心配しねえで、早く癒つて……」  
然し彼は、もう、眼も口も開かなかつた。

彼の眼先には、山太郎爺さんのみすぼらしい姿がちらついてゐた。彼と同じやうにして、爺さんは此前の工事場で右手を手首から切斷したのだつた。其時も、彼等の雇主から、親方を通じて、山太郎爺さんのために、心配することはねえ、おめえ程の者が……と、云ふ慰めの言葉のあつたのを、自分と同じやうな慰めの言葉を受けたのだつたことを銀造は知つてゐた。

然し、當その由太郎爺さんは、若い衆の監督どころではなかつた。病院を出ると、前通り工事場へ出るには出たが、不自由な片手で、茶を沸かしたり、其邊を掃いたり、そんなことより仕事がなかつた。或時は、若い者から煙草を買ひにやられたり、山太郎爺さんの現在は、若い衆の小使と云ふに過ぎなかつた。随つて、雇主からの給金も、一家を支へて行くに足るほどのものではなかつた。爺さんは、女房と子供達とを、農家である女房の實家に預け、近頃ではもう、まことに不自由な鰥夫の暮をしてゐるのであつた。

銀造は、(あんな風にして生きてゐるのなら……)と思はぬわけにはいかなかつた。(第一、女房や子供が可哀想だ!)と彼は心の中で呟いた。勿論、山太郎爺さんも可哀想でならなかつた。左の手でお茶を淹れて、摺古木のやうな右手を添へて茶碗を出す時のいぢらしい恰好。そして爺さんは仕事が無いと、傍の切石に腰を下して、まるで案山子のやうに、陰鬱な顔をして何時までも工事場を凝視してゐるのである。

其事を想ふと、銀造は、山太郎爺さんの傍に腰を下ろして、同じやうに陰鬱な顔をして工事場を凝視してゐる自分自身の姿が眼に見えるやうな氣がするのだつた。

3

迎ひに來た五六人の彼の友達は、ひどく燥ぎ喚いてゐた。然し本人の銀造は、いよいよ今日は病院生活を了ひ、長い間なつかしみあこがれてゐた子供達や女房の許へ歸つて行けると云ふのに、彼の心は何時にももまして、暗く暗く沈んで行くかのやうに見えた。

「なあ同胞、銀同胞よ! 今日自動車だぞ、自動車でおめえの家さ、横着けだ。」

酒氣を帯びてゐるらしく、赤い顔をした背の高い男は、あたりを掻き廻すやうな手付きをしながら言ふのであつた。

「さうだ賛成! さあ同胞、早く仕事をしろよ。おめえの家さ横着けだよ。」

他の一人がまたこんな風に言つてゐる間に、看護婦は、彼の家から届いた著物の包みを解いて、白木綿の襦袢と、セルの一重に、陽に燻けて赤ちやけた絹の羽織を重ねて銀造の背中へ持つて行つた。「ちよつと待つた!」

銀造は顔を上げて、左の手でそれを制めた。白い病室著の右袖は、だらりと垂れてゐて、彼の動作

の度毎に、肴の鱒を思はせた。

「そんなに急えちや、駄目ぢやありませんか？ 看護婦さん。」

赤い顔の男が頓狂な聲で斯う言ふと、また他の者が「まだ若いから」とかなんとか言つてからかふので、看護婦は、顔を赤らめ、著物を顔に押當てて、身體を左右に振つた。

「俺、半纏を着て歸り度いんだがな。」

斯う言つて銀造はあたりの人人を見廻した。

「半纏を着て？」

「我我が長袖で威張つて歩けるのは、こんな時ばかりぢやねえか。何も遠慮することあねえ。」

彼等は口口に言つたが、「いけねえ。そんなら、誰か俺と代つて、俺の家まで此著物を着て行つてくれ。」と言つて、銀造は背かなかつた。看護婦は仕方なしに別の包みから彼の仕事著物取出した。印半纏は、丁度あの時脱いで置いたのを、彼の胸へ掛けて來たのだつたし、シャツの右袖は、洗濯の折に切取られてゐたが、これは彼の腕と對になるのだから、すべてそのまま役立つことになつた。

「ぢや、皆さん、長長どうもお世話様で御座いました。これで暫くのお別れと致します。」

銀造は左手を膝の上までさげ、印半纏の右袖を、だらりと垂らし、彼等の前に御辭儀をした。

「何を言つてるのさ？ 銀さんは。これから自動車で、皆んなでおめえの家さ行くんぢやねえか。い

やに改まつたりしてさ。」

「いや、俺は歸るめえ。——こんな醜態になつて、今更歸つたところで、満足に女房や子供を養つて行けるわけでも無えし……」

「おやぢが、何んとでもしてやるつて云つてるぢやねえか。兎に角、歸つて見てからさ。」

「歸つて見たところで、由太郎爺さんの二の舞を踏むたあ、判りきつてるのだ。由太郎爺さんだつて、權さんだつて、それから、あの長公だつて、もう、どんだけの例があるか判んねえ。俺、それを考へると、もう何んぼにも歸る氣にはなれねえ。」

「そんで、おめえ、一體どうする積りなのよ。え、何處へ行く積りなのよ？ 歸らねえなんて。」

「俺は、これから、友達のところへ行つて世話になる。嬾のところへは、「傷口が閉なくて、温泉に行かなくちや癒らねえから湯治旁旁、温泉のあるところへ出稼ぎに行つた。」と言つて置いてくれ。嬾のところへは、薬指と小指の怪我と云ふことになつてる筈だな？ ぢや、別段心配もしめえから。——さうして、仲間の世話になつてる中に、子供達も大きくなるだらうし……」

「仲間達つて、おめえ、銀さん。誰のところへ行くのよ。何處に居る仲間のこと云ふのさ。」

「日本國中のさ。俺、これから、奉加帳を一冊持つて、日本中を廻つて來る。そして、恵まれた金の中から、毎月、女房や子供が暮して行ける位のは送るから、まあ、子供達のことあ、宜敷くお頼

ん申します。その中俵が一人前になつて、石屋でもやるやうになつたら、俺、何時でも戻つて来て、ピシヤン叩きなり何んなりして、左の手で出来るだけのことあ、手傳ふ積りだから。そして、俺、そんなときになつたら、また奉加帳を持つて廻つて来る者を、大事にしてやるだ。世はお互様だ。おめえ達も、さう云ふ者が来た時には、俺のことを思ひ出して、出来るだけのこととはしてやつてくんろ。」

銀造の聲は、だんだん願へて来た。眼にはもう、一杯涙が湧いて来た。

「それにしても、一度歸つて、子供達に會つて行つたらいいぢやねえか？」

「うむ。會ひ度えのは山山だ。然し、會ふとまた未練が残つて出られなくなるし、この醜態を見せて心配させるのも可哀想だから、やつぱり、會はずに出掛けべえ。——あ、それから、此處に、役所から貰つた腕代金があんのだが、これだけ、子供達のとこへ、届けて置いて貰ふべかな。」

「いや、旅に出るのに、何も持たないぢや心細かんべから。それはおめえが持つて行け。おかみさんや子供のことあ、俺が引受けるから。」

「なあに、俺はどうにでもなる。嬬や子供にまで、ひもじい思ひをさせ度くはねえ。御面倒でも、どうぞ。——本當に、何分宜敷くお頼ん申しますよ。」

斯う云ひながら、銀造は、涙のために詰る鼻を吸り上げ、不自由さうに片手を使つて、腰に縛つてゐた財布を解いた。

——一九二八年七月二十日——

駈 落

朝日は既に東の山を離れ、糊粉の色に木立を掃いた霧も、次第に淡く、小川の上を掠めたものなどは、もう疾くに消えかけてゐた。

菊枝は、厩に投げ込む雑草を、いつもの倍も背負つて歸つて来た。重かつた。荷繩は、肩に焼爛れるやうな痛さで喰ひ込んだ。腰はひりひりと痛かつた。脛は鍼でも刺されるやうであつたし、こむらひは筋金でもはひつて居るやうだつた。顔は眞赤に充血して、額や鼻や頬や、襟首からは、汗がぼたぼたと滴り落ちた。

「ああ重かつたちや。俺あー！」

斯う言つて菊枝は、その雑草と一緒に、馬小屋の前に仰向きに身體を投げ出した。ほつれ下つた髪が、べつたり顔にくつついてゐた。

「ああ、暑暑。」

菊枝は身體を投げ出したまま、背負つてゐる草の上に、ぐつたりとなつて、荷繩も解かずに、向ふ鉢巻にしてゐた手拭を取つて顔や襟首の汗を拭つた。

お婆さんが、裏の畑から、味噌汁の中に入れる茄子をもちで、馬小屋の前に出て來た。春からの儘麻質斯で、左には松葉杖をついてゐた。

「おう、おう、重かつたべき。二人めえもあつちや。」

蒼白い皺だらけの顔に、お婆さんは、應揚な微笑を浮べて、よろこびの表情を示した。

「俺あ、ほんとに、腰骨折れつかと思つた。眼さ、汗は入えつし……」

「うむ、重かつたさ。——それにしても、よくこんなに刈れだで。」

「なあに、あの……」と菊枝は、語尾を濁した。

實際、菊枝は、こんなに多くの草を刈つて歸つて來た事は無かつた。何時も、彼女の刈つて來る量は、一回投げ込むだけのものではあつた。だから、午に投込むのと、夕方のは、彼女の爺さんが、一日がかりで刈ることになつてゐた。然し、今朝は、彼女は不思議にも、いつもの二倍も刈つて歸つて來た。

「これなら婆さん、今朝は、半分やつていがんべ？」と彼女は、濁しかけた言葉を巧みに言更へた。

「いゝども、爺つあんはあ、なんぼか悦ぶべ。」

「ああ暑かつた。」

菊枝はもう一度斯う言つて、まだ赤くなつてゐる其顔を、手拭で拭きながら、お婆さんと一緒に馬小屋の前をはなれた。

「冷めてえ、井戸水で面洗つて。もうお飯はあ出來でつし、おつけも、この茄子せえ入れればいいのだから、早く食つてはあ。——片岡さ行ぐのに遅ぐなんべ。」

婆さんはさう言ひ捨てて、茄子を洗ひに井戸端へ行つた。

二

爺さんは、むつつりと、虫を噛みつぶしたやうな面構へで、爐傍に煙草を燻かしてゐた。弟の庄吾は、婆さんお手傳ひで、尻端折りになつて雑巾掛けだつた。

「爺つあん、今日は、午めえは草刈つさ行かねつてもいいぞ。」と菊枝は、土間を掃かうと箒を取りながら言つた。

「俺あ今朝、午の分まで刈つて來たから……」

「あ、さうが！ そいづは大助りだ。」

爺さんは、初めて無愛想な面構へをほどいた。菊枝も大變嬉しかつた。

この爺さんは、昔は非常な働手だった。二人前出来ないことは、たつた一つ、使ひ歩きだけで、一べんに、西へ行つたり、東へ行つたりすることが出来ないから……と言はれた程の働手だった。事實何んな仕事でも、大抵は二人前近く働いたものだった。が爺さんは、老衰の時を越してから、急に怠者の中へ數へられるやうになつた。

それでも爺さんは、倅の春吉と、孫の菊枝とが、毎日のやうに日傭稼ぎに行くので、儂麻質斯の婆さんに攻め立てられ、老衰した身體を、まるで曳づるやうにして、一日に二回づつは、草を刈りに出なければならなかつた。

「ふんとに俺は、棺桶さ入るまで、斯うして稼がねえばなんねえんだな……」

斯う言つて爺さんは、毎日草を刈りに出なければならなかつた。あんなに働いた爺さんだつたけれども、いくら若い時働いたことを、今の若い人達に自慢して見たところで、爺さんは、金鶏勳章も、恩給證書も貰つて居なかつたから。

「今の奴等あ、ろぐるぐ稼ぎも出来ねえで、贅澤べえぬかしやがつて。——機械でねえげ、仕事は出来ねえもんだと思つてからあ。贅澤べえぬかしやあがつて……」

爺さんは口癖のやうに言ふのであつた。若い人達は、爺さんのその言葉を嫌つた。菊枝は、爺さんのその言葉を、嫌つても居たし怖れても居た。彼女の要求が何時も爺さんのその言葉で打碎かれた。

菊枝の母が、若い年で死んだ時などは、村中に「あの爺つあまに追廻されちや…… よつほどの稼人だつて死んで了ふべさ」と云ふ噂が立つたほどだった。

然し爺さんも弱つて了つた。今は、怠者の、口喧しい爺さんとしての存在でしかなかつた。倅や孫娘のすることに、うるさい程嘴を入れるだけで、しよぼしよぼと、薄暗い室の中に燻つて居た。

三

夜明け前から出掛けて行つた父親の春吉が、山畑で一仕事して歸つて來た時は、大百姓の（それは大きな自作農であつた）片岡の家に、日傭に行くので、先に食事を始めた菊枝が、丁度食事を終つたばかりのところだった。

「父つあん、俺、先に出掛けて、片岡さ寄つて行んから、父つあんは、眞直ぐに田圃さ行くんだ。」  
菊枝は、食事の父親に、斯う言ひ置いて、直ぐにも出掛けさうな様子だったが、彼女はまだそのままもぢもぢしてゐた。

「春吉あ、菊も、いい稼人になつたぞ。今朝刈つた草なんか、一人前以上だぞ、ありや。」  
爺さんは煙草を燻かしながら、非常に機嫌がよかつた。菊枝は下を俯いて、足指で、板の間に何か書いてゐた。春吉は、菊枝の立つてゐる方へ眼をやりながら、微かに口元を凝望させた。



「ふんとに、いい稼人になつてけでまゐ。——今朝のなんか、二人前以上もあんべがら……」と婆さんは、庄吾が學校へ持つて行く握飯を焼きながら柔和な微笑を浮べた。

春吉は、たまらなく嬉しかった。今まで爺さんからなど、一度だつてほめられたことなどはなかつたではないか？ 口喧しい爺さんから、何かにつけては嘔鳴られてばかりゐる菊枝ではなかつたか？ 春吉は、浮き立つほど嬉しかった。

「明日は、どつさり小遣錢やんべでや。なあ菊！」春吉は飯を掻込みながら言つた。

「うむ、うむ。五十錢はやれよ。」と婆さんが横から言葉をはさんだ。

「俺、小遣錢などいらねえから、あのう、あの、バラソル買つて貰ひでえな。」

菊枝は、長い間心に潜めてゐた要求を、初めて言ひ出していい機會が與へられたやうに思つたのであつた。

全くそれは、長い間心の中に潜められてゐた切なる要求であつた。もう皆んな、既に二本のバラソルさへ持つてゐる人があるのに、菊枝はまだ、死んだ母が遺して行つた古い蝙蝠傘を持つてゐるだけであつた。明日の、六社様のお祭りの事を思ふと、彼女はどうしても一本のバラソルがほしかった。

然し、菊枝がそれを言ひ出すと、爺さんや父親の、今の今まで彼女に示してゐた悦びの感情は、急に一變して了つたかのやうであつた。

「なに？ バラソル？ あの、紫色の、へんつくりんな格好の蝙蝠が？」と春吉は、驚きの眼を睜つた。

「俺、紫色でねえで、水色のいい。紫色では、あんまり派手だから。」

「そんな贅澤なごとき言つて。昔なんか、蝙蝠だつて、よつほどいい人でねえど持たなかつたんだ。贅澤ばり言つて……」

爺さんは、眼を三角にして横を向いた。

「水色？ あんなもんでも、随分たげえもんだでや？」

「五圓ぐれえ出せば……」

「五圓や？」春吉は驚いたやうに言つて「五圓なら、田の草手間、十日分でねえが？ そんな高げえもの、とつても我我にやあ……」

「贅澤ばり言つて！ ほだから見る。なんぼ稼えでも、貧乏ばりしてねえげなんねえ。皆んな町さばり持つてかれで……」爺さんはますます口を尖がらした。

「此邊で、俺ばんだ持つてねえの。」

「そんなに高げえもんなら、來年になつてからでも買つて貰んだや。」と、婆さんはやさしく言つた。

「そんなもの持たなげえ、お祭さ行かれねえごつたら、明日は、お祭さ行かねえで、家の田の草でも

取れ！」

爺さんは呟鳴りながら煙管で爐端を叩いた。父親の春吉は、もう何も言はなかつた。深く考へ込むやうにして煙草を吸つた。

四

菊枝は襟を弄りながら表へ出て行つた。

「ほんぢや汝あ、片岡さ寄れよ。俺、眞直ぐに田さ行んから（父つあんは田さ眞直ぐに行きした）つて……」

春吉が背後から聲をかけたが、菊枝は何も答へなかつた。彼女の眼には一つばい涙が溜つてゐた。本當に、豊作さんの言つた通りだ！と菊枝は思つた。「馬鹿らしくつて、こんな田舎にやあ居られねえ。東京さ行つて電車の車掌にでもなれば、まさかこんなに、牛馬のやうに使れねえだつて。それに、斯うしてたんぢや、何時一緒にになれるか判んねえし……」斯う豊作が、今朝、田の水を見に来て、彼女に草刈りを手傳ひながら言つた言葉が、今、菊枝の心に再び判然と浮びあがつて來た。

豊作の家も、菊枝の家と同じやうに、貧しい、小さな小作百姓だつた。なまぢか小作百姓をしてゐるおかげで、豊作も菊枝も、日傭を取りに行く日でさへも短い夏の夜を、暗いうちに起きて、朝のう

ちに自分の家の仕事をして行かねばならなかつた。

豊作さんは、あんなに言つてくれるんだがら、一層のことあの人と一緒に東京さ行つて了はう！

菊枝は手拭の端を噛みしめながら斯う呟いて、力なく歩いて行つた。

バラソル一本買つて貰はれねえなんて。——さうだわ、さうだわ、豊作さんの言つた通りだ。一俺等みでえなもの、こんな田舎に居たんぢや、うだつがあがらねえ。田作れば小作料が高げえくつて、さつぱり徳がねえし、馬鹿馬鹿し。日傭稼ぎに行つたつて賃金が安いし、なにしたつて、賣るもの廉ぐつて、買うもの高けんだから、町の奴等ばり徳さ。」と言つた豊作の言葉を彼女は實際だと思つた。

町の人達が、田舎の金を皆んな持つて行つて了ふことは、爺さんも言つてゐた。自分の町場へ生れなかつたことを彼女は残念に思つた。町場の娘達は、どんな貧しい家の娘でも、自分よりは幸福であるやうに彼女は思つた。

母さんが生きてくれたら……と、菊枝は死んだ母のことを想ひ出した。涙が又、ほろりとまろび出た。彼女は手拭の端で眼を押へた。

五

その日、菊枝は一日中憂鬱だつた。

明日は六社様のお祭りだ！ 明後日は、祭りの翌日で、草臥れ休みだ。彼方此方の田圃に散らばつて田の草を取つてゐる娘達は、皆んな歌つたり巫山戯たり、大變な元氣だつた。然し菊枝だけは、終日黙黙としてゐた。

「菊枝つあん。明日、行きしべ？」と、川向ふから聲をかけた友達にも、彼女は、微笑みを口元に浮べて首を振つて見せただけであつた。

夜になつて、片岡の家に日傭を取りに來た十幾人かは、夕飯の時から乾燥きつて居た。今夜は勘定だ。明日は祭りだ。明後日は草臥れ休みだ。その意識は皆んなの心を浮き立たせてゐた。さうして巫山戯させた。然し菊枝と春吉とは父娘揃つてふさぎ込んでゐた。他人が冗談を言つても、春吉と菊枝とは、微かな笑ひしか笑はなかつた。菊枝は常に落着いた娘ではあつたが、今日は、落着き以上のものだつた。

「菊！ 父つあん、これが町さ行つて、髯剃つて來つかんな。」

歸りの途を、途中まで來ると、春吉は斯う言つて町の方へ行つた。菊枝はそれにも、仄暗い中で、眼で挨拶したきりだつた。然しそれから先の夜路を、豊作と二人だけの語らひを語ることの出来るのは、彼女に取つては嬉しいことであつた。

「ほんぢや、明日の二時の汽車にしんべかな？」と豊作は、前前からの約束を、そして今朝の取定めを、再び其處に持出した。

「ほだね。ほうしつと、東京さは、何時着くの？」

菊枝の心の動きは、今は判然と決定されてゐた。誓つたとは言ひ、今朝の約束までには、自分の心の何處かに、自分ながら、疑はしい分子が折折頭を擡げてゐた。然し今は、何んの疑ひもない決意に満されてゐた。彼女は心に一種の衝動を感じた。全身が微かに顫へた。

「ほんぢや、二時半までにや、停車場さ來んのだぞ。俺、先に行つて、切符買つて置つから……此處の停車場でなく中新田停車場さ。」

「著物なんかはあ、なじよしんべね？」

「著物なんか、東京さ行つたら、俺、いい流行の著物買つてけるから……」

何時か二人の手は、仄暗の中に握り合はされてゐた。

六

六社様の祭日の九時頃、菊枝は、朝仕事が済むと次の間で、母の嫁入りの時のだつた古簞笥から、二三枚の木綿の着物を取り出して、それに顔を押當て泣いてゐた。母の位牌の前には、線香が悠長に燻つてゐた。

「共處へ、婆さんが、二つの新聞紙包みを持って、痛む足を曳するようにはひつて来た。」

「なんだけな？ 菊枝！ 泣いだらなんかして…… 父つあんがこりや……」

菊枝は著物の上に突伏したまま顔を上げなかつた。

「なあ、菊枝。さあ、泣いだらなんかしねえでや。」

菊枝の胸の中には、不満な氣持が満ち満ちてゐた。彼女は、その幾分かを祖母の前に吐き出さうとして顔を上げた。眼が赤く腫れあがつてゐた。

「こりや菊枝。父つあんが昨晩買つて来たのだぞ。ほら、水色の蝙蝠。ほれから、この單衣も……兩方で十三圓だちぞ。」

婆さんは柔和な微笑を浮べて、斯う述べたてながら二つの包みをほどいた。素樸なメリンスの單衣であつた。濃い水色に、白二つの蝶を刺繡したバラソルだつた。

「ああいこと！」

菊枝は思はず言つて、そのバラソルを自分の手に取つた。

「この水色の蝙蝠、高げえもんだちな。なんだが、父つあん、借金して来た風だぞ。爺つあんさ見せつと、まだは喧しくて仕様ねえがら、見せんよ。父つあんは、昨晩は、縁の下さ隠して置いて、今、肴とりに行くどて、爺つあんと一緒に出はつて行つてから、まだ馳せ戻つて来て、菊枝さやつてけれ

あつて……」

菊枝の頬には、また、別の涙がまろび出た。

「大切にしんだぞ。この著物だつて仲仲いいもんだようだから……」

「うむ。俺、今日さしたら、後は、ちゃんと藏つて置くも。」

菊枝は涙に潤んでゐるやうな聲で言つた。

「一生懸命稼いでな。自分で稼ぎ出して買った積りで。——あ、早く支度して出掛ける。」

菊枝は直ぐに立ちあがつた。彼女は、涙が流れて仕方がなかつた。

七

あくる日は、昨日の祭りの草臥れ休みと云ふので、村では仕事を休むのが習慣だつた。

春吉と菊枝とは、朝のうち一日分の草を刈つて、爺さんも休ませ婆さんも休ませ、皆んなゆつくりしようと、草を刈りに出掛けて行つた。

仲仲いい場所が無かつた。何處も皆んな、掃いたように刈られた跡か、短い五六寸位の草のところばかりだつた。二人は、川べりや路傍を歩きまはつた。さうして歩きまはつてゐるうちに、町へ通ずる眞山街道で、二人は町の方からやつて来る豊作の父親に會つた。

「何處さ行つて來ました？」

春吉は立止つて煙草に火をつけた。菊枝は横から黙つてお辭儀をした。

「俺どこの、豊作の野郎め、東京さ逃げだべつて話でね。それで、停車場さ行つて見だのしや。若し昨日、上野まで切符買った奴あるが無えが……」と言つて、彼も煙管を横にくはへた。

「はあ！豊あんこ居ねえのがね？」

「昨日出たきり歸ねえので…… 停車場で訊いたら、上野までの切符、七八枚も賣れたのだちがら、見當が付かねえもね。」

彼は、ちよつと唇を噛むやうにして眼を睜つたが、べつと道路に唾をした。菊枝は顔を赤らめて、下水を越え、田圃の畦を川べりの方へやつて行つた。

——一九二六年九月三十日——

## 桑を植ふる繭商人

砂利川を一つ距てて、一方は桑の葉に埋もれた邊鄙な部落。その對岸は、大都會へ通ずる鐵道の上に散らばつた小さな町である。

手近くに養蠶地を控へた此町には、蠶種製造業者や、繭商人や、製絲業者が頗る多い。そして此人は町の外郊に多くの桑畑を持つてゐて、日傭人夫を使つて桑を育ててゐるのであるが、彼等は自分で養蠶をやるのではなくて、自分の本業以外に桑を賣つて利益を見ようとしてゐるのである。

それとは全く反對に、村の人人は、ろくろく桑を持たない人人までが、出来るだけ手廣く養蠶をして、全く不眠不休といふ程の労働を続けなければならないことには、案外無頓着に、割のいい手間賃を得ようとするのである。

そして此處に一つ、見逃してならないことは、村の人人が、桑の善悪は男主人の腕について彼是言ひ、繭の買上げ高の多い尠ないは、その家の女達の責任範圍になつてゐるといふ事實である。

平六爺は、蠶がもうそろそろ大眠と云ふところへ來て、自分の家の持桑ばかりでは、どうしても、桑が拾俵から足りないといふことを發見した。

これは一大事であつた。過失から一匹の蠶を踏殺してさへ、一日中憂鬱になるやうな人人が、此處で全部の蠶を桑が足りないばかりに、みすみす見殺しにしなければならぬと云ふことは、實にもつて並大抵の事件ではない。これまで喰はして來た桑の價格や手間などを勘定すると、何百圓と云ふ損害になるのだし、そればかりか、第一、世間への外聞が悪い。いや外聞が悪いばかりでは濟まない。この陽に燻けた眞黒な首が、右にも左にもどつちにも廻らなくなつて了ふ。おまけに、蠶の二の舞を踏んで、一家揃つて干あがつて了はねばならないのだ。

『まづまづ大變なことになつたで。』

斯う言つて、平六爺は、切桑畑から歸つて來ると、家族の誰彼にとなく、顔色をかへて告げたのである。

『まあづ、困つたもんだ。どうしたらいいもんだか。——今年は、どうしたつて拾俵は足りねえで、桑はあ。』

『拾俵もね！ そんなに足りねえかねー』と女房は、やはり驚きの表情で訊き返した。

『こんな足りねえ筈はねえんだが。去年だつて、自家の桑ばかりで、充分足つたのだから……』

女房のお松は、蠶種商人から、三枚も除計に蠶卵紙を押付けて行かれたのだつたことを、うちあげなければならぬかも知れないと思つたが、併し、さりげない調子で言つた。

『それさよ。去年なぞあ、六七俵餘つて、米三郎さんどこさ、貸してやつた位だつたのに。どうして足りなくなつたべやあ？』

『あ、さうだ！ 米三郎のどこさ、五俵か貸してあるな。去年、さうだ。米三郎のどこちや、まだ大眠までには間もあるらしいが、米三郎のどこから、あの桑なんとかして貰ふべで。』

『うむ。さうしたら、あとの足りねえ分位は、どうにでもなんべからね。』

女房のお松は、斯う言つてほつとした。これでどうやら、押付けられた蠶卵紙のことを言はないで済みさうだと思つたからである。

『汝あ、行つて見て來う。米三郎のどこだつて、都合があんべから……』

『あうよ。』

お松は裸足のままで飛んで行つた。

\*

『ああれ、此方の家の桑のよぐほうげてゐること。』

お松は、門口から軒端近くまで、路の兩側から茂りかかつてゐる切桑の中を通りながら、大聲で斯う言つた。

『こんなにあれば、桑の心配がなくていいで、此方の家ではな。』

『なかに、これつきり無えんがすては』と言ひながら米三郎の女房が家の中から出て来た。  
『俺家でなんかね。桑が足りなくて、何んともかんと困つて了ふのがすて。ほんで、此方の家で都合いいようなら、去年な寄越して置いた五俵、何んとかして貰へでえと思つてね。』  
『それさね。俺家でも足りねえやうだつて言つてるのがす——おやぢさ話して見つから、待つて下さいん。』

おみさは、米三郎には秘密にしてある蠶種商人から押付けられた蠶卵紙のことを、せめてお松にだけでも打明けて、自分の家でも桑が足りなくなつた理由を納得させようかと思つたが、しかし彼女はそのまま裏の畑へ米三郎を迎ひにやつて行つた。

『あんだ家でも桑が足りねえかね。』

裏の畑から戻つて来て、米三郎は、呆氣に取られたと云ふ様子で言つた。

『俺家では、拾俵から足りねえんがすて。』

『平六さん家で桑が足りねえ位なら、俺家で足りねえのは、あたりめえなこつた。俺は、今年も、平六さんどこさ頼んで、五六俵も賣つて貰ひ度えと思つてだのに。』

米三郎は斯う言つて煙草に火をつけた。

『今年も、俺家でも、足りねえで困つてのがす。』と言つて、お松は平六には秘密にしてある蠶卵

紙のことを、米三郎夫婦にだけでも打明けて、足りないわけを説かうかと思つたが、然し、彼女は暫く躊躇した。

『平六さんどこで足りねえなんて云ふんぢや、今年は、桑の出来が悪かつたんだな。毎年餘つて、他人さ貸してゐる平六さんどこで足りねえ位ぢや。——おみさ、汝あ、初吉爺様とこさ行つて見て来う。』

斯う米三郎は女房に言つてから、お松の方に對き直つて——

『俺家では、今年は去年よりも、蠶卵紙を尠ぐしたが、屹度残るもんだと思つて、先達、初吉爺様のとこさ貸してやつたりしてね。ところが、自分の家で足りなくなつて了つて。——此分ぢや、何處か桑畑のどつさり持つてゐる、町場の人達さでも頼んで見ねえばならねえが……』

『それにしても、先に立つものは金で、金がねえど、お蠶様はあ、殺して了はねばなんねえでしさ。』

米三郎の女房のおみさは、初吉の家へ行く途中で、忙しさうに此方へやつて来る初吉の娘とらよに遇つた。

『あ、俺、いいとこで會つた。あの、あんだ家では、もうあと、桑は残つて居りいんべか？』  
『残つてるとこか、足りなくて、足りなくて。——それに、去年平六さんとこからも借りでたので、

それも請求されたりしたもんだから、先達、あんた家さ貸して置いたの、若し都合つくがと思つて来て見たのでしたが、ほんぢや、駄目ですわね。』

『俺家ではね、今年は……』と言つてとらよは、初吉や世間の人達には秘密にしてゐる蠶卵紙のことを、それもやはり、代金は繭を賣つた時でいいと言つて、蠶種商人から押付けられたのであつたが。おみさにだけでも言つて、桑の足りないわけを明らかにし、今の苦しい立場を訴へようとしたのであつたが。彼女は急に、こんなことを他家の人へ知らせるのは恥だと思つたので、巧みに話を他へ廻らして了つた。

『今年は、なんだつてこんなに桑が足りねえだか？ ほんぢや俺、これから、高屋敷の東五郎さんとこへでも行つて見て来しから。東五郎さんところぢや、山の桑畑、まるで残つてるさうですがすから。』

『ほんぢやね、それ都合して貰つたら、俺家の方さも廻してくなえん。』

二人は斯う言つて別れた。

東五郎の家では、桑が餘つたのではなく、毎年毎年、春蠶はどうしても成績が悪いので、夏蠶を澤山やらうと、桑は夏蠶のために残されたものであつて、葉の上に石灰を振かけてあつたから、今直ぐ摘むと云ふわけにはいかないものばかりであつた。

『そんなわけがすから、ほんぢや、あんたがたから借りである分は、何處からか借りて返しますから、さうお父つあんに話して置いて下せえ。』

東五郎は、その事を説明してから、更に斯う付け加へた。

『うむね。俺また、どつさり残つてるつて聞いたもんだから……』

『なあに、俺どこでも、今年は足りねえ位でね。——俺とこで夏蠶の時になら兎も角、春蠶の時に足りなかつた試しは無かつたがね。——ほんで今年は、そつちこつちかり借りて了つて……』

斯う言つてから、東五郎は、其時丁度、蠶室から出て来た女房のタマヨに——

『タマ。汝あ、田中の虎三從兄のとこさ行つて見て来うや。虎三從兄は山の開窓畑さ、去年の春、どつさり桑植ゑた筈だから、屹度残つてに相違ねえ。残つてたら、拾俵でも貳拾俵でも、此方さ廻して貰ひてえつてや。なあ、西の喜代吉氏どこでも、足りなくて困つてから……』

タマヨは如何にも不平さうに頬をふくらまして斯う言つた。然し彼女は、やがて機嫌を直してとらよと一緒に戸外へ出た。

『とらよさん家では、今度は、何枚置いたのがした？』

とタマヨは、門口の紫陽花を左に曲ると、すぐとらよに語りかけた。



「たつた八枚です。」

「春蠶で八枚も置けば随分いい金にاندべでしよ。——俺家では、どう云ふわけだか、春蠶はあたらねえ。春蠶はあたらねえべて、毎年、餘計金になる春蠶は少し置いて、ろくすつぼ金にならねえ夏蠶ばりどつさり置くのだてしよ。——ほんで、皆んなは、春蠶で、五百圓とつた六百圓とつたつて云ふのに、俺家でなんか、なんぼにもそんな金とつたことねえのだから。本當に面白くもねえ。——ほだから俺、今度は……」

此處まで言つて、追のタマヨも、恥も外聞も無いと云ふやうな、何から何まで心の中の全部を語り明かさずには居られない饒舌家の彼女も、これまで亭主の東五郎には勿論のこと、世間の人達にも秘密を守り續けて來た餘分な蠶卵紙のことを話すのには、いささか躊躇せずには居られなかつた。それを言つて了へば、繭を賣つた時に、世間の人達から「それぢや、何十圓位、あたりめえなこつたさ」と言はれるに相違ないし、それがまた、亭主の東五郎に知れると、「それだから桑が足りなくなつたんだ、どうにでも汝の勝手にしろ。俺は、構はねえから」と言つて叱られるにきまつてゐる。——と云ふ考へが、彼女の心頭を此瞬間に掠めるには掠めたのであつたが、然し彼女の憤りに似た氣持は、彼女に秘密を秘密として守らせ續けては置かなかつた。

「ほだから俺、おやぢや世間の人達には、三枚きり置かねえつて言つたのがすけど、本當のことを

おやぢさ隠して、五枚置いたのがす。」とタマヨは、躊躇の後に言つたのである。

「ほだつて、とらよさん。」とタマヨはまたそのあとをつづけた。「さうでもしねえと、俺、三十日もろくろく寝もしねえで稼いで、繭賣つたつて、半襟一本買へるわけねえんだから。——俺、いよいよ繭賣ると云ふ時にや、二枚分は、おやぢさ隠して賣んべと思つたのがす。馬鹿くせえから。」

「本當はね、タマヨさん。俺家でも、俺とお母さんとで、隠して三枚置いたのがす。八枚きり置かねえことになつてのだけつとも、本當は、十一枚置いたのがすも。」

「あら、あんたどこでも？ とらよさん。——ほだから斯う桑が足りなくなつたべぢや。」

呆れたといふやうに言つて、タマヨは、幽かに微笑んで見せた。

「俺家では、そんなに置く積りは無かつただけど、蠶種屋が來て、錢は繭賣つてからでいいから、置け置けつて、無理矢理と置いて行つたもんだから。」

「あ、俺もね、初めからそんなに置く氣持はなかつただけど、あの蠶種屋めえ、桑なんかどうにもなんべからつて、無理に押付けて行つて……」

虎三は、丁度出掛けてゐて留守だつた。

「あれや、高屋敷のタマヨ従妹だてしよ。さあさ此方さ。——おやぢも、もう歸る時分がすから。」

女房のはぎのが、こたごたと取混んでゐる蠶室から、汗を拭き拭き出て来て應待した。

「俺ね、桑が足りねえもんだから、若し、従姉達のところへ、残つてめえかと思つて来て見たのですが……」

「あ、従妹達でも足りなくなりましたが？ 俺家でも、今年は摘むにいかんべと思つて當にしてゐた開懸畑の桑、今年はまだ一つ葉も摘めねえもんでがすからね。何しろ去年植ゑたのだから無理でがすけど。」

「俺家のおやぢはまた、開懸畑さ、どつさり桑植ゑた筈だから屹度餘つてゐるに相違ねえからなんて云ふもんでがすから。」

「開懸畑の桑が摘めるやうになれば餘んのでがすが、それも摘めねえし、それに今年は…… さあさ澁茶でがすけど……」

「はぎのは、秘密な蠶種のことを言ひかけて、しかし、斯んなことはやはり、誰にも言つてはいけないのだと気が付いて、そのまま話を濁して了つた。」

「ほんぢや、虎三従兄が、桑のあるところ見つけて來たら、俺家さも教へてくなえん。」

「もう歸る刻限でがすが。——いがす。餘計手に入つたら、何處さも他所さはやりいんから。門前屋敷でも足りねえなんて居りしたつげが。」

それから間もなく、虎三は町から商人を伴れて歸つて來た。

彼は朝から散散桑を探して歩いたのであつたが、桑の残つてゐるところは、村のうちにはもう何處にも無かつた。川向ふの町の、桑畑は持つてゐながら、實際には養蠶をやらない人人の手には残つてゐるには残つてゐたが、然しこれは、現金が無ければ需め難いものであつた。村の人達は、桑そのものを金にしようとしてゐるのではないから、残れば幾らでも貸したり借りたり融通するのであるが、養蠶をしないのに桑を持つて居る人達は桑を賣ることが目的なのだから、さう容易くは融通してくれなかつた。然し虎三は、桑が無いからと言つて、このまま全部の蠶を見殺すわけには行かなかつた。彼は、現金は持つて居なかつたが、川を越え、商人を訪ねて町へ行つた。そして彼は、満さへ賣つたら返済するから、桑を購ふ金を貸して貰ひたいと頼んだのであつた。

「それはいいさ、満さへ俺に賣つてくれるなら。——ほんで、桑は何處から買ふのだね？」

商人はさう言つてくれた。

虎三は此言葉に涙が出るほど欣んだ。

「何處から買ふにも、現金持たねえで、取っ付き場がねえもんでがすから。」

「よしきた。桑なんか、俺家になんぼでもあつから、金なんかいい。摘んで行つて喰はせなせえ。忙

しいようなら、切桑畑もあつから、それ切つて行つてもいいし。——其代り、蘭は俺さ賣つてくれぬえと困るね?」

「ようがすとも、ようがすとも。こんで俺も助かりす。桑がなくて、一體えつて、どうしべえと思つたんでがした。」

斯う言つて虎三は、深い深い、安堵の溜息を一つした。

「ほんぢや、金は今直ぐ拂つてもいいから、棚で約束しますかな?」

「それは、種紙一枚から、何貫目の蘭がとれつか、大體見當があるもんでがすから、何方さうでもようがす。俺どこぢや、世間でも知つてる通り、粹製十枚置いたのでがすから。」

「ほんぢや兎に角、これから行つて棚を見せて貰へますべえ。」

蘭商人は斯う言つて、虎三に踉いて村へやつて來た。

「うむ。仲仲いい出來だ。粹製十枚で、こんだけにしんにや、並大抵の世話ぢや出來ねえ。うむ、仲仲、大したものだ。」

斯う言つて、蘭商人は、十枚から收穫される大體の見當で金を取出した。

「ほだから、桑も、どツさり、とても喰つたもんでがす。」

「それさ。十枚でこれだけにしんのぢや。——うおと、十枚だとすると、一枚から、平均二貫五百として、二十五貫の、十貫七十圓の割だとすると……」

「あれや!十枚ぢや御座りいん。十四枚でがす。——お父つあん十四枚だて。」

突然次の間から出て來乍らはぎのが口を入れた。

「なに? 十四枚だと? 十枚だつたと思ふな。」

「うむうむ。菊代が、着物ほしいほしいて云ふから、餘計置いて難儀するのは、俺と菊代ばかりだと思つて、皆んなさ隠して四枚だけ置いたのでがすぢや。」

「俺また、そんなこと知らねえから、十枚にしちや成績もいいし、桑も随分喰ふと思つたのだ——ほんぢや、どうぞ十四枚で計算して頂きたがすね。」

「いやそれは困るね。ほんぢや、廿枚置いたと言はれば廿枚分拂はねえげならねえわけで。——兎に角、何枚置いたのか知んねえが、こんで廿五貫と云ふことにして置いて下せえ。」

「二十五貫ね? いくらなんでも、二十五貫と云ふことお御座りすめえ。俺、なんぼ勘なくとも、五十貫よりさがんめえと思つてたのですが……」

「五十貫ね? 五十貫なんて? そんなべらぼうなごとあるもんぢやぞわせん。」

「せめて四十貫位にやあ……」

「四十貫ね。俺はそんぢや、とても話になんねえ。」

蘭商人は眉を寄せて首を振つた。

「然し、こんで四十貫にしてくれなくちや、養蠶するもの踏殺するやうなもんでがすて。」

「ぢや、俺は、止めるより仕様がねえ。」

「ふんぢや、俺も思ひ切るから、三十五貫として、手を叩きますべえ。」

「いくら手を叩かれたつて、俺は、商賣にならねえてば。」

「若し十四枚置いたの嘘だと思ふのでがしたら、あんた方の隣だから、蠶盛堂さんに訊いて見て下せえ。蠶盛堂さんの種紙、本常に十四枚置いたのがすから。——十四枚置いて、五十貫とれねえなんて、俺家では、これまでの試しには無えことだね、お父つあん。」

はぎのは傍から、汗を拭き拭きしやべつた。

「それさ。然し、今年は桑に困るので、どうも仕様がねえのだから、俺も泣寝入りすることにして思ひ切つから、三十五貫として下せえ。」

「ぢや、両方から歩み寄るとして三十貫！これで駄目なら、俺は止めて歸りしから。」

蘭商人は今迄手にしてゐた大きな革財布を懐中に捻込んだ。

「ぢや、三十貫でようがす。——これぢや、養蠶などしねえではあ、桑で賣つた方が、なんぼいいか

知んねえ。」

「來年はお父つあん、桑のありつたけきり置けねえよね。——本當に俺、蠶盛堂さんから、無理に種紙置いてかれて、とんだ骨折り損をしたや！」

「三十貫だとすると、三七十二の一と……この部落には、まだ桑の足りねえ家があるのかね？俺家にまだどつさり桑が残つてゐんのだけつとも……」

蘭商人は、紙幣を數へながら、斯う言つて、桑を不足してゐる家、即ち、町場から桑を買ふ金の前借を望んでゐる家を物色した。

——一九二七年九月三十日——

## 暴風に別れる言葉

### 序 詞

久しい年月の習慣から、普通「くるま、くるま」と言はれてゐるのである。

然し今は、拾年も前に、水車は取毀されて薪にされ、用水堀には糯稻が植ゑられて、屋根には苔がむし、荒地野菊や姫昔蓬などの雑草が蔓延り、壁の落崩れた其水車小屋は、貧しい熊さん夫婦の住居となつてゐた。それで「くるま」と言へば、部落の人人に取つては、熊さん夫婦の家のことであつた。

熊さん夫婦には、連添うてから既に十二三年にもなるが、未だに子供がなかつた。のみならず熊さんには、親もなかつた。三十幾年の昔、この水車の持主であつた片山の家の軒下に、熊さんは或晩、捨兒にされたまま、判然とした年齢も、親もわからずに、片山の家に育つたのであつた。熊さんは、學校へは唯の一日も行かなかつたから、一丁字すら解することは出来なかつたが、年頃になると、幼ない時分から荒仕事に慣れてゐたので、村一番の稼人と云ふ噂をたてられると同時に、異常な腕力を發揮した。

熊さんが、部落の青年達から慕はれることは、その時分から引續いてゐるのである。

腕力家として熊さんは、部落の青年達を統率して、夜と云ふ夜を荒れまはつた。隣村の青年達に喧嘩を賣りに出掛けて行つたり、其水車小屋を根城にして、青年達と、その季節季節の、冬から春にかけては、鶏や兎、夏は瓜や桃、秋は梨とか柿そんなものを取つて来て、若い食欲を満したものであつた。何時の時代にもあることなのだが、鶏や兎はちと手ひどいと思つても、村の人人は、熊のやつたことだべ、まあまあと云ふ風で、別に咎めだてもしなかつた。それ程、熊さんは、村の人人から、腕力を怖れられてゐたのでなく、特別な好意を持たれてゐたのであつた。

それで熊さんは、親曳などの、夜分に出来る仕事の遅れてゐる家があると、青年達を引連れて行つて、雑作も無く片付けてくれたり、兎に角、熊さんは、村の青年達の勢力を代表してゐた。どんなことでも、熊さんを頼めば、先づ出来ないことは無いと言つてよかつた。村の娘達も、勿論、彼等の勢力範囲内に介在したわけであつた。

突如として、彼等熊さん一味の勢力範囲を侵す闖入者が、始めて此部落を襲つたのは、彼が二十二の春のことであつた。然し、これだけは、熊さんの力でも、どうすることも出来なかつた。熊さんは地踏鞠を蹈む思ひで口惜しがつたが、もうそれは後の祭りであつた。

「畜生め！俺が知つてりやな、ほんとに！」

其時はもう、部落内の、オタケヤ、光代、おきんなどの、三四人の娘達は、前借をした七十圓ばかりの金を自分の家に残して、東京の場末にあるモスリン會社で働いてゐた。その中のオタケと云ふのが、熊さんの將來の對象者で、光代は、青年達仲間では學者である専三郎の愛人であつた。何れも皆どん底に喘ぐ水呑百姓の娘で、彼女達には、七十圓と云ふ金は、何物にも代へられない、實に、大金であつたのだ。

「おら、募集に來やがつたこと知つてりや、死ぬか生きるかつて目に遇はせてやんのだつけ！」

斯う熊さん等は言つた。

「ほんとに！動けなぐなる位に……」

「再度と、この村さなど、足、入れねえやうにしてやんのだつけ」

併し、それから間もなく、村から、ほちりぼちりと、なしくづしに、五六人の青年が姿を消した。最初に、町の高等科にゐた頃の友人に手藝を得て、その、東京の場末にあるモスリン會社に勤めることを得たのは専三郎であつた。それから二ヶ月とは経たないうちに、熊さんは専三郎を頼寄つて片山の家を逃げ出して行つた。そして、モスリン會社の火夫になつて、いい金を取つてゐると云ふ消息が戻つて來ると、部落の青年達は、忙しい田畑の仕事を投げ出して、後から後からと村を逃げ出して行つた。

その理由は簡単である。

「あるべきもんが無えけりや、稼げねえや。馬鹿くせえくて……」

斯う青年達がほざき廻つた通り、彼等は、其あるべきものを追うて、村を捨てたのであつた。東京させえ行けば、華かな生活が自分達を待つてゐる。好きな女も居るのだし……俺にだつて、罐の火ぐれえ焚けねえごとあんめえ。どんなごとしたつて、今よりや、悪くなる氣遣はあるめえからと、彼等は既に、前後を想ひめぐらすことも出来なくなつて、一途に都會へ駛つて了つたのであつた。

「斯う、若え者が、皆んな、東京、東京つて、皆んな居なくなつて了つて、一體、世の中は、どうなるもんだかな？」

片山の隠居さんは、眉根を寄せるやうにして、斯う呟いたものであつた。

「耕作をするにや、なんと言つたつて、若え人達でなげりや、いいものは穫れねえんだ。どうも、困つた時世になつたもんだ。ほんとに……」

けれども、二年も経つか経たぬうちに、熊さんは、蒼白く瘦細つたオタケを連れて、再び村へ戻つて来た。都會では、腕力の強いことは何にもならなかつた。村一番の稼人も、東京では、殆んど無力に近かつた。そして、其處で何程かの安樂な地位を占めるために必要な、読み書きの能は、全然持合せて居なかつたのだから、村では幅をきかしてゐた熊さんも、まるで、羽根を焼いた蛾のやうなもの

であつた。最初から、華かな生活や、身樂な仕事を求めて行つたのではなかつた熊さんは、自分の需めたものを掴み得たので、何んの未練もなく、さつさと歸つて来て了つたのであつた。

熊さんが、無断で逃げ出した時には、恩知らずと言つて、熊さんを罵つてゐた片山の主人も、稼人の熊さんが、ひよつこり戻つて来たので、胸が腐りかけてゐると云ふ噂のあるオタケを連れ来たことは、あまり快く思はなかつたけれども、まあ、欣んだやうな顔をして彼を迎へた。そして、熊さんは今後も自分の家で働いて貰ふ條件で、自分の家の、既に用をなさなくなつた水車小屋に、オタケとのささやかな世帯を持たせ、兎に角、彼等二人の熱心を叶へてやつたのであつた。

それから、部落中の青年と云ふ青年達は、熊さん夫婦の家に、来る夜も来る夜も、又は休日などにも、季節季節の種物や、猥談、漫談、噂話を持寄つて、結婚の前日、或は村を逃げ出す日まで、その日の勞苦を洗ひ落しに来るのであつた。そして、今では「くるま」と云ふと、青年達のいろいろな話の持寄所で、其處へ行けば部落中のことは大小もらす何んでも聞ける。何時も青年達に取つては、自分の家よりも氣ままに振舞ふことの出来るところと云ふ聯想を起させるやうになつてゐる。

一

彼等は、何んの前兆もなしに、自分達の勢力範圍を襲うて来た突然の闖入者に對して、どう云ふ

方策を取るべきであるか、それを講じてゐるのであつた。

熊さんは、今は、若い時の流儀を捨てて、おだやかに話をつけろとすすめてゐた。けれども、若い人人は、若い頃の熊さん流儀に、腕力沙汰に及ばなければ承知が出来なかつた。だが、全然熊さんの言葉を取上げないわけには行かない。話は、だんだんおだやかになつて来た。

「それに、もうはあ、話はきまつたつてんぢやねえが？ 百五十圓づつ借りて……」

斯う熊さんの意を體して、青年團の幹事をしてゐる若者は言つた。

「どうも、金銭づくでやられんのですから、叶はねえや。」

「およしが連れて行かれりや、貞吉氏なんか、先づ第一に飛出す方の側だべさ。なあ貞吉氏。」

「馬鹿ばり言つて。俺、そんな……」

「チエッ！ およしの顔見なけれや、寝ても寝つかれねえ癖に、大きなことばり吐かしやがつて。」

「貞吉氏ばりでねえやうだな。およしのためにや、首も投げ出しさうな奴、どうも、其邊にも居さうだなあ。」

「何言つてやがんだい。自分だつてさうぢやねえが、五六日前の晩なんか、おせんの咳する音だけでも聞かぬえうち、俺、歸らねえなんて言ひやがつて……」

皆が、どつと笑つた。

「あ、俺は行くとも。俺だつて、電車の車掌位になれねえことあんめえがらな。」

悠然として斯う言つたのは十五年以前の熊さんのやうに、現在、部落の青年達の勢力を代表してゐる平吾であつた。

「東京さなぞ行つても、専三郎氏のやうにでもなればいいげつとも、俺等のやうなもの、東京さなぞ行くと、第一、方角がらして解かなくなる位で、まるで、馬鹿か乞食がのやうな取扱ひされつからな。一人前の男、いくら場所が變つたがらつて、馬鹿馬鹿しいや。」

斯う言つて、熊さんは、大きな身體を、ごろりと横にした。

「ほんでも熊さん、東京で「旦那」つて言はれだことあるさうぢやねえか。」

「うむ。あるある！」

熊さんは、髯面に微笑を浮かべ、話に乗つて、横にしてゐた彪大な身體を敏捷に起した。

「それはな、上野さ着いで、専三郎氏のどこさ行くときや。上野さ着いで何方が龜戸だが、まるで、方角が解がねえがら、ぼかあんと口あい立つてたら（旦那、どちらへ？）つて言つたけ。俺、お笑止くつて、なんだが、眞赤になつたやうだつたで。」

又、皆が、大笑ひをした。

「専三郎さんなんか、今ぢや、ああして、いい紳士様だけつとも、東京さ来たばりの時、よく、皆



んなに笑はれでだつけ。言葉がおかしいとて…… 光代さんなんかも、ああして、紳士様の奥様で、温泉さ湯治ながら女工募集に来たなんて云ふ位だから、今ぢやもうはあ、あの時分のごとなんか忘せで了つたべげつとも、毎晩のやうに、泣き暮らして居たもんだけや。」

斯う、田畑で働くことは出来なくて、始終、箆ばかり造つてゐるオタケは、今も夜業に、かさかさ と篠竹を割りなら、しみじみと昔を憶ひ惚ぶと云ふやうにして言つた。

「人間には、自分が苦勞したがらつて、人にも苦勞させたがる奴あるがらな。兵隊に行くど、よぐさう云ふ上等兵がゐつても……」

「専三郎の野郎だつて、昔のことば、皆んな忘れて了めえがつて……」と、部屋の隅の方に寝轉んでゐた、専三郎や熊さんと同年輩の、けれども未だに獨身である留さんは、小さな身體を、もづもづつと押揉むやうにしながら、少し怒氣を含めた語調で言つた。

「ほだけつともさ、長げえものには捲かれる、大きなものには呑まれろつて云ふごがあるがらな。どうも、なんと思つたところで、金銭づくでやるんだからどうも仕様ねえや。側でどう思つたつて、本人も親も、欣んで承知するのだから……なんて言つたつて、金のあるものにや叶はねえ。」

熊さんは、ごろりつと横になりながら、留さんを、宥めるやうにして言つた。

「専三郎さんだつて、何も好き好んで、娘達つれで行くわけであんめえげつとも、やつぱり、月給貰

つてれば…… それに、此方さ募集に来つと、會社の金で温泉さも行がれんのだし、おまけに、自分の生れた土地さ来て、百圓だ百五十圓だと、會社の金で、旦那様になれるのでも……」とオタケは言つた。

「上には、上があつてな。」

「どうせ、會社の上役なんて奴、田舎がら連れて行つた女工を道具にして、ほんで金儲けしてんのだもの。」

「もつとひどいぞ。女房の役まで、勤めらせんのだから…… 云ふことさかねえど、仕事の方で虐めで……」

熊さんは腹匈ひになつて、煙草を煙しながら言つた。が、その時、一方の隅では、薄暗がりやうに頭を埋めるやうにして三個人が、平吾を中心に、何かひそひそと囁き合つてゐた。

## 二

平吾等が「くるま」の家を出た時には、宵ながら更けぬると云ふ初夏の夜は既に十時に近かつた。女工を募集に来た専三郎が、今夜は、おせんの家から、餅の振舞に招かれてゐると云ふことを耳にしてゐる彼等は、直ぐに、その家の方へ急いだ。彼等は、何時ものやうに、歌つたり喚いたりなどは

してゐられなかつた。なんとなく、ひそひそと話さなければならぬやうな氣持を、自分に感じながら、仄暗い霧の中に走つてゐる白白しい田圃路を急いだ。路の兩側の田圃では、しきりに蛙が鳴いてゐた。堰を落ちる水の音が、その中に微かながら織込まれてゐた。

深い霧の中に、ぼうつとかすんだ灯の微かに見えてゐるのがおせんの家であつた。彼等はそれを、青田の上を横に流れてゐる霧の上に、黒く浮いてゐる杜の形や、或は長い間の習慣から、直感的に知ることが出来た。彼等は急ぎ着いて、その門口から、直ぐに前の切桑畠に姿をかくした。

## 三

専三郎と光代とは、もう歸るところであつた。

「伯母さん。何も心配することなど無いですよ。三年もすれば一人前の女になつて來ますから……」

専三郎は、白いズツクの短靴を突掛けながら言つてゐた。

「うむ。おめえが連れで行つてくれるのだから、別に心配するちうわけでねえけどな……」

お婆さんは、この時、これまでこの村から其モスリン會社へ働きに行つた娘達が、何人もなく、三年とは経たないうちに、全く元氣のない、蒼白い顔の病人になつて歸つて來、働くことも出来なく

なつて、ぶらぶらしてゐるうちに、遂に、血を吐くやうになつて死んだことを、思ひ出して居た。

「ほんとですよ、伯母さん。私だつて、さうして行つたんですもの……」

光代は、微笑を浮べて言つた。

「まあ、若けえどき、苦勞する程いいんだから、まあ、行つて見つさ。」

おせんのお父親は、上框のところにもうつと突立つてゐた。

「おめえのやうになつてくれりやいいが……」

お婆さんの様子は、なんとなく涙含ましいものであつた。

おせんが、煤ばんだ提灯に火を入れて持つて來た。子供達は、その邊に、晝の疲れで、ごろごろと假寝をしてゐた。母親は、長屋の方で、専三郎の生家への土産にと、重箱へ餅を詰めてゐたのであつたが、専三郎等が表の庭へ出た時、汚れた風呂敷に包みながら追ひ掛けて來て、無理に押附けた。

「ほんとに、少しばかりだけどね。」

「御馳走になつた上……ちや、遠慮なく頂いて行きます。」

その重箱の包みは専三郎が提げた。前に立つた光代は、煤けた提灯を提げてゐたから。

二人は、門口を右に折れて、歸りを近道に取つた。路の右側はおせんの家を屋敷から續く桑畠で、左は一段低くなつてゐて、田圃であつた。青田の上を渡つて來る夜氣は、時雨るるやうな蛙の聲と共

に、汗ばんだ彼等の身體を爽かに撫でた。彼等は、陶然とした氣持で、靜かに歩いた。

一段と高くなつてゐる桑島が盡きて、もう直ぐ、兩側が田圃になつてゐるところへ出ようとする時であつた。専三郎は、桑島の中を、こそそと駈け歩くやうな人の氣配を感じて、ちよつと立停つて其方へ眼を凝らした。併し別段なんでもなかつた。二人はまた直ぐに歩き出した。

「おせんのどこさでも行く、村の若い人達だらう。屹度。」と専三郎は、わざと聞えよがしに言つた。

「まさか？」

「いや、さうだとも。——なあに、もう直ぐ居なくなると思ふもんだから……」

「また、いろいろ若い人達が、使つてくれつて來ますよ。」

「もうこりごりだ。どうも、何時だつて……」

この時、彼等の背後からばたばたと追ひかけて來る登音がした。彼等は立停つて振返つた。と、そのとんに、何か大きなものが飛んで來て、光代の下腹部に當つた。じつしりとした重みのある、やはらかさうなものであつた。彼女は提灯を取落した。あたりは暗闇になつた。

「まあ！　なんでせう？」

光代は、二度目の聲を上げた。下腹部をさすつた手に、何か、ぐしやつとしたものが當つたからであつた。

専三郎は、マッチを磨つた。足許には、泥にまみれた俵端が落ちて居た。そして、光代の錦紗の單衣はすつかり泥になつてゐた。専三郎の、白の洋服にも、點點と、ところどころに泥の飛沫がかかつてゐた。唇を噛むやうにして、専三郎はマッチの餘燼を捨てながら桑島の方を睨んだ。其處からは、くすくすと、忍び笑ひの聲がしてゐた。

「何するんだ？　出て來い！」

専三郎は、ポケットに手を突込んで、ピストルでも探るやうな様子を見せながら嗷鳴つた。

何んの反響もないので、提灯に火を入れ、彼等はまた歩き出した。然し、彼と彼女は、背後に氣を配つた。

「出で來た！」

其處に、専三郎等が、背後を振返る間もなく、五六人の者が出て來て、光代と専三郎を、泥田の中に突落した。

## 四

「そいつは、考へもんだな、平吾。——もう少し、ゆつくりと、考へて見たらどうだ？」

熊さんは斯う言つて、昔は用水堀であつたその水田から、岸の堤へと歩み寄つた。通りがかりに話

かけたのだらうと思つて、泥水で手を濯いで、田の中へ立つたまま煙草を吸ひながら、いろいろな話を初めたのであつたが、最後に平吾が持出した話を、熊さんは、立話にするには、事が重大過ぎると思つたからであつた。

「おら、もう散散考へて見たのだ。なんぼ考へだつて、おら家に居て稼いでゐたんぢや、どうしたつて、うだつがあがんねえから……」と、言ひながら、平吾は、青草の堤に蹲んだ。

「平吾等は、俺なんかと違つて、學校さも行つてんだから、そんな風に思ふべげつとも、しかし、何處さ行つたつて、やつぱりな、俺は、どうかと思ふんだ。」

熊さんは堤の上へ止つて來て横になつた。左足の甲からは、蛭に喰はれて血が流れてゐた。両手は毎日水田の草取をするので、指先が白く腫れ、甲から腕にかけての肌は、赤黒くがさがさになつてゐた。その手で、この牛のやうに温和な先輩は、ゆつくりと煙草を填めながら、遠くから後輩の成行を視成ると云ふやうにして、ほつりほつりと話すのであつた。

「いいがら熊さん、心配しねえで、俺さ、汽車賃だけ借せ。俺、東京さ行つて、職させえ就いたら、直んぐな送つて寄越しから。」

「それやあ、なんとか工面したら、旅費位は都合してやれねえごともねえが……」

「熊さんは、俺家の人達に、旅費まで持だせて、逃がしてやつて——つて言はれんのが厭んだのだ

べ？」

「いや、いや！ さうぢやねえのだ。」

熊さんは打消すやうに言つた。そしてまた、落着き拂つた調子で續けた。

「旅費工面するのはいいげつとも、そんで平吾が、幸福しあはせになるつて云ふのならいいげつとも、俺は、どんなごでもしてやり度えげつとも、ところが、俺の考へでは、後で、平吾から恨まれることになると思ふんだ。俺は、恨まれたつて、別になんでもねえさ。唯、俺を恨むつてごと、平吾に取つては取返しつかねえ、不幸あじはせなんだがら……」

「その時はそんでいいから……、俺、どんなごとあつても、熊さんどごなんか恨まねえがら……」

平吾は、まるで高い處のものを、飛付いて引張落すと云ふやうに云ふのである。

「ほんぢやな、平吾。どうだ！ その前に、俺の云ふごとを一つ諾かねえが？」と熊さんは、微笑みとまでも行かない程に口元を歪めて、ぢつと平吾の顔を凝視めながら言つた。

「なんだか、薄氣味が悪えな……」平吾は微笑んだ。

「俺、無理なごとなんか言はねえ。——唯、俺に、媒介なかつせさせねえが？ 平吾は、おせんと、夫婦になる氣ねえが？ ——俺だつて、一生のうちにあ、一べん位は媒介しねえどな。一生のうちに、三度媒介しねえ者、今度生れ更る時、土龍もんぐらちになつて生れるつて云ふがら……」

斯う熊さんは、笑ひで語尾を結んだ。

「ひでえや、熊さん。何もかにも知つてで、知らんぶりして、知らんぶりして、圖星を指して、あんなこと云ふんだがら。——人の心持まで知つてで、知らんぶりして……」

「そんなことねえ。——ただ、平吾が、おせんと夫婦になつてもいいて気があつたら、俺に媒介させて呉れ。さうすれば、平吾の家でだつて、なんほいいが知れめえし、おせんの家でだつて、欣ぶ筈だし……」

「ほだつて、東京さ行つて居ねえものど……」

「そんなこと、どうにでもなつさ。おせんの家でだつて、やり度くてやつたんざやねえんだ。やつぱりほれ、金に困るがら…… ほだから、其處をうまぐやるのさ。百五十圓借りださうだがら、おせんの家から七十五圓出させて、平吾が七十五圓出すのさ。七十五圓つて金は、大金には大金だが、なあと、専三郎氏が仲に遣入つてのだから、今年の暮までとかなんとか、話がつくべから……」

「ほんちや俺、熊さんに任せる。——ほんでも、金出して買ったなんて言はれつと俺、厭んだな。」

平吾は、急に語調を明るくして、草を撈り取つて噛み切つた。

「先に夫婦になるのさ。それがら、平吾の家のもんだもの、借りてる金、拂つてやるのあ、あたりめえちやねえが？」

「まがせる、まがせる！ 熊さんに任がせつから、いいようにして呉ろ。」

「さうすれば、俺のやうに、身體の腐りかけた女連れて歸らねえたつていいわけだがらな。俺なんか、東京さなど行がねえで、田舎で百姓してる娘貰へば、今頃、子供だつてあつたのさ…… まあ、欺されつと思つて、俺の云ふこと諾いて見る。」

「ほだがら、まがせつてば！ 俺、さうして貰へば、東京さなど、行くに及ばねえのだから……」

## 五

朝早くから、熊さんは、片山の家へ稼ぎに行かなければならなかつた。が、熊さんは、あまり敏速に立廻れないオタケが、麥飯を炊いたり、味噌汁を拵へたりしてゐる間に、屋敷まはりの畠に荒れぼろけた雑草を撈りに出た。休日だけに自分の家の田畑を耕し、他の日は、毎日片山の家に行つて働いてゐるので、裏の芋畑は、何處から手を下していいか、氣まどひするほど、雑草は荒れぼろけてゐた。

熊さんは、他人の前では、決して、溜息を洩らしたり、愚痴をこぼしたりする男ではなかつたが、彼は今、小畦に突立つて軽い溜息を吐いた。

「お早がすの。——まあ、早早ど、精が出つこと……」

背後に、斯う言ひながら歩み寄つたのは、平吾の老母、お民婆さんであつた。

「なあに、俺はこれ、二人分嫁がねえげなんねえので……」

熊さんは、機嫌のいい微笑を返した。

「あんだがたなど、ほんでも、子供はねえし、それに比べつと、俺家でなざあ、三人分も四人分も嫁がねえげなんねえので…… まあづ、よく育てたことや、これ！」

お民婆さんは、里芋の長く伸びた莖を、撫でるやうにしながら言つた。緑色天鵝絨のやうなその葉の上に、水銀のやうに溜つてゐた大粒の露が、きらきらと朝湯に輝きながら婆さんの着物の裾にこぼれかかつた。しかし婆さんは、その美しい露などには全然無頓着に、ばつばつと手で拂つて、尙も里芋の、莖ばかりを愛翫すると云ふ風であつた。

「ほんとに、よく出来て。綺麗に……」

「なあに、此通り草だらけにして置くので……」

そして尙、お民婆さんは、四方山の話ばかりしてゐて、容易に用件には這入らないのである。熊さんは、此方から水を向けなければならぬと思つた。

「こんな早く、何が、用でも有したが？」

「うんね、他でもがいが、俺家の平吾野郎が居ねえぐなつたもんだがら……」

「え？ 居なくなつたつてね？」

「昨日の午から、町まで行つて来るつて出掛けて、昨夜は、歸るが歸るがと思つて待つてたのですが、今朝になつても歸んねえのでがすて。——ほんで、あれがら、あの野郎、どんな氣持でゐだが、あんだに訊いでみへえと思つて……」

「俺も、あれがらるるぐ會はねえげつとも、居なくなれば、確か？ 東京さ行つたに相違ねえと思ふね。」

「ほんでね、熊さん。俺は、先達あんだがら話のあつた、ほれ、おせんを嫁に貰ふ話ね。ほんで平吾が家さ歸つてくれんなら、俺、おせん貰つてもいいから、金も、なんとかして…… そんで、平吾の野郎、家さ呼戻されめえがね？ おせん連れで歸つて來てもいいがら……」

「それさな！」

熊さんは、うつむいて、考へるやうにしながら、鼻から息を出した。

「俺ね、さう云ふな大金、今、今つてことには出せねえげつとも、秋までになら、秋蠶でも置いて、なんとか仕つかから、どうにがなんめえがね。何しろ平吾に居られねえちや、俺家では、親父はあの通り腰ぬけも同様だし、後は女子孩子ばかりで、本當に、飲むようも食ふようも無えのでがすから。——俺、なんとでも、平吾のいいやうに仕しから。おせんと夫婦になつたつていいし。——兎に角、おら

平吾に歸つて貰らねえと……」

お民婆さんは、たうとう、短い筒袖を引張りながら、それを目に押當てた。

「あん時、さう言つてくれると……」

熊さんは、ちよつと不平らしさうに言つた。

「しかし、今、そんなこと言つても仕様がねえとつて。——兎に角、おせんを貰ふとすれば、身體悪くして貰つちや、俺のやうに困るがら、一日も早い方がいいがら……」

「ただね、金のごとが心配で、おらは。」

「金の方は、斯うなせえ。俺、片山さ話して借りでやつから、平吾を、休日やすみにだけでも、片山の茅野さ、開墾に出すことしさせえ。さうしべと、三四年の間にや、綺麗に返せつから……」

「さうして貰ふと、俺、なんぼ助たすつか知れねえのつさ。おら、熊さん、あんだになんてお禮言つていいが……ほんとは、若者同志わかちは、荒島あらいまさほりける地縛ぢばくのやうで……」

お民婆さんは、少しばかり顔をあからめるやうにして、高聲に笑つた。

——一九二七年六月三十日——

## 緑の芽

—

弾力に富んだ春の活動はいたるところに始つてゐた。

太陽は燦爛と、野良の人人を、草木を、鳥獸を、すべてのものを祝福してゐるやうに、毎日やはらかに照輝いた。農夫は、朝早くから飛起きて、長い間の冬眠時代を、償はうとするかのやうに働いてゐた。

菊枝はまだ床の中で安らかな夢に守られてゐるらしかつた。父親は、朝飯前にと、近所へ出掛けたきり、陽は既に高く輝いてゐるのにまだ戻らなかつた。祖父は爐端で、向脛を眞赤にして楷火をつつきながら、何かしきりに、夜更かし勝な菊枝のことをぶつぶつ言つたり、自分達の若かつた時代の青年男女のことを呟いてゐた。そして時時思ひ出したやうに、どうしても我慢がならねえ……と云ふやうに、菊枝の眠つてゐる部屋の方へ、太いどら聲で呼びかけた。

「菊枝！ 菊枝！ もう、午になつてはあ！ もうてえげに起きだらいかべちやは。」

「斯う祖父は、幾度となく呼起した。けれども、彼女は、すやすやと眠つてゐるらしく、なんとも答へなかつた。」

彼女が自分自身の時間を惜む近頃の癖から、もう一つは口やかましい祖父に対する反感から、眠り果てぬ眠りを装うてゐるのだと云ふことは、祖母も母も感付いてゐた。が、母は、彼女の眞實の母でないといふ遠慮から、彼女を起しに行くだけの大膽さはなかつた。祖母はまた、軒の下や庭に散らばつてゐる塵を掃き蒐めながら、揺起しに行かうか、いま揺起しに行かうかと思ひながらも、また一方では、自分の娘以上に手をかけて育てた子供だけに、ただの一分間でも餘計にじつと寝かして置き度いやうな気がした。

「本當に、今時の娘達は氣儘なもんだ」祖父はたうとう獨言を始めた。

「夜は夜で、夜業もしねで、教員の試験を受けつとかなんとかぬかして、この夜短か時に、いつまでも起きてがつて、朝は、太陽おてんかまが小午こひるになつても寝くさつてがる。身上しんしょうだつて財産かまごだつて、潰れて了ふのあたりめえだ……」

彼女の繼母は、祖父のこの呟きを、快く聞き流しながら、背中に小さな子供を不恰好に背負ひ込んで、圍爐裏で澤山の握飯を焼いてゐた。

祖母は戶外から這入つて来て、あまりにも口やかましい祖父に、不機嫌な視線を投げかけた。然し

祖父はそれどころではなかつた。もう既に焼飯も焼けてゐるのに、菊枝が起きて来ないと云ふだけのこと、肴を漁りに行く時間が遅くなるのに、まだ朝飯にならないのだから。子供達も、學校の時間に急きたてられながら、飯になるのばかりを待つてゐた。

「學校さ行く小兒も、やきもきしてゐんの……」

祖父は最後に斯う呟いて、眞赤にやけた向脛を一撫でして腰を伸した。そして、菊枝を蹴起してやると云ふやうな意氣込みで、彼女の寝てゐる部屋に這入つて行つた。

一一

皆んなが食卓のまはりを、襤褸束を並べたやうに取巻いて、いざ食事にかからうとしてゐるところへ、彼女の父親が他所から歸つて來た。皆んなは彼を眼で食卓の傍へ招いだ。

父親は近所での見聞を、断片的にものごたりながら食卓に就いたが、食事にとりかかつてその種を失つた。祖父は重い口調で命令的に訴へた。

「松三。少し菊枝さ、言つてきかせて置がせえちや。俺言つたて、馬の耳さ念佛だから……」

祖父は斯う切り出して松三の顔を見、菊枝の表情かほいろに見入り……

菊枝の頬はほんのりと紅がさして、自然に頂垂れて了つた。そして彼女は、まるで飯粒を數へるや



うに、飯粒の上に、箸の上に、小さな動作を繰返した。

「まだ初稼ぎだで、山仕事で疲れてんのがと思へば……」祖父は容赦なく続けた。

「この忙し時、朝つばらから、寢床の中で書物を見てがるんだから…… 本當に呆れだもんだ。」

松三は、けれども何も言はなかつた。——そんなこと、別に取立てる程のことでもあるまい——そんな表情で飯をかき込んだ。菊枝は、全く濟まないことをしたと云ふやうに、そのまま消えても了ひ度いと云ふやうに、ほんのり、顔を赤らめて、息を殺して碗に盛つた飯をもてあまして居た。

「こんなことは、俺が言はなかつた…… 松三は何んと思ふか知らねえが。俺は、百姓の娘がこんなごつては……」

祖母が横から、祖父の顔を睨むやうにして、そして祖父の言葉尻を捉へるやうに言った。

「そんなこと言つたつて、爺ちあまや。何しろまだ十六だもの…… 裁縫習えにもやんねえのだもの、考で見ればこのわらしも……」

祖母はまづ自分自身の哀れなオールライフを涙含ましく思つた。

「考へで見れば、可愛想ださ。ほんでも、朝ばらから、寢床の中で、書物を読んでるなんて、百姓の娘が……」

「學校の先生様になんのぢもの、何、いがすべちや。」と、黙り續けてゐた繼母が突然口を入れた。

松三は食事の間、一言も口をきかなかつた。食事が済むと、しかし悠長に煙管をくはへて、何事をおいても、この事を解決して了はねばならないと云ふやうな表情で、けれども、全く落着き拂つた態度で……。

「菊枝！ 臺所が濟んだら、ちよつと此處さ來うまづ。」

菊枝は臺所からおどおどしながら出て來て、窮窟な雪袴の膝を板の間に折つた。

父親は、掌でぼんぼんと煙草の吸殻を落して、睨つと、頂垂れた菊枝の顔を視凝めた。

「菊枝！ 貴様は、年も行かねえのに、いろいろど氣がついて働いでくれで、仲仲感心な奴だと思つて居たら、もつての外の考をもつて居んなや？」

菊枝は、黙黙として頂垂れ續けた。祖父は幾分後悔の氣持で刻煙草を燻らし續けて居たし、祖母はかばつてやらねばならぬ折を、おどおどしながら待つて居た。

「今までは本當に、全く感心な奴だと思つて居たのに…… 今からは、そんなごつてはなんねだや。この通り、俺家と云ふもの、縁ぐ者つてば、俺とお前ばかりだべ。母は母で病身だし、他は、年寄わらしばんだ。——そして、貴様になど、どんなことあつたつて、受かりこなどねえんだ。毎日それにはり一年もぶつ續け勉強した、かしゆくさんせえ、落第したんだもの。」

「百姓の子は……」祖父が突然口を入れた。

「みつしり百姓のことを習つて、いいどこさ嫁に行けば、それでいいんだ。學で飯を食ふべと思はねえで……」

「そんな、柄であんめえちや。」

繼母は臺所の方から出て来て、罵りを含んだ微笑に口を歪めながら言つた。

菊枝はその言葉がきくりと胸にこたへた。が、彼女はちらりと睨むやうな視線を走らせたきり、猶も頂垂れて黙り續けた。

「よく聞いて置いてな、菊枝！ 今おめえに稼ぎを休まれたら、父が一人で、どうも斯うもなんねえんだから……」

斯う云ふ祖母の表情は、ことにその眼は、菊枝の心に温な、しかも涙ぐましい影を落した。

「それでもこんでも、試験を受けて見つと云ふのなら仕方がねえげつとも、ほんどき、旅費も何も自分で心配しんだでや。俺は、不賛成などには金が出さねえがら……」

父は斯う言つて煙管を敲いた。

「そんなごと無えんだから、早く稼ぎさ行く支度をしてはあ……」

祖母は傍から、庇護ふやうに言つた。

菊枝は澁澁と立上つて、だが、直ぐに山ゆきの支度にかかつた。

三

菊枝はすつかり沈んで了つて、細い山路をのぼる時から、父親の踵のあたりに視線を下したきり、全く黙り續けて居た。松三は、どうかしてこの不快な沈黙を破り度いと、しきりにその緒を考へたり四邊を見廻したりしてゐた。

草の芽はゴム細工のやうな、さもなければセルロイド細工のやうな新芽を土の中から擡げてゐた。エポナイトのやうな弾力と光澤を持つた、あらゆる樹木の梢に群る木の芽は、ずんずんと日毎にふくらんで行き、いろいろの小鳥は思ひ思ひの音色で木の枝に囀り廻つてゐた。けれども何等沈黙を破るべき機會を與へられなかつた。

その沈黙！ しかも、もの哀れな、涙ぐましい沈黙は正午になつても續いてゐた。松三は、母親の無い自分の子、この力無い表情を視續けることを堪へられなく思つた。

「菊枝！」と、松三は突然、思ひ出したやうに彼女を呼んだ。

その時、彼等父娘はちらちらと崩れかかる楷火を取巻いて、食後の懣ひを息づいてゐたのであつたが、菊枝は野を吹く微風に煽られて、ゆるる絹絲の絡れのやうな煙を凝視めて、惱ましい空想に追縛

ると云ふ様子であつた。が、彼女は、父親から呼びかけられて初めて僅かに顔をあげた。

「おめえな、菊枝……」と、父親は重苦しい口調でこれだけ言つて、深く煙草の煙を吸ひ込んだ。

「え。」と菊枝は、聲に出しては言はなかつたけれども、そんな風な表情で、人なつこい眼を父の方に向けた。

「おめえ、本當に試験を受けんのだごつたら、みつしり勉強しなげえなんねえんだ。」

「ほだけつとも……」

菊枝は、父親のあまりに當外れたこの言葉に、なんと答へていいのか解らなかつた。

「汝あ、家に居では、とつても勉強なんか出来ねえんだから、山さ来て勉強しろ。山さ書物持つて来て…… 汝あ尅る分ぐれえ、父が尅つから、汝あな一生懸命に勉強しろ。」

父親のこの言葉は、菊枝に取つて涙含ましかつた。それは、あまりに温い、涙含ましい言葉であつた。

「ほだけつとも……ほだけつとも……」

「何、構ふごとねえ。家の人達はあの通りみんな不賛成だけつと、俺だけは、汝を百姓にしたぐねえと思つて……」

「爺様や、繼母さんは、(家のごとは考へねて、自分ばり樂すること考へでる) つて云ふげつとも、

俺は稼いだつて大したごとも出来ねえから、何が外のごつて……」

「そんなごど……汝あも仲仲難儀だ。汝あの實母も、百姓などしねえけ、まだまだ死ぬのでなかつたへ……」

彼は、若くして死んだ愛妻の死の前後を、その哀しむべき半生を心の中で思ひ描いた。——それは菊枝を生んで間もなく、當然床の中に臥してゐなければならぬうちに、恰度それが田植の時期だつたので、無理に田圃へ出たのがもとで、産褥熱が昂じ、ひどい出血の後に、忙しい時期に産をしたことを氣にもみながら、夢見心地のうちに死んで行つたのであつた。

「俺、月給取るやうになつたら、毎月なんほかづつでも家さ送つて寄越しべと思つて……」

それは菊枝の眞情であつた。彼女は、同級の誰彼が、みんないろいろの方面へ進んで行つて、自分一人が野良に残されたことを悲しく思ひはしたが、決して父親の苦しい生活を忘れては居なかつた。

自分自身を救ふと同時に父親をも、いやそれよりも、自分を捨てて父親を助けねばならない……さう云ふ氣持から受験を思ひ立つたのであつた。

「そんなことは心配しねえでも、まあ、みつしり勉強して…… 試験を受けさ行く時の旅費位、父がなんとかしつから、こつそり行つて受けて來い。」

「俺、父と二人ばりだら、試験なんか受けさ行かねげつとも……」

菊枝の兩の眼には、何時の間にか熱い涙が湧いてゐた。

「父は、汝を百姓にしたぐはねえと思つて……貧乏さえしてねげ、女學校さもなんさもやりでえのだが、貧乏なばかりに、ろくに書物も買つてやれねえが……」

「ちあんや！ちあん！……」

彼女に涙に光る眼を上げて、斯う父親を呼んだが、父親のその温い情に對して、自分の感情をどう表現していいか解らなかつた。彼女は、もう、試験を受けずに、手不足を我家のために一生懸命に働くと言ひたかつたのだ。

「俺は、汝を百姓にしたぐねえ。汝も難儀だけつと、そいつぱり勉強して人達と一緒に試験を受けるなんて……まあ明日からは、山さ書物を持つて来て勉強しろ。父が汝あ分まで伐つから……」  
松三は斯う言ひながら、自分の美しかつた若い妻が、菊枝の母親が、如何に惨めな半生を送つたかを、農村の女達が、如何に虐げられるかを思つた。

太陽は大分西に傾いて、淡い陽脚を斜めに投げ出してゐた。緑の新芽は思ひ思ひの希望を抱き、楳火はとつぷりと白い灰の中に埋れてゐた。

一九二五年十二月三十日

闇の音

高井戸村一帯の土地は井戸が極めて深かつた。水は薄暗い底に、まるい懐中鏡のやうにきらめいてゐた。ロップは水を汲みあげる毎に車輪を嚙んだ。ロップの車輪を嚙む無氣味な音は、心棒の軋る音の中に重なり響きもたせて、廣漠の高原地帯を渡り、杜の中へとなだれ、まるで刻みこんで行くやうであつた。

彼女は限りもなく釣瓶の音を氣にした。氣にすればするほど無氣味な音は彼女を病的な憂鬱の中へと導いた。

「無氣味な、厭な音ぞすこと。ほんまに、ぞつとするやうぢや。」

彼女はしきりに郷里の浅い井戸の晴やかな音をなつかしんだ。家賃が滞るやうになつてからは彼女は尙一人郷里を憧れ、家主の家の井戸に身をおのかした。

「なんて厭らしい音なんぢやろねえ。やつぱり井戸が深いからぢやろかねえ。」

「手めえのやうに譯の解らねえことを云ふ奴はありやしねえ。井戸は深い程いいんだ。深ければ深いほど、水はいい水が湧くことになつてゐるんだ。」

「誰も、水が悪いなんて言へやせんのに。ただ釣瓶の音が無氣味ぢやつて……」

「釣瓶の音が、人をとつて食つた試しがあるかえ。」

彼は自分の無力を遠廻しに辯護しようとした。知邊の尠ない東都の郊外でこそ、彼は無力であつたが、郷里では名を知られ、その腕を知られて、建築大工としての信用を一身に蒐めてゐたのであつた。だから彼は、最初の意志を貫いて、纏つたものを掴まぬうちは、どんなことがあつても歸れるものではないと、固く心をかためてゐた。

「家賃さへ、きちんきちんと拂つて行かれりや、私、なんでもありやへんのぢやけど……」

「家賃が滞つたからつて、釣瓶の音が無氣味になるつて法は無えぢやねえか？ え？」

彼は事毎に虚勢を張つた。彼女を壓倒することによつて自分の無力を掩隠し、自分が知邊の尠ない土地に於ても決してへこんでゐるものではないことを、堂堂と心の鬨ひに鎬を削つてゐることを、そして臆ては勝利を占め得ることを彼女に信じさせようと努めた。

彼女はけれども、彼が虚勢を張れば張るほど、家賃の催促が激しくなればなるほど、郷里を憶れ、老父母の手に残して來た自分の生んだ父知らぬ秘密の子をなつかしんだ。彼が夫の権利を振まくこと

は、彼女を憂鬱にし、孤獨の淋しみと悲哀とに袂かせるに過ぎなかつた。彼女は、效能のない彼の虚勢の言葉のかけに、結婚以前の幸福な生活や、父母の温い心や、兄弟姉妹や友人知人、自己の生んだ父無兒のことを想ひ描いては、明け暮れ泣き暮したのであつた。

「ね、あなた！ 見込のないところに、何時まで居ても仕様がありやへんぢやろが？……」

「見込みがねえなんて、何を土臺にそんな事が言へるんだ。まだ出て來て、半歳も経たねえぢやねえか。それにまだ知合ひも出來ねえんだから……」

「ぢやから、知合ひのあるところへ歸つたらよかるがね？」

「女に何が判るけえ。黙つてろやえ。」

彼女は何時も争ひの後には、袂で顔を掩ひ疊に突伏して、背中を微かに波打たせながら涙を噉らなければならなかつた。慘酷な彼は、しかし、盡をなめながら自分の無能を悲しみ境遇を哀しみ、横目使ひに彼女の波打つ背中を眺めるのであつた。

彼は毎晩のやうに酔つて歸つた。曲つた理窟を吐き散らしながら、庭の樹木に額を突き當て、入口の戸に肩をぶつつけては薄暗い室の中によろけ込んだ。

「彼女は家賃の催促をおそれる家主の前に、彼の大聲と狂態とを氣にした。けれども彼は庭の樹木に臺詞のやうに説教を繰返し、入口の戸を敲きこらしめた。酒の勇士は決して何者をも恐れなかつた。おそれるべき者の前には虚勢を張り、謹しむべき者の前には狂態を投げ出した。」

「本當に！ あなたと來たら、また酔つて來なはつたのかね？ 今夜も……」

「そんなこと、訊かなくつたつて判つてらあな。」

「本當に、留守してゐる私ばかり、どんなに心配してゐるかわかりへんぢやないの……」

家主は今日も家賃の催促にやつて來たのだつた。そして、その時家主は暗に彼の不身持を罵り狂態を指摘した。若し家賃を入れ得なければ早速退いてくれとまで言殘した。

「酒ばかりもおやめなはれな！」

「なに？ 手めえは、またそんなことをぬかしやがる。酒を吞まずに人と交際が出來ると思ふのか、手めえ。」

「ふむ、交際…… そんなになるまで吞まなければ、交際は出來ねえぢやろうか？ ——そのお金があつたら……」

彼女はそのお金があつたら、郷里の老父母の手に殘して來た自分の私生兒に、幾分でも送つてやり度かつたのだ。

——彼女は彼と結婚する前に、父親の知れぬ男の子を生んだ。彼女はそれを兩親の手に自分の弟として預け、彼のところへ嫁に行つたのであつた。が、彼のところへ行つてからは再び身持にならなかつた。彼女の愛は兩親の手許に殘したその子の上に集中した。彼女が、郷里を憧れる原因も、夫に物質の豊かなることを強要する原因も其處にあつた。

「その金があつたら、家賃にまはしたらいいだらうつて？」

「え。さうどすともさ。」

「チエツ！ ふざけるねえ。そんな金があるけえ。——おい、水を汲んで來い。」

彼は腹掛けを外つて座敷の隅に投げつけた。中でどしんと重々しい音がした。

「自分で汲んで來たらいいがね。いい氣になつて酔醒めの水を汲みに來たと思はれるから、わしは行かんが。」

「くだらねえ遠慮をするねえ。」

「だつて本當ぢやがね。」

「ぢや、ちよつと酒を買つて來い。」

「酒屋だつて、近所の酒屋ぢや、皆んな噂してゐるわね。圖圖しい奴等だつて……」

彼女は彼の前に、すねて見せる必要を感じた。彼女はあくまで動くまいと決心した。

「手めえは、どうしても行つて来ない氣かえ？」  
彼の把つた大きな鐵火箸が女の頬に飛んだ。仄白い頬は鼻の横から耳へ向けて、紫色に腫れあがつた。涙はその上を流れ傳つた。

彼女は、狂人のやうに郷里を憶れた。現在の、自分の悲しみの全てを、自分一人の秘密の子の上に移して。

裏庭にカサコソと囁く落葉の音にも彼女は全身を耳にした。氣弱な彼女は、家主の家賃の催促を、立退命令を、今は死よりもおそれてゐた。

破れた障子の穴から彼女は折折裏庭を覗いた。其處には大きな樺と檜の木が幾本も立つてゐた。赤い烏瓜は落葉をあびながら檜の青葉の間にぶらさがつてゐた。樺の落葉はカサコソともの哀れな囁きを交しながら死場を求めて歩いた。

彼女は落葉の囁きを信じきれなかつた。落葉の轉るのを見て初めて憂鬱な心の底でほつと溜息をついた。  
併し、家主は、酒びたりの彼のことを考へると、決して容赦の必要は無いと思つた。

「やあ、おかみさん、本當にどうしてくれるんだね。こつちだつて、さうさう何時までも、ただ貸して置くわけにや行きませんや。少しはものを考へて……」

「あの……あの……」

彼女は幾度も繰返す辯解に自分ながら顔を赤らめた。

「あの、あのぢやありませんや。本當に！」

家主は直ぐに眼に角を立てた。

「何しろ仕事がありませんもんで……」

「家賃も拂はねえで、よく毎晩毎晩酔つて歸れるもんだな。よく外聞が悪くなく。」

「……………」

「今夜歸つたら、よく相談して下さいな。明日になつてもくれなけえ、どうしたつて明日出て貰ひますからね。」

「……………」

「本當に、こんな圖圖しい人達は初めてだ。」

家主の背後には近所の人達の顔がちらついてゐた。

彼女は神棚の前に泣伏しながら、郷里の老父母や自分の子供のことを想ひ描いた。

彼等夫婦は、この東都の郊外に移つて来るまでは、彼女の實家から五六里はなれた或る町に盛んな生活を営んでゐた。

その頃の彼女の生活は幸福にも多忙を極めて居た。彼女は多くの仕事に忙殺されてすべての悲哀を忘れ、孤獨の淋しさをしみじみと味ふいとまを持たなかつた。

それはあまりにもめまぐるしい程多くの人人が彼等の家に入出して居た。實家から寄せられた便りに、自分の生んだ父無兒の境遇を想ひ描いて、涙を持つて思ひなつかしむには、あまりに多くの職人が彼女の四邊を取巻いてゐた。自分の生んだ唯一人の兒の身の上と、自分の身の上との、哀しい約束を泣くには、あまりにも多くの客が彼女を煩はした。

其事は、しかし過去の彼女の生活に取つて、最も幸福なことではなければならなかつた。現在の彼女の生活は不幸にも、あまりに暇があり過ぎた。

彼女は終日なすこともなく、長火鉢を抱き込んで、郷里の老父母の手に残した、自分の生んだ唯一人の父無兒のことをトラジカルに想ひ描かねばならなかつた。彼女の頬には常に涙の跡が蛭蟪の匂つた跡のやうに光つてゐた。

郷里の便りは彼女を憂鬱にし強烈なホームシックにかからせた。彼女が欣びの微笑の中に顔を赤らめて燃える情熱を示すのは、その便りを通讀する一二分間ある時は受取る一刹那に過ぎなかつた。彼女は毎時その手紙を固く握りしめて、冷めたい空気を睨つと凝視めた。蒼白い顔の上を涙は頬に溝をうがつ程流れ傳つた。

「今日もあなた、家主さんが來ましたよ。ほんまに、此頃は、もう毎日なんぢやから、そして、今日中に家賃を入れてくれなければ、明日はどうしたつて立退いて貰ひませうつて……」

「何言つてやがるんだえ？ 勝手にしやあがれ！」

「そりや、あなたの方が無理ぢやありやへんの？」

「何が無理なもんか。そんな事を言へやがるなら、此方だつて意地だ。金があつたつて拂ふもんか。何方が敗けるか訴へて見ろ！」

「あなたはそんなことばかり…… 本氣で言つて居なはるの？」

「あたりめえさ。手めえは、俺が酔拂つて、いいかげんな事を言つてると思つてやがるんだらう。こちとら、いくら酔拂つたつて氣は確かなんだ。」



「そんなことばかり…… 本當に動かない積りどすの？」

「きまつてらあな。いつまでだつて居てやる。」

「そんなことを言ははらんで、何處かへ引越しなはるか、郷里に歸りなはるか。——私たまりまへんがね、ほんまに…… わたしは本當に、死ぬよりも辛いんぢやから……」

「何を贅澤なこと吐かしがるんだ。毎日毎日、一日中何をしなければなりやねえてこともなく、ぶら遊ばして置いてやれあいいいことにしやがつて、何が死ぬより辛いんだ。」

「わたしにあ、郷里に居た時のやうに、忙しい方が却つていいんぢやから……」

彼女は實に自分の心の眞實な要求を打明けてゐるのであつた。涙の跡の光る頬には、またしてもほとほと熱い涙が流れた。

「あなた、酒ばかりもおやめなはれ。毎晩酔つて歸るもんぢやから、家主さんだつて、氣を悪くしてゐなはるんどすよ。」

彼女はないじやくりながら希つた。

「子供も無い俺が、酒も吞まずに暮されると思ふのかえ？ 手めえは……」

彼女はぎつくりした。自分の秘密を、自分が郷里に歸りたがつてゐる理由を、彼が感付いてゐるのではないだらうか？ とさへ彼女は思つた。

太陽は地上にうつろな光を落し、空氣は肌に冷えびえと觸れ、落葉は墓場を探し求めるものの如くにカサコソと哀しい音を立ててゐた。

陽光のあたらない室の中は、死馬の眼のやうな灰色の冷めたさと、無氣味な淋しさに包まれてゐた。彼女は郷里の老父母から來た手紙をしかと胸に抱きしめて、食卓に額をすりつけてシクシクと啜泣してゐた。彼女は大聲をあげたかつた。現世のすべてのものを打毀してやりたいやうな衝動にかられてゐた。

その手紙には、彼女のたつた一人の父知らぬ子——京一が流行感冒で急死した——ことが傳へられてあつた。彼女はその手紙をしつかり抱きしめて、自分の意識を現在に止置かうと努めた。咽喉から飛出さうとする音聲を制し全身の暴的な發動慾を制御した。

彼女は、若し彼に打明けることの出来る子供だつたらと思はずに居られたらうか？ 彼女は京一が如何に寒く苦しかつたかを思つた。自分のふところに温めてやることの出来なかつたことを嘆き哀しんだ。自分の血を分けた小さな肉體が、わなわたと寒さに顫へながら、葡萄酒になつて、深い井戸の底のような薄氣味の悪い冷めたくも薄暗いところに落ちて行くさまが眼にちらついた。

彼女の明るい幸福な希望は永久に失はれた。彼女は長いことこの事を哀しみ悶えなければならなかつた。彼女は尙この後もこの悲哀の心が繰返されるであらうことをおそれた。

7

彼は酔つて歸つた。彼の家の前はいつになく賑かだつた。

庭には焚火がされて、そのまはりを多くの人人ががやがやと取圍んでゐた。彼はどろんとした眼を睨り、よろめきながら人人の方へ歩み寄つた。

「毎日ぶらぶら遊んで居られる身分で、何の苦勞もなさうに見えたが……」

家主はすべての人人に告げてゐた。醫師は、ホワイトシャツの袖をまくし上げて、注射の効を見てゐた。人人は死因を訝かり秘密を探り求め、こそこそ囁き交してゐた。

「大工さん、おかみさんがまあ……」

顔見知りのおかみさんが氣の毒な表情を彼に示した。

「……」

彼は唇を噛みしめて沈黙のうちに彼女の蒼白い裸體を凝視めた。黒髪が肩の上に亂れてゐた。

「家主さん。忘れちゃいけないぜ。手めえは人を殺したんだぞ。」

彼は聽て家主の方へ歩み寄つた。人人は一齊に其方へ視線をふりむけた。

「なあ！ 家賃を拂はねえからつて、人を殺す程の催促をして……」

固く唇を結んだ彼の顔には、幾條かの涙が流れて焚火に光つた。

「別にわしは、ひどい催促をしたわけでもないんだが……」

家主は外れた眞理を信じかけた。

「さうぢやなくつて、宅の噂が自殺する筈はねえ！ 覚えてろ！」

「どうもわしは……」

家主は言ひよどんだ。

多くの人人は大工の言ひぶんを立てようとした。無氣味な沈黙が人人の心を占め、焚火はちよろちよろと消えかかつた。

星は不吉な秘密を孕んで冷めたくまたたいてゐた。またしても裏の方から、深井戸の釣瓶の繩が永劫の別れを告げようと無氣味な音を闇の空間に投げ出した。

——一九二五年十一月二十二日——

## 不幸な母親の話

お美代婆さんは、長男に死なれてみると、矢張、嫁や孫によりも、次男の熊次郎の方に餘計心を惹かれた。

財産も、勿論、二段歩にも足り無い屋敷まはりの瘦畑と、牛小屋にも同じい古ぼけた住家とがあるだけで、財産と云ふほどのものでも無いが、是等のものも、やはり熊次郎に譲り度かつた。

然し、長男の作太郎が血を吐きはじめた頃には、二年程前に硫黄山へ出稼ぎに行つたまま、家を飛出して行つた熊次郎からは、何處に居るものか消息すら無かつた。初めの一年程は、石の巻の醤油屋に奉公してゐるといふことを、熊次郎から手紙を貰つたと云つて話してくれた青年などもあつたのだが、今では、自分の家ばかりではなく、友達にさへも便りは無いらしかつた。お美代婆さんは、厭だと思ひながらも、親類の人達の作つた策案どほりに暮して行かなければならなかつた。

嫁のおさよに婚養子を入れ、孫の英吉に家督を相続させること。――第一に、お美代婆さんには、この条件が気に入らなかつた。英吉に家督を継がせることには異存がないとしても、おさよに養子を入れると云ふことは、取りも直さず、赤の他人に自分の老後を托さなければならぬことになる。そ

ればかりか、此處に残つてゐる二段歩足らずの畑地も、英吉の代まで行かぬうちに、おさよの婿となる赤の他人が、屹度賣拂つて了ふに相違ない。何よりも婆さんはそれが悲しかった。

「新聞さ、兄が死んだからつて出せば、屹度歸つて來ると云ふ話だけつども、俺、何十圓と云ふ金は出せねえから……」

誰から聞いたのか、お美代婆さんは、直ぐ近所になつてゐる弟の家で開かれた第二回の極く内輪だけの親族會議の席上で、泣きさうに口を歪めながら、こんなことも言つて見た。

然し誰も（俺が出さう）と云ふものは一人もなかつた。ばかりか、あまりに偏執する婆さんの氣持に、却つて反感をさへ持つやうな具合であつた。

「姉は少し、自分の田さばり水を引ぎでえやうな氣持を持つてのでねえがな？」

弟は、諭すやうな口調で云ふのであつた。

「熊次郎に歸つて貰へてえ氣持は尤なごつたけど、併し、榮吉と云ふ相續人があるのだがら、まあ、おさよさ——他人さばり讓るやうな氣持して厭だべが……」

「俺、そんなことはねえ。財産だつてこれ、なんにもねえのなもの。そんな、財産なんかのことではねえ。ほんとに、自分の息子に逢ひ度えのせえ、そんな風に思はれるなんて……」

此處まで言つた時、お美代婆さんは急に咽喉が固へて、何も言へなくなつた。彼女は、それが癒る

まで、短い筒袖で眼を掩ひ、身體を押し揉むやうにして居た。

「さうかも知れねえが、しかし、熊次郎が歸つて來たら、熊次郎と一緒にでもしねえ限り、おさよだつて居られねえんだ。さうしつと、第一、榮吉が可哀想でねえがな？」

「何もねえ、作の野郎せえ死なねえげ、こんな心配もいらねえのだ。親不孝野郎め！ なあ作！ 汝は親不孝だぞ。俺どこ残して先に死にあがつて、汝は親不孝だぞ。なあ作！ 親不孝野郎！」

お美代婆さんは、たうとう其處に顔を伏せて、大聲に泣き出した。

\*

併しながら、お美代婆さんは、結局、親類の人人が立ててくれた策案どほりに、故人の一週年でも濟んだら、おさよに婿を貰つて、この二人の他人に、老後を見て貰ふと云ふことにしなければならなかつた。

そして、それからと云ふもの、お美代婆さんは、何時も凝つと考へ込んでゐたり、わけもなく涙を流したりするやうになつた。正月の休みも、婆さんに取つては却つて、いろいろと悲しいことを思ひ出させる時でしかなかつた。

「俺のやうな不幸ものはねえよ。良人には先立たれて、漸く子供どもさ追付いだと思ふど、一人は先に逝つて了ふし、一人は逃げ走つて……」